田原本町埋蔵文化財調査概要　6

唐古・鍵遺跡

第21・23次発掘調査概報

1988

田原本町教育委員会

第１号木棺墓

序

このたび、昭和60年度に行いました唐古・鍵遺跡の第21※・23次発掘調査の成果を、田原本町埋蔵文化財調査概要６にまとめて発刊いたしました。

第21次調査は店舗の建築によるものでしたが、特に第23次調査におきましては、昭和12年始めの第１次調査地でありました唐古池の東側内堤を、老朽ため池整備事業が行われるのに伴って事前調査したものです。

末永雅雄先生が調査された49年前と同じように、厳寒の中を、霜をふみ氷を割っての調査でありました。

この調査では、木棺におさめられた若者の人骨、当時の布片や巴形銅器など貴重な遺物が多数出土しました。ここにその概要を報告出来得ます事は誠に幸いであります。

本編集にあたり御教示賜りました先生方並びに調査に協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

※　第22次調査は、昭和60年度「田原本町埋蔵文化財調査概要４」で第24・25次調査分と共に報告しています。

奈良県田原本町教育委員会

教育長　岩　井　光　男

例　　言

1．本書は、菅生木材株式会社（代表取締役　菅生清左衛門）の依頼により、田原本町唐古78―4番地他において実施した。自動車店舗及び整備工場建築工事に伴う事前発掘調査（第21次調査）ならびに田原本町唐古126番地において実施した老朽ため池整備事業（田原本町経済課）に伴う事前発掘調査（第23次調査）の2件の概要報告である。

2．調査は、田原本町教育委員会　社会教育課（昭和62年4月より文化財保存課）が担当し、第21次調査は昭和60年5月8日から同年5月13日、第23次調査は昭和60年12月9日から昭和61年2月25日にかけて実施した。現地調査は藤田三郎が担当した。

3．調査にあたっては、菅生木材株式会社代表取締役　菅生清左衛門氏より多大な御理解と御協力とを賜わった。

4．現地での作業にあたっては、菅生木材株式会社物販部販売部長　今西正博氏の手をわずらわせた。

5．調査補助員としては以下の学生諸氏が参加した。

第21次調査

桑原久男（京都大学大学院）、前川浩一（奈良大学、現貝塚市教育委員会）、加田隆志（奈良大学、現鹿島市教育委員会）、豆谷和之・広瀬克彦・久山高史・田村昌弘（奈良大学）

第23次調査

塚田良道（同志社大学大学院、現行田市郷土博物館）、吉井秀夫（京都大学）、中山和之（奈良大学、現淀江町教育委員会）、加田隆志・前川浩一・豆谷和之・広瀬克彦・久山高史、出土遺物の整理作業にあたっては、桑原久男、豆谷和之、広瀬克彦、河野一隆（京都大学）、梅原一恵、河野典子の学生諸氏の協力があった。

6．本書の作成には下記の方々から御教示、御協力を賜わった。記して感謝の意を表します。

赤澤　威（東京大学総合研究資料館）、石野博信・寺澤　薫（奈良県立橿原考古学研究所）、小西　孝（京都工芸繊維大学）、酒野晶子（東大阪市立郷土博物館）、高橋昌子（東京大学総合研究資料館）、中村友博（山口大学）、布目順郎（富山大学）、埴原和郎（国際日本文化研究センター）、馬場悠男（国立科学博物館）、森　浩一（同志社大学）、竹村利美

7．出土遺物の布製品及び第22次調査時出土の結び目様糸塊については布目順郎先生に鑑定を依頼し、「4．唐古・鍵遺跡出土の繊維製品について」として玉稿を賜わった。

8．出土人骨については、第13次調査時出土のものも合わせて埴原和郎先生に鑑定を依頼し、「5．唐古・鍵遺跡の人骨」として玉稿を賜わった。

9．唐古池の築造に関する古文書の一部は、鍵在住の竹村利美氏所蔵のものを閲覧する機会を得た。記して感謝します。

10．本概報の執筆はⅢ―4．5を除き、藤田が執筆し、編集にあたった。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．第21次発掘調査の概要
1．調査の契機と経過……3
調査日誌抄
2．調査の成果
(1)　調査の全容……4
(2)　堆積土層……4
(3)　遺構と遺物……6
ＳＤ―01、ＳＤ―02
3．まとめ……8
Ⅲ．第23次発掘調査の概要
1．調査の全容……9
2．遺　構
(1)　堆積土層……10
(2)　弥生時代前期の遺構……14
ＳＫ―152・ＳＫ―153・ＳＫ―154、ＳＸ―201
落ち込みⅢ―１溝状遺構・落ち込みⅢ―２溝状遺構
ＳＤ―201、木棺墓
(3)　弥生時代中期の遺構……18
ＳＫ―123、ＳＫ―151、ＳＫ―131、ＳＫ―118
ＳＫ―113、ＳＤ―103、ＳＤ―101、ＳＤ―106
ＳＤ―1102、落ち込みⅠ溝状遺構、北方砂層
(4)　弥生時代後期の遺構……24
ＳＫ―103、ＳＤ―1101
(5)　古墳時代の遺構……25
ＳＫ―102、ＳＫ―124
(6)　中世・近世の遺構……25
3．出土遺物
(1)　土　器……26
ＳＤ―201出土土器、ＳＫ―153出土土器、
落ち込みⅢ―２溝状遺構出土土器、ＳＫ―154出土土器

ＳＫ－123出土土器、ＳＫ－151出土土器
ＳＤ－103出土土器、ＳＫ－113出土土器
ＳＤ－1101出土土器、ＳＫ－103出土土器
ＳＫ－124出土土器、搬入土器、弥生土器の文様・線刻画
(2) 木製品……51
農耕具、食膳具・脱穀具、狩猟具・武器形木製品
工具・建築部材、用途不明品
(3) 石　器……54
打製石器、磨製石器、石製品
(4) 土製品……56
(5) 骨角製品……56
(6) 祭祀遺物……59
(7) 金属器・玉類……60
(8) 自然遺物……60
獣骨、種子類
4．唐古・鍵遺跡出土の繊維製品について……61
5．唐古・鍵遺跡の人骨……74
6．まとめ……80

Ⅰ．はじめに

唐古・鍵遺跡の調査は昭和52年に第３次調査が実施されて以来、毎年何らかの形で発掘調査がおこなわれている。近年特に国道24号線沿いの開発が進み、これに伴う発掘調査や遺跡内の公共事業（老朽ため池整備事業、用水路整備事業等）も増え、本来、実施すべき範囲確認調査に対し、緊急発掘調査の方が大きく上回っている。幸いにも開発行為地は遺跡の周辺地であったため、遺跡の範囲を確定するのに的確な調査地となる場合が多く現状ではその成果を生かせている。このような諸々の調査から現在ではほぼ遺跡の範囲をおさえることができるようになってきた。

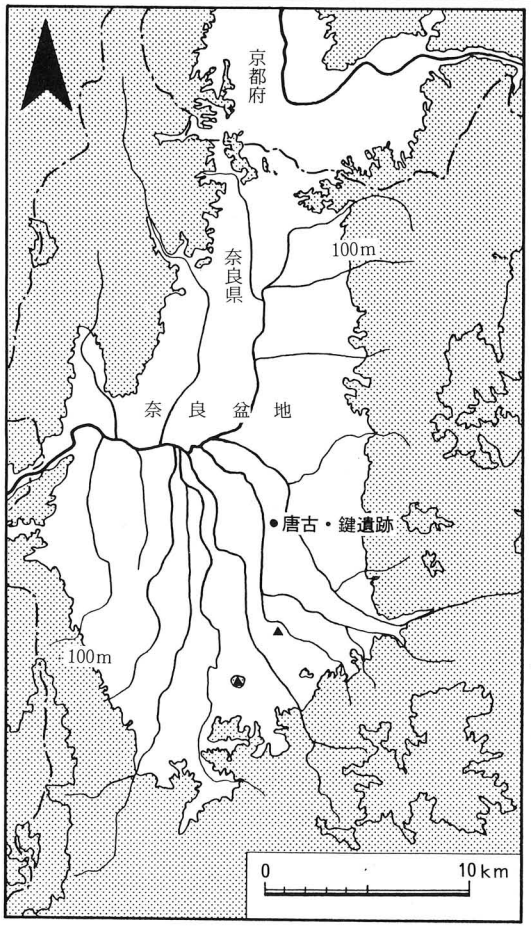
第１表　唐古・鍵遺跡発掘調査一覧表

調査次数	所在地	原因	地目	土地所有者	調査期間	調査面積
第21次	田原本町唐古 78-4、79-22	自動車店舗建築整備工場	宅地	菅生木材株式会社	1985.5.8～5.13	約65㎡
第23次	田原本町唐古 126番地	老朽ため池整備事業	池	唐古大字	1985.12.9～1986.2.25	約200㎡

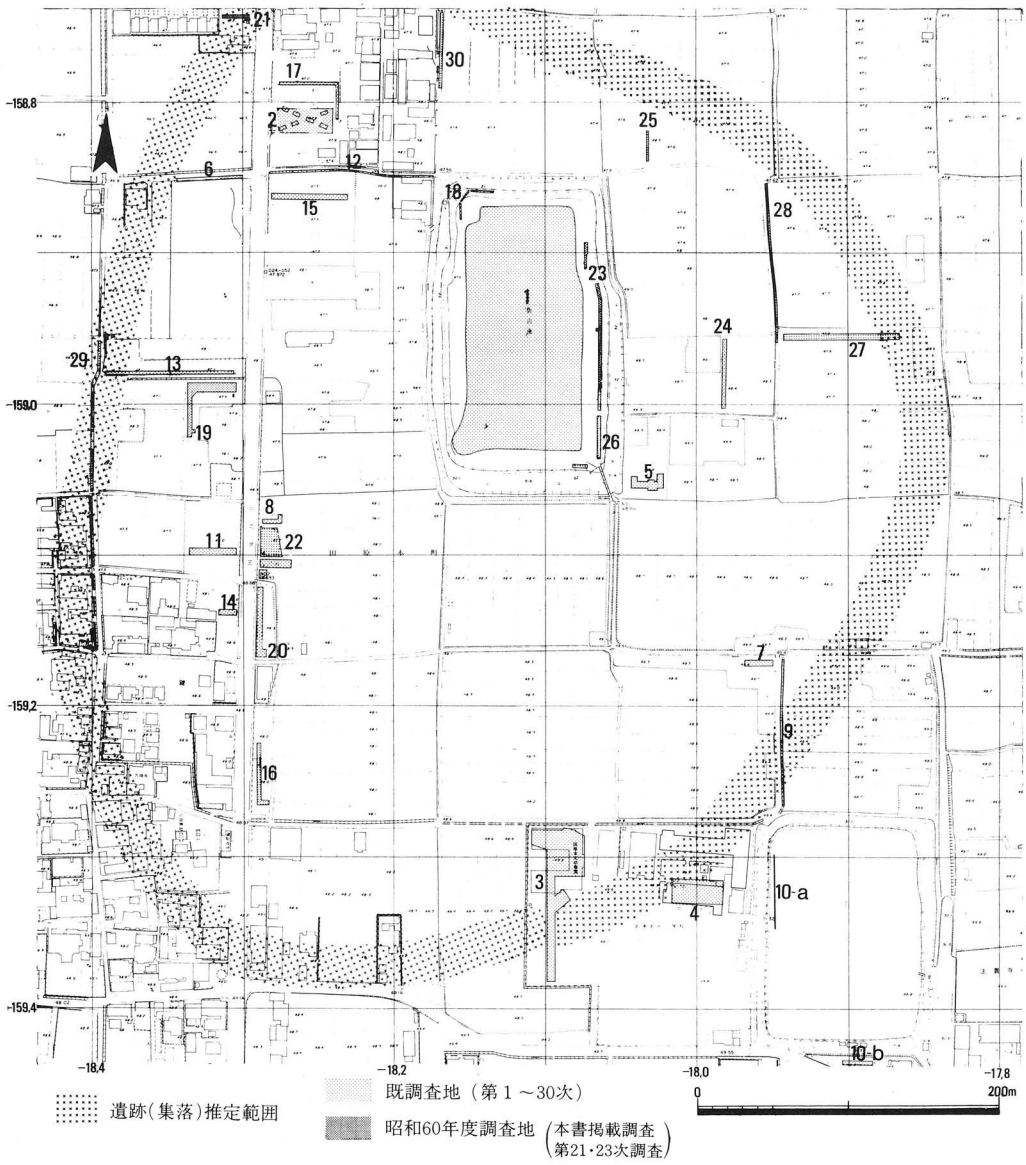
さて、昭和60年度の調査は第21次から第25次までの計５件分であったが、第22次・第24・25次は国庫補助事業であったため、『田原本町埋蔵文化財調査概要』４に掲載した。本書では残りの第21次・第23次分について概要を報告する。

第21次調査は遺跡の最北端で、国道24号線沿いに位置する。店舗建築に伴う事前調査であった。調査では溝二条を検出し、遺跡内であることが確認された。

第23次調査は唐古池内部で、池の東側堤防沿いの調査となった。この調査では第１次調査で検出された北方砂層や未検出であった多数の大溝を検出した。さらには本遺跡で初めての成人木棺墓二基が発見されたし、遺物では紐や織物断片、巴形銅器など数々の重要遺物が出土した。このように第23次調査の遺跡・遺物ともに豊富で、唐古・鍵ムラの内容を解明する上で重要な調査となった。



第１図　唐古・鍵遺跡の位置



第２図　唐古・鍵遺跡の範囲と調査地点

Ⅱ．第21次発掘調査の概要

1．調査の契機と経過

昭和60年４月16日、菅生木材株式会社より田原本町大字唐古78―４、79―22番地の発掘届出書が提出された。本届出地は唐古・鍵遺跡の北西部のはずれにあたる。この付近では本地の南東50ｍで第17次調査をおこない、環濠になると思われる溝を３条検出している。この為、田原本町教育委員会では事前の発掘調査が必要と判断し、発掘調査は本教育委員会が受けもつこととなった。

当該地は既に約1.5ｍの盛土がなされており、また、敷地が約440㎡と小規模であったため、調査は遺構確認を主とするトレンチ調査となった。トレンチはＬ字形に設け、その敷地内で廃土処理をおこなったため、調査面積は65㎡（実質40㎡）という小規模なものになった。調査は昭和60年５月８日から同年５月13日までを要した。調査の結果、溝遺構と落ち込みあるいは溝と思われる二つの遺構を検出した。このことから、本地まで唐古・鍵弥生ムラの一部がおよでいることが判明し、遺跡北西部の様相をとらえることができた。

調査日誌抄

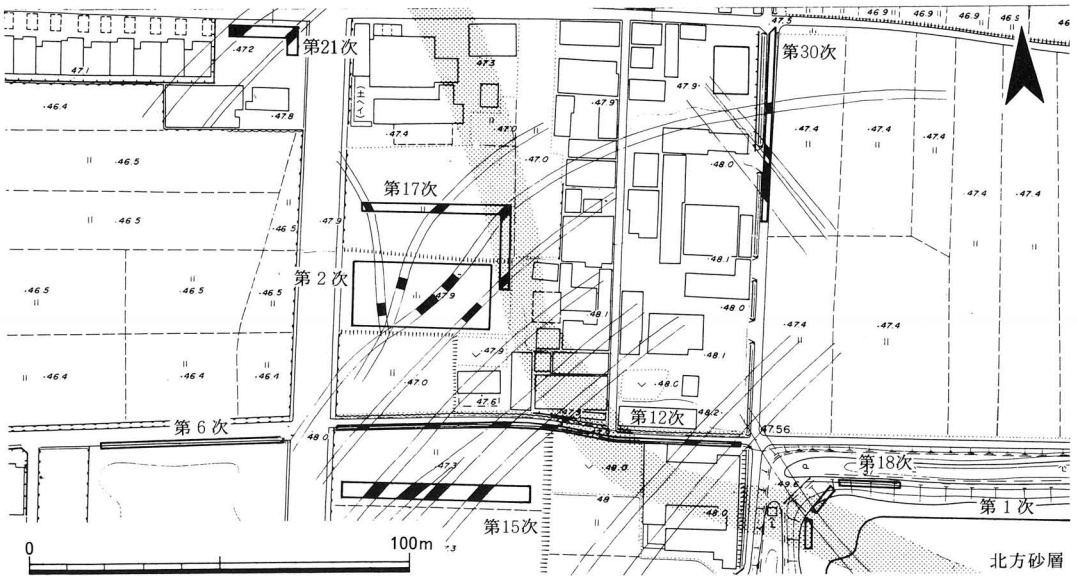
５月８日　トレンチを設定し、ユンボにて盛土及び、水田耕土層等を除去する。遺構面を検出し、トレンチ両端で溝らしきものを検出。トレンチ東端の溝をＳＤ―01、西端の遺構をＳＤ―02とする。両溝ともに植物遺体多し。

５月９日　ＳＤ―01を完掘する。写真撮影。ＳＤ―02の調査。横グワ出土。

５月10日　ＳＤ―02の調査。完掘する。全景写真の撮影及び土層断面図の作製。降雨にて中断する。

５月11日　遺構図及び土層断面図の作製。土層・砂サンプルの採集。本日をもって調査を終了する。

５月13日　埋戻し作業



第３図　第21次調査地付近の既調査図（Ｓ＝1/2000）

2．調査の成果

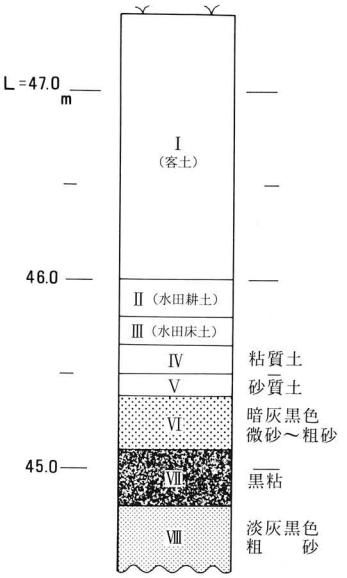
(1) 調査の全容

本調査地は遺跡の北西部にあたり、第17次調査地の北西約50ｍ地点である。この付近はムラの環濠帯にあたる部分で、土坑等の遺構は検出されていない。今回の調査でも溝（環濠）の遺構を検出することを想定し、トレンチを設定した。トレンチは幅3.5ｍ、長さ17.5ｍの東西に長いトレンチとした。トレンチ東端で南へ4.0ｍ拡張し、全体はＬ字形の調査区で、２段掘りとした。

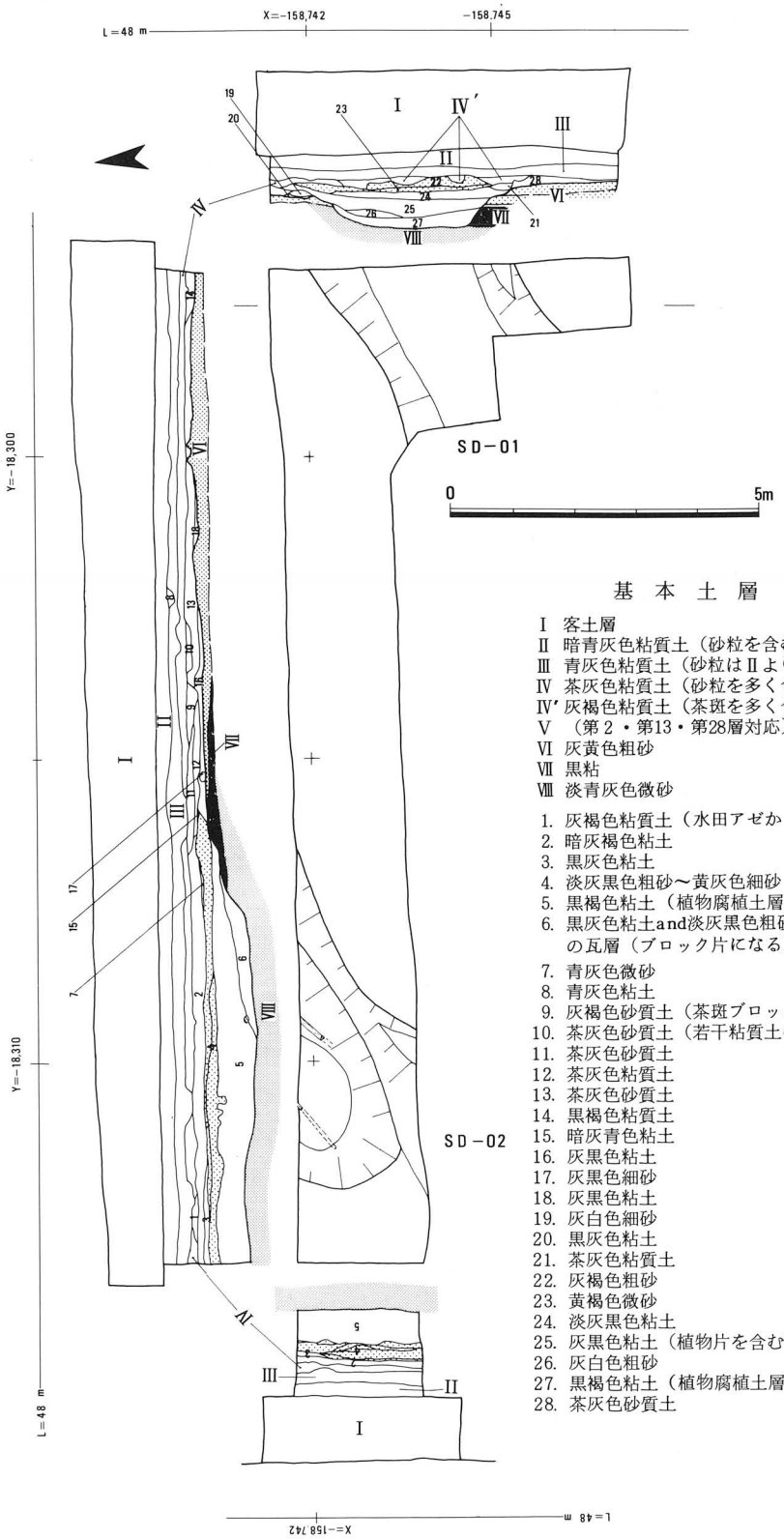
調査は整地盛土層、水田耕土層、水田床土層等を機械力をもって除去し、その後、人力による発掘作業を進めた。その結果、弥生時代の溝状遺構を二つ検出した。遺構内には遺物も少なく、弥生のベース面も安定していないことから、ムラはずれの様相を示しているように思われた。しかしながら、唐古・鍵遺跡の二十次におよぶ調査の中で、最北端にあたる調査として溝状遺構を検出し、その内容を明らかにしたことは重要な成果となった。今後、さらに北方への調査が必要となってくるのであろう。

(2) 堆積土層

本地の基本土層は大きくⅧ層まで確認できる。1.5ｍにおよぶ客土（第Ⅰ層）を除くと次のように構成されている。第Ⅱ層：暗青灰色粘質土層（水田耕土層）、第Ⅲ層：青灰色粘質土層（水田床土層）、第Ⅳ層：茶灰色粘質土層、第Ⅴ層は不均一で種々な土層で形成されている。トレンチ西半では暗灰褐色粘土層、トレンチ東半では茶灰色砂質土層である。このように層が異なるのはトレンチ西半でＳＤ―02の埋土上で形成されたためであり、トレンチ東半は第Ⅵ層である微砂層の上位で形成されたことが原因と考えられる。第Ⅵ層は暗灰黒色微砂層でトレンチ全面にみられるが、東へいくほど微砂から粗砂へとその粒度が漸位的に変化していく。第Ⅶ層は黒色粘土層、第Ⅷ層は淡灰黒色粗砂層であるが、トレンチ東端では淡青灰色微砂層へと変化している。以上の基本土層中、第Ⅴ～Ⅷ層は無遺物層で弥生以前に形成されたものである。遺構は第Ⅳ層上面でＳＤ―01、第Ⅴ層上面でＳＤ―02を検出した。したがって、弥生以降の堆積はほとんどないと考えられる。このようなことから、弥生時代の遺構面は標高45.5ｍ前後となり、ムラの南東部とは２ｍ低く、ムラ内部にあって最も低い所に立地することが判明した。



第４図　第21次調査地基本土層図



基　本　土　層

Ⅰ　客土層
Ⅱ　暗青灰色粘質土（砂粒を含む）
Ⅲ　青灰色粘質土（砂粒はⅡより少ない）
Ⅳ　茶灰色粘質土（砂粒を多く含む）
Ⅳ′灰褐色粘質土（茶斑を多く含む）
Ⅴ　（第２・第13・第28層対応）
Ⅵ　灰黄色粗砂
Ⅶ　黒粘
Ⅷ　淡青灰色微砂

1. 灰褐色粘質土（水田アゼか？）
2. 暗灰褐色粘土
3. 黒灰色粘土
4. 淡灰黒色粗砂～黄灰色細砂
5. 黒褐色粘土（植物腐植土層）
6. 黒灰色粘土and淡灰黒色粗砂（ベース流れ込み）の瓦層（ブロック片になる）
7. 青灰色微砂
8. 青灰色粘土
9. 灰褐色砂質土（茶斑ブロックを含む）
10. 茶灰色砂質土（若干粘質土の所有り）
11. 茶灰色砂質土
12. 茶灰色粘質土
13. 茶灰色砂質土
14. 黒褐色粘質土
15. 暗灰青色粘土
16. 灰黒色粘土
17. 灰黒色細砂
18. 灰黒色粘土
19. 灰白色細砂
20. 黒灰色粘土
21. 茶灰色粘質土
22. 灰褐色粗砂
23. 黄褐色微砂
24. 淡灰黒色粘土
25. 灰黒色粘土（植物片を含む）
26. 灰白色粗砂
27. 黒褐色粘土（植物腐植土層）
28. 茶灰色砂質土

第５図　第21次調査遺構平面図及び土層断面図（Ｓ＝1/120）

⑶　遺構と遺物

遺構はトレンチの両端で検出した大溝二条のみである。両溝ともに遺物は少ない。遺物は数片の土器と若干の木製品がある。

ＳＤ－01

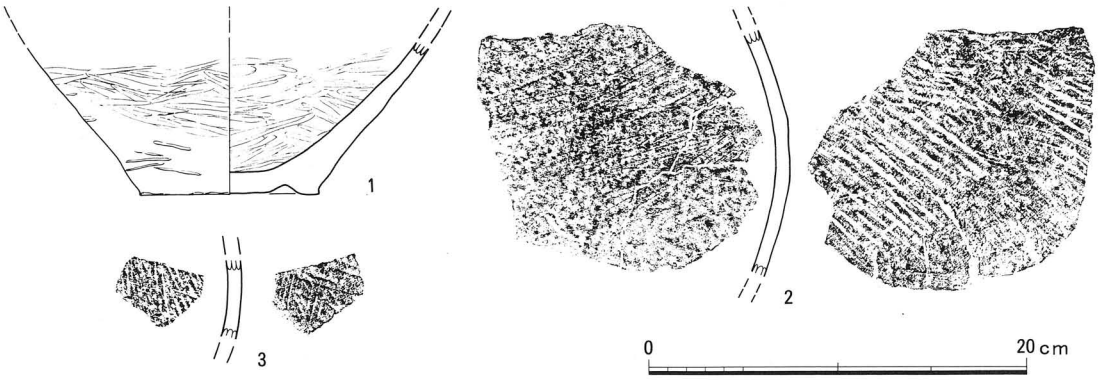
ＳＤ－01はトレンチ東端で検出した溝である。東北東から西南西方向に軸をもつ溝で、溝幅約３ｍ、深さ0.９ｍを測る。延長３ｍのみ検出したが、わずかに円弧をえがくようにめぐっている。溝の断面は逆台形を呈する。堆積土層は五大別され、下位では粘土層、上位では砂層となる。第１層：灰褐色粗砂、第２層：黄褐色微砂、第３層：淡灰黒色粘土、第４層：灰黒色粘土、第５層：黒褐色粘土となる。第４・５層では大量の小枝を含む植物腐植土層となっている。小枝には伐採に伴う切断痕がみられるものもある。人為的に投棄されたものであろう。第１・２層の砂層は溝を埋めてしまった洪水堆積層と考えられる。

遺物は第４層より第Ｉ様式の鉢の底部が１片出土した。土器はこの１点のみである。第６図－１に図示した。この土器は底部裏面に輪状の凹みをもつ。凹み部から底部中央には布圧痕があるがケズリによって削られている。また、底部の縁辺には植物繊維の圧痕が横位方向につく。内外面にはミガキ調整がみられる。色調は暗褐色を呈し、胎土は１㎜前後の砂粒を多く含んでいる。他の遺物としては裁断痕のある板片や焼木があるのみで、製品はない。小枝も多量に出土しているが、切断痕以外の細工はみられない。

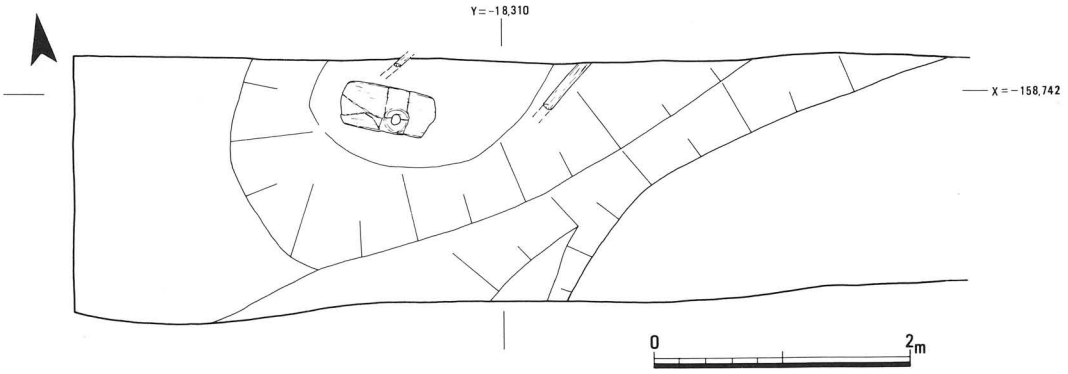
本溝は第Ｉ様式の土器片を出土しているが、遺構掘削のベース層からみるとＳＤ－02より後続するもので、弥生中期後半以降の所産であろう。第17次調査等の遺構の関連から中期末から後期初頭の可能性が高い。

ＳＤ－02

トレンチ西端で検出した溝状遺構である。掘削や堆積土層から落ち込み状の遺構の可能性もある。東肩のみ検出し、東北東から西南西に軸をとり、ＳＤ－01と並走する。規模は幅４ｍ以上、深さ１ｍを測る。底面はほぼ平坦であるが、中央部付近はやや深くなる。堆積土層は三分層され、



第６図　ＳＤ－01・ＳＤ－02出土土器（Ｓ＝¼）



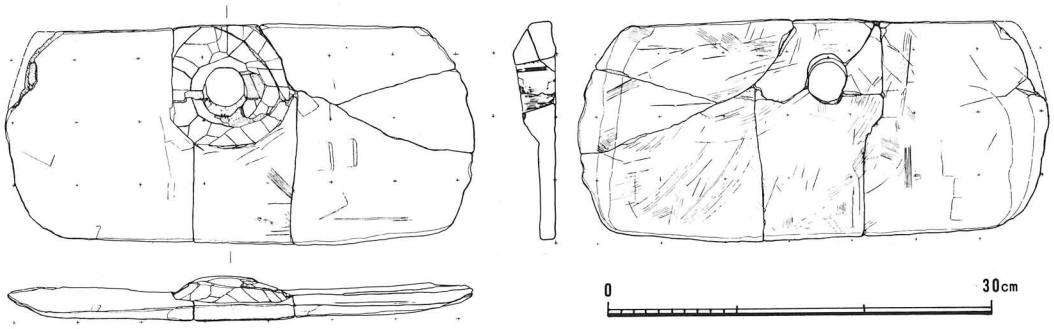
第７図　ＳＤ―02木製品出土状況平面図（Ｓ＝1/60）

東側肩部では黒灰色粘土と淡灰黒色粗砂の互層で形成されている。溝の中央部は黒褐色粘土層が0.7ｍの厚さを有して堆積している。溝の上部は淡灰黒色粗砂や黄灰色細砂層など20～30㎝前後の砂層をもって形成されており、下層の粘土層との境界は砂の浸蝕がみられる。ＳＤ―01同様、砂層の堆積をもって溝は埋没している。

遺物は下層の粘土層より出土した。土器は少なく５片で、全て小片である。木製品は多く、杭状木製品など径５～10㎝ほどの棒が溝に平行するように検出された。また、これら木製品とともに横鍬を溝底より30㎝上位で検出した。木製品は溝中央部の深み状のところに集中していた。この部分に意識的に貯木していた可能性もある。

遺物は土器と木製品である。土器は５片であるが、弥生前期の胎土を有するもの３片、中期の土器２片である。中期の土器は第６図―２・３に示した。第Ⅳ様式の大形甕の胴部片で、外面にはタタキの後ハケ調整がみられる。２の土器には体部下半にケズリ調整をおこなう。

第８図は横鍬である。完存品で、柄孔部分は柄孔に沿って丸く隆起する。柄は鈍角につく。刃部はまだ作られていないが、全体に薄く仕上げられている。身の両側もしだいに薄くなっていることから、刃部をつくり出す直前の未成品と思われる。

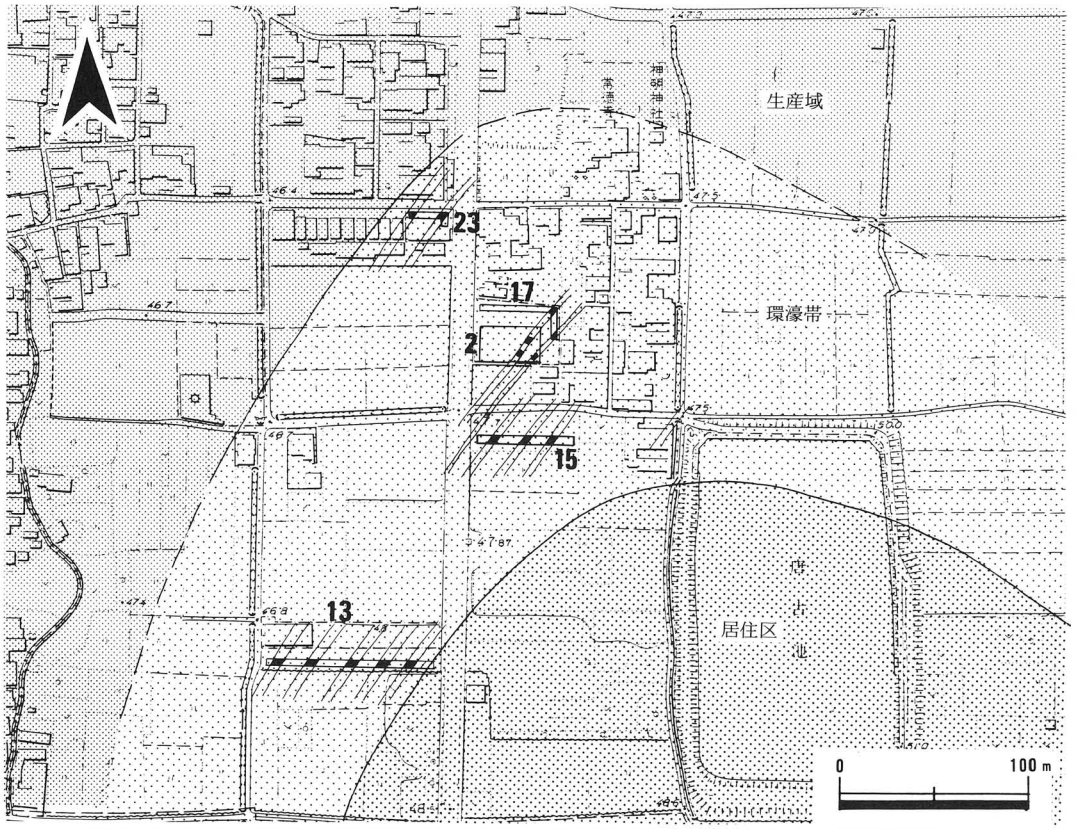


第８図　ＳＤ―02出土木製品（Ｓ＝1/6）

3．まとめ

第21次調査は唐古・鍵遺跡の最北西端に位置する場所である。今までの調査の中でも最も北の調査となった。調査面積が小さいこともあって、その内容を明らかにするところまでは至ってないが、従来の調査成果を総合し、まとめておきたい。

この調査では２条の大溝を検出した。２条の大溝はともに弥生時代中期末から後期初頭頃のものである。この時期の溝としては第15次調査のＳＤ―01・ＳＤ―02・ＳＤ―03や第17次調査のＳＤ―01・ＳＤ―02がある（第３図参照）。第21次調査からこれらの溝までは約150ｍあり、溝の方向がいずれも北東から南西方向であり、また、これらの溝の間で土坑等を検出していないことから、これらの溝は環濠で、この地域が「環濠帯」であると推察される。後期初頭段階において、唐古・鍵ムラが大きく拡がっていることが窺える。しかし、出土した遺物は自然木等が中心で、土器がわずかであることから、居住区からは離れていると思われる。また、鍬等の出土は近隣に水田域があることを示しているであろうし、切断痕のある小枝等は開墾に伴うものであろうか。このような状況から、本調査地域は居住区と生産地域との間の「環濠帯」としての空間をあらわしていると思われる（第９図）。今後このようなことは、本地域の調査で検証していく必要があるし、また、前・中期、後期末葉の様相も今後明らかにしていく必要があろう。



第９図　唐古・鍵遺跡北西部の生活空間の概念図（弥生時代中期末～後期初頭）

Ⅲ．第23次発掘調査の概要

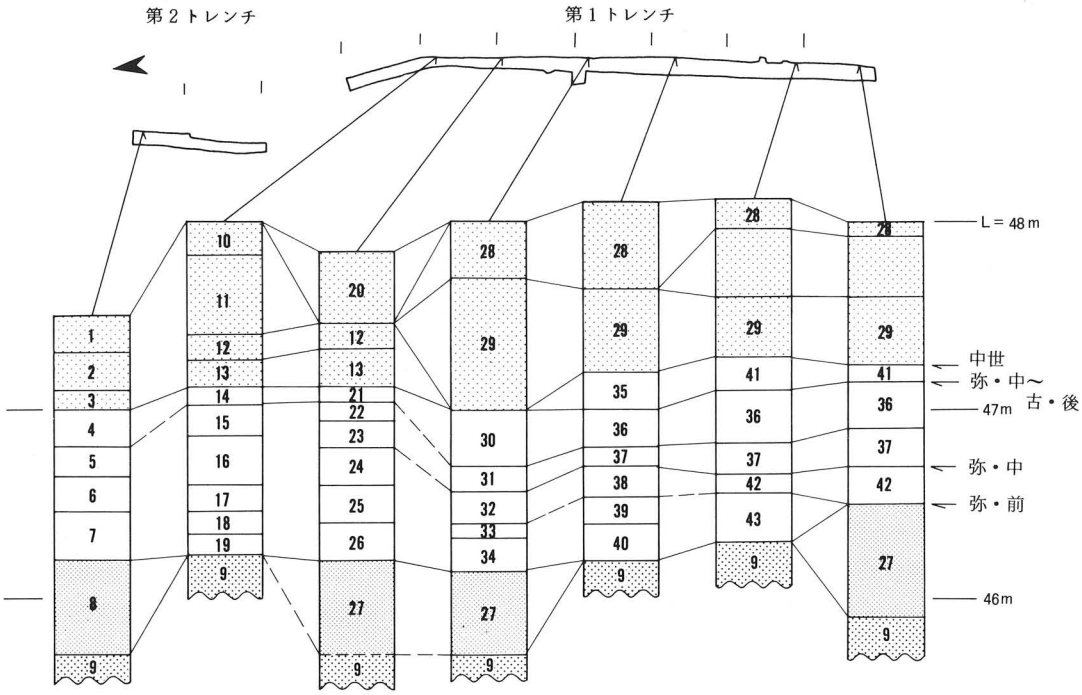
１．調査の全容

第23次調査地は唐古池内の東側堤防部分にあたる。堤防に沿うように延長100ｍを調査対象とした。樋門部分を境に二つのトレンチを設定した。南側を第１トレンチとし、幅約2.5ｍ、長さ約70ｍの調査区とした。重要遺構部分は随時、拡張した。樋門より北側のトレンチは第２トレンチとし、幅1.5～２ｍ、長さ18ｍとした。

調査は限られた範囲と期間であったため、また、池内部という悪条件や例年にない厳寒も重なり、困難を極めたが、本遺跡で初めての木棺墓を二基検出したのをはじめ、井戸や獣骨のつまった土坑、唐古池築造に関する時期の問題など新たな知見が多く得られて重要な調査となった。

発掘は池の内部にあっても池掘削時の削平はほとんど受けていないばかりか、堤防の基底部が一部かかっており、堤防築造以前の様相をおさえることができた。調査はまず、堤防盛土及び旧表土層等の中世遺構面まで機械力をもって除去した。その後、人力による調査を進めた。遺構は第１・第２トレンチともに弥生時代から古墳時代、および中世期の諸遺構を全面にわたって検出した。遺構の密度や出土遺物量は南へいくほど多く、第１次調査で検出された遺構群の実態を理解する上で重要であった。なお、第１トレンチ中央部で検出された木棺墓二基については、調査の終了段階で棺ごと取り上げをおこない、東京大学教授埴原和郎先生に鑑定をお願いした。

写真１　第23次調査　調査風景



1. 暗褐灰色粘質土
2. 黒褐色粘質土
3. 暗灰褐色粘質土
4. 黒褐色砂質土
5. 暗黄褐色砂質土
6. 黄褐色砂
7. 灰色粘土
8. 暗青灰色微砂
9. 灰白色粗砂
10. 灰褐色粘質土
11. 灰色粘質土
12. 灰色粘質土
13. 灰色粘土
14. 黒灰色粘質土
15. 黄褐色粘質土
16. 灰色粘土
17. 灰褐色砂質土
18. 灰黒色砂質土
19. 暗青灰色微砂
20. 黒褐色土・灰褐色土
21. 灰色粘質土
22. 黒褐色粘質土
23. 黒褐色粘質土
24. 黄褐色粘質土
25. 灰黄色粘土
26. 灰色粘土
27. 青灰色微砂・青灰色粘土
28. 茶灰色微砂質土
29. 黒褐色粘質土
30. 黄灰色土
31. 灰黄色粘質土
32. 灰色粘土
33. 灰黒色砂質土
34. 灰色粘砂
35. 黒褐色粘質土
36. 灰黄色粘質土
37. 灰黄色粘質土
38. 暗灰色粘土
39. 暗灰色粘土
40. 灰黒色粘土
41. 黒褐色土
42. 灰色粘土

第10図　第23次調査基本土層関連図（Ｓ＝1/40）

２．遺　構

(1)　堆積土層

調査地は南北100ｍにおよび、微高地からその縁辺部にかけての場所であったため、堆積土層は複雑な様相を呈している。そのため、基本的な堆積土層を示す良好な地点を抽出し、遺跡地の堆積状況を把握することにする。本地は唐古池の堤防盛土下にあり、厚さ0.8ｍ前後の堤防盛土に覆われている。この盛土の盛り方は第１トレンチ中央で大きく変化する。トレンチの南半は黒褐色粘質土層を中心とするものであるのに対し、北半は灰色粘質土層を基本とするもので、堤防が二時期にわたって造られたことを物語っている。この境には暗渠らしき東西の小溝も検出していることから、おそらく、近世初頭に唐古池が北側へ増築されたのであろう。この堤防盛土を除去すると、中世素掘溝が検出された。したがって、南側の堤防も中世以降であることは確実となった。第35層・41層は中世の堆積土層である。

第２表　第23次調査主要溝一覧表

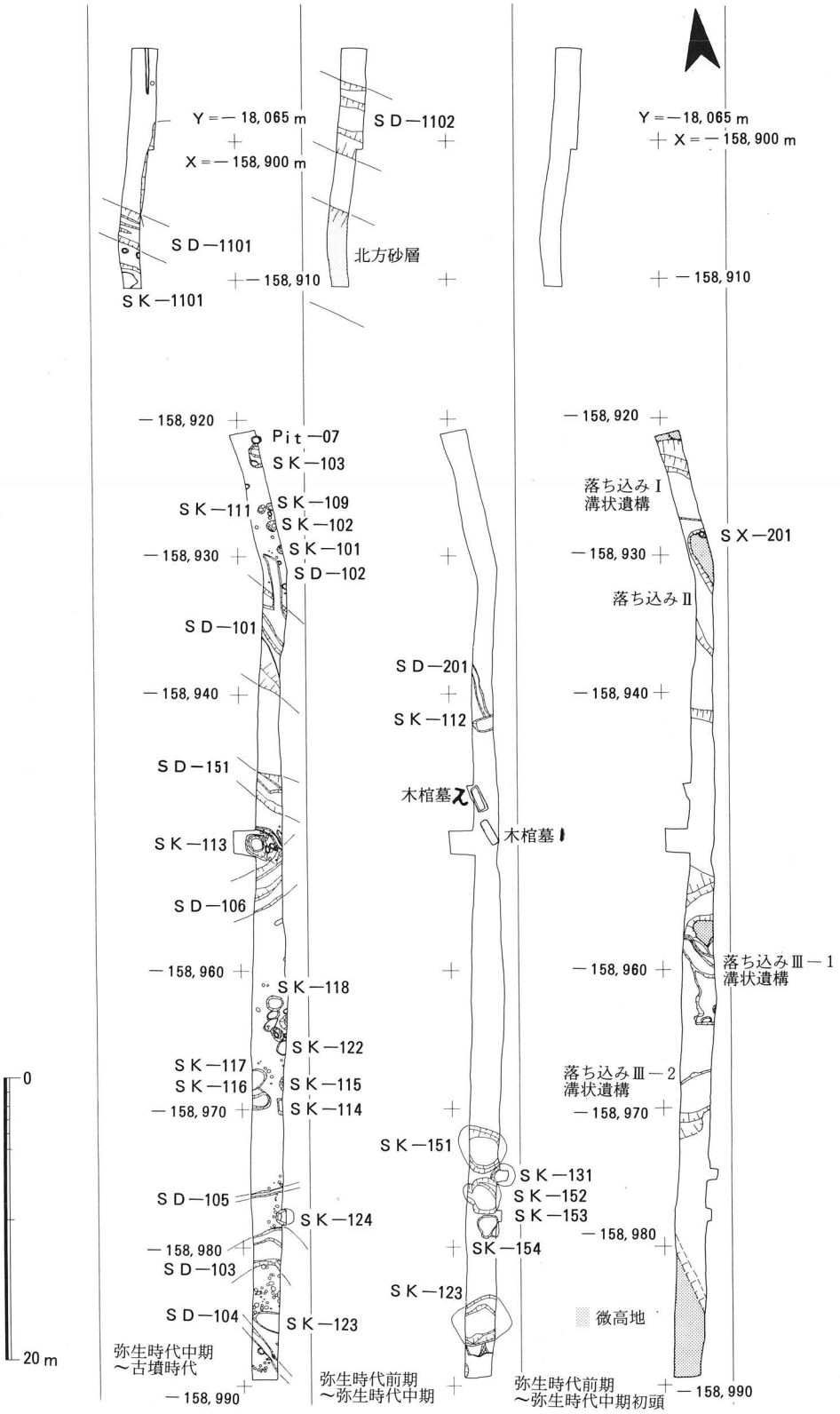
溝番号	規模（m）		溝底標高	走行方向	弥生					古墳		主要遺物	備考
	幅	深度			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ				
ＳＤ－101	（5.6）	1.1	45.9	南東－北西			←→					臼	環濠？
ＳＤ－102	0.7	0.3	46.4	南北			↔						北端は収束し、北側はSD－101に流入
ＳＤ－103	2.2	1.0	46.2	南西－北東 南東－北西		↔						下骨	コーナーをもつ区画溝
ＳＤ－104	0.5～0.6	0.2	46.8	南東－北西			←-→						
ＳＤ－105	0.4	0.1	47.0	東北東－西南西				←→				大型蛤刃石斧	
ＳＤ－106	2.7	1.1	45.9	南西－北東			↔						
	2.6	0.7	46.3	南西－北東			↔						再掘削
ＳＤ－151	2.4	0.7	46.4	南東－北西			↔						ＳＸ－102として検出
ＳＤ－201	0.4～0.5	0.4	46.0	南南東－北北西	↔								
ＳＤ－1101	2.4	1.2	45.7	南東－北西					↔			近江産鉢など完形土器	環濠
ＳＤ－1102	（6.3）	1.4	45.4	東南東－西北西		---	←→						環濠
落ち込みⅠ	（8.5）	1.1	45.9	南西－北東			←→					石棒、丸太材	

これらの中世以降の堆積土層下では、弥生時代中期中葉から古墳時代後期までの遺構を検出できる遺構面があらわれてくる。第４・14・21・30・36層上面がそれに対応するもので、ほぼ47ｍ前後の安定した遺構面となっているが、調査区の南端と北端では約15㎝程南が高く、南半が微高地であったことを物語っている。この遺構面は灰黄色粘質土層を中心とするものである。遺構としては、ＳＤ－101、ＳＤ－103、ＳＤ－106などの大溝、ＳＫ－113、ＳＫ－118、ＳＫ－124などの大形土坑を検出している。

上記の遺構面より下の土層堆積は安定しておらず、全体的な遺構面を把握することは困難であり、部分的に遺構を検出していった。このようなことから、上記の遺構面が形成されるのが、弥生時代中期初頭（第Ⅱ～Ⅲ様式）頃と思われる。上記遺構面となっている第36層の下面からは第Ⅱ様式のＳＫ－151の土坑が検出されている。したがって、第31層・37層は第Ⅱ様式後半頃の遺構面と思われる。この両層の下の土層として第32層・38層・42層が形成されているが、この土層の上面では弥生時代中期初頭（第Ⅰ・Ⅱ様式混在）の土坑（ＳＫ－123）が検出されており、短期間に第31層・37層が形成されたことがわかる。木棺墓は上面を削平されていたが第24層上面より掘削されていると思われるから、この木棺墓付近も小さな微高地であったと思われる。第24～26層、第32～34層、第38～40層、第42・43層は第Ⅰ様式の土器を含む包含層で、粘土で形成されていることから微低地であったことがわかる。第８・９・27層は弥生以前のベース層である。

第３表　第23次調査主要土坑一覧表

土坑番号	平面形態	断面形態	床面形態	坑底土層	規模（m）			坑底標高	施設物	時期	主要遺物	備考
					長軸	短軸	深さ					
ＳＫ－101	円形？	円錐形	皿状	暗青灰色粘土	0.7	－	0.5	46.6	なし	古・前？		
ＳＫ－102	円形	円筒形	皿状	黄褐色砂	(0.8)	0.72	1.05	46.1	なし	古・前	四脚状木製品	井戸
ＳＫ－103	不整円形	袋状	皿状	灰白色粗砂	1.6	－	1.0	45.8	なし	古・前	臼玉	
ＳＫ－109	楕円形？	逆台形	平坦	灰色粘土	(0.7)	0.6	0.5	46.5	なし	古・前		
ＳＫ－111	楕円形	逆台形	平坦	灰色粘土	(0.8)	0.6	0.25	46.6	なし	弥・中		
ＳＫ－112	長方形	逆台形	平坦	灰黄色粘土	1.6以上	1.2	0.8	46.2	なし	弥・Ⅲ		
ＳＫ－113	不整円形	上段：逆台形 下段：円筒形	平坦	灰白色砂礫層	2.26	1.53	2.1	44.5	井戸枠を埋置	弥・Ⅲ	銅鐸形土製品 卜骨、板材、鋤・鍬未成品	井戸
ＳＫ－116	楕円形？	逆台形	平坦	黒色粘質土	1.0以上	0.8	0.5	46.6	なし	弥・Ⅲ	鹿角 杓子形土製品	
ＳＫ－117	不整円形	逆台形	平坦	灰黒色粘質土	(1.5)	(1.1)	0.4	46.6	なし	弥・Ⅲ	完形鉢	坑底に炭灰層
ＳＫ－118	円形	逆台形	平坦	灰黒色粗砂	1.2	1.1	0.9	46.1	なし	弥・Ⅲ	木製杓子 石庖丁	井戸
ＳＫ－123	長方形	二段の逆台形	平坦	灰色粗砂	(4.0)	(3.0)	1.0	45.7	なし	弥・Ⅱ	大量の獣骨、骨針、弓筈、布片、縄、条痕文土器	
ＳＫ－124	不整円形	上段：逆台形 下段：円筒形	平坦	灰白色粗砂	1.9以上	－	0.95	46.2	なし	古・前	完形甕	井戸
ＳＫ－131	不整円形	上段：逆台形 下段：円筒形	平坦	青白色粗砂	1.8	－	1.0	46.1	大木を刳りぬき、井戸枠とする	弥・Ⅲ		井戸
ＳＫ－151	円形	逆台形	平坦	灰白色粗砂	(3.4)	－	1.0	46.0	なし	弥・Ⅱ	平鍬未成品	落ち込みⅢ－３として検出
ＳＫ－152	楕円形	逆台形	皿状	灰白色粗砂	(1.6)	(1.2)	0.3	46.1	坑底に植物層	弥・Ⅰ	半完形土器	落ち込みⅢ－４として検出
ＳＫ－153	不整円形	逆台形	平坦	灰白色粗砂	(2.6)	1.7	0.5	45.9	なし	弥・Ⅰ	半完形土器群 武器状木製品	落ち込みⅢ－４として検出
ＳＫ－154	不整円形	逆台形	平坦	灰白色粗砂	1.5	(1.2)	0.4	45.9	なし	弥・Ⅰ	完形土器１点	落ち込みⅢ－４として検出
ＳＸ－201	楕円形	逆台形	平坦	灰黄色粗砂	0.6	0.4	0.35	46.0	壷を埋置	弥・Ⅰ		集水遺構
ｐｉｔ－07	不整円形	逆台形	平坦	灰褐色粘質土	0.7	0.5	0.25	46.7	なし	古・後		小土坑



第11図　第23次調査遺構平面図（S＝1/480）

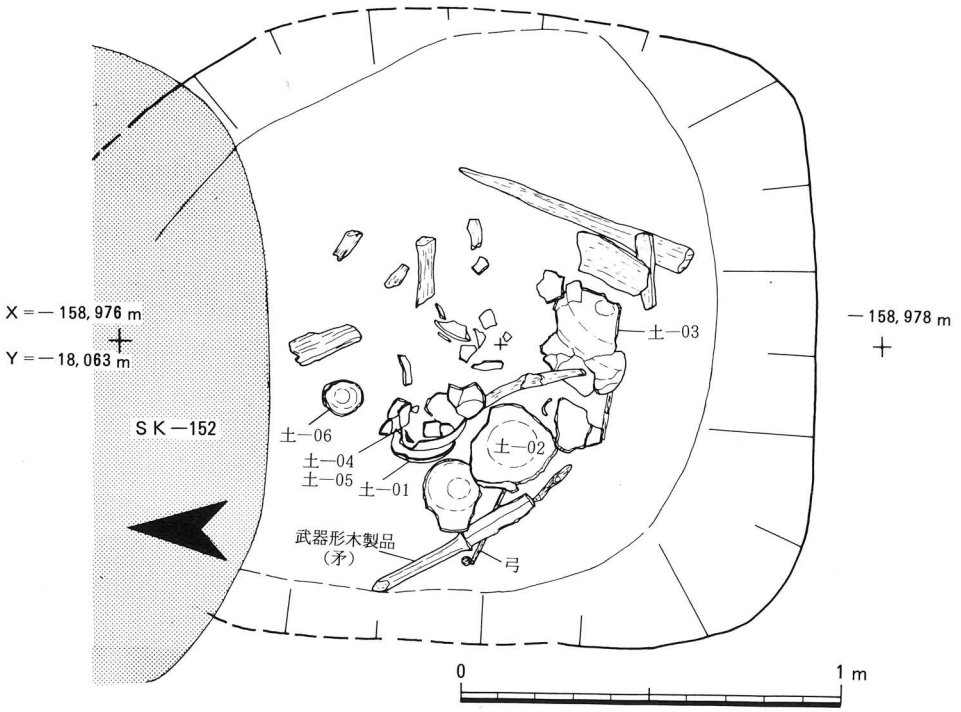
⑵　弥生時代前期の遺構

弥生時代前期の遺構は少なく、小溝・集水遺構・木棺墓などがある。他には落ち込み状の微凹地に形成された小溝状のものがあるが、遺構密度としては他の時期より低く、居住区域の周辺部とみなされよう。遺構の主軸方向が南南東から北北西方向にあり、地形に左右された形成のしかたとなっている。時期的には弥生時代前期の古い時期はないようで、第Ⅰ様式の後半から末にかけてのものが多い。

ＳＫ－152・ＳＫ－153・ＳＫ－154

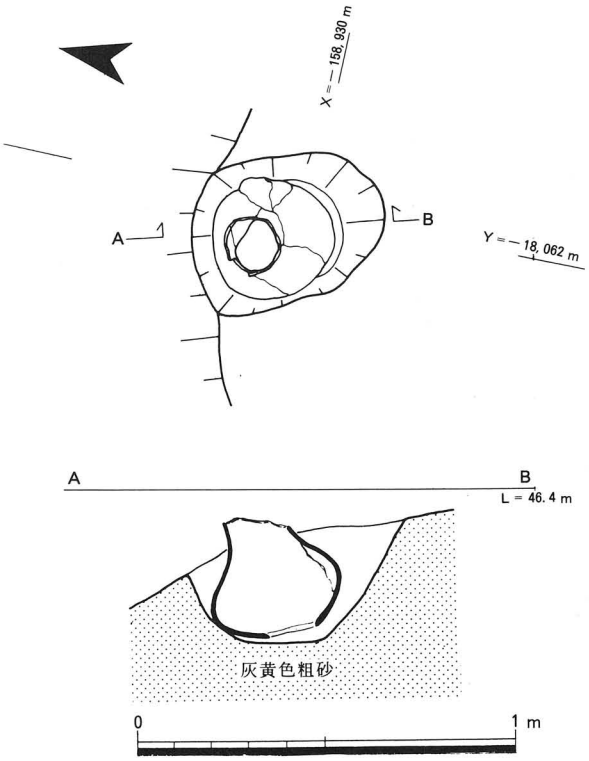
ＳＫ－152・ＳＫ－153・ＳＫ－154は発掘当初、落ち込み状の堆積土層（落ち込みⅢ－４として取り上げている）として認識していたものである。これは弥生中期初頭の遺構面で検出できなかったため、掘り下げていった結果である。その後、土器・木器等の遺物が集中する地点が検出でき、土坑であることが確認できた。これらの土坑は第１トレンチの南端にあたる。

ＳＫ－152はＳＫ－153の土坑の北側に重なるように掘削されたもので、推定長軸1.6ｍ、短軸1.2ｍ、深さ約0.3ｍを測る浅い楕円形の土坑である。坑底には植物層が推積し、その上面には半完形の壷と鉢が押しつぶされた状態で出土した。ＳＫ－153は推定長軸2.6ｍ、短軸1.7ｍ、深さ0.5ｍの不整円形の土坑である。灰色粘土と粘砂層によって埋没しているが、土坑中位で完形を含む土器群、木器等が集中して出土した。土器は壷・鉢が主で、鉢には赤色顔料が塗布されたものが含まれていた。また、木器では武器状木製品と思われるものも出土した。（第12図）



第12図　ＳＫ－153遺物出土状況図（Ｓ＝1/20）

ＳＫ－154はＳＫ－153の南側で、接するように検出した土坑である。長軸1.5ｍ、短軸推定1.2ｍ、深さ0.4ｍを測る浅い不整円形の土坑である。土坑の埋土は灰色粘土層で、ほぼ単一層で埋没している。本土坑の北東よりで完形の広口長頸壷が１点出土した。壷は口縁部の一部を欠いているのみで完存し、坑底からほぼ直立気味に立った状態で出土した。これらの土坑ではＳＫ－153が古く、第Ｉ様式後半で続いてＳＫ－154、ＳＫ－152となる。ＳＫ－152は第Ｉ様式末であろう。



第13図　ＳＸ－201土器検出状況及び見とおし図（Ｓ＝1/20）

ＳＸ－201

ＳＸ－201は第１トレンチの北端で検出した集水遺構である。第１トレンチの北端では南南東から北北西方向に粗砂層の微高地が舌状に形成されており、この先端部において発掘された集水遺構である。これは、粗砂中に長軸約0.6ｍ、短軸0.4ｍ、深さ0.35ｍの楕円形の土坑を掘削し、その内部に底部を打ち欠いた広口長頸壷を埋置したものである。土器はやや北側に傾いているが、直立ぎみである。口縁部は削平の為、欠失している。壷の内部には細砂・微砂が充満しており、流入土と思われた。本遺構は壷棺墓ではなく、砂層上につくられている立地状況や土器底部の欠失状況から集水遺構と考えられる。これと類似したものとして第16次調査（ＳＸ－103）、第17次調査（ＳＸ－01）、第19次調査（ＳＸ－202）、第20次調査（ＳＸ－201）の各集水遺構がある。本遺構の時期は第Ｉ様式の末である。

落ち込みⅢ－１溝状遺構・落ち込みⅢ－２溝状遺構

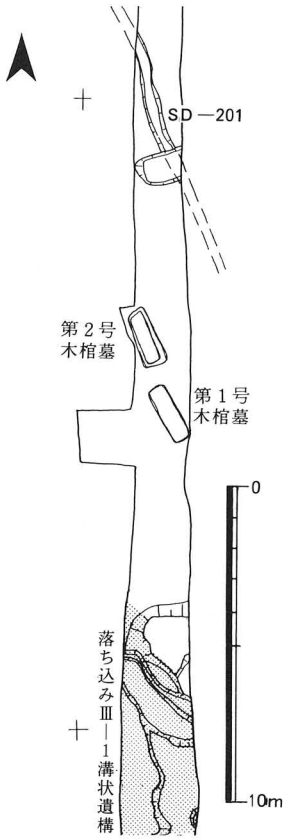
落ち込みⅢは第１トレンチ南半部分で検出された微低地部分で、幅約25ｍに及ぶものである。この微低地部分の二カ所で自然流路状の溝を２条検出した。微低地北端で検出したものを落ち込みⅢ－１とし、中央部分で検出したものを落ち込みⅢ－２とした。これらはともに灰色粘土層が堆積していた。落ち込みⅢ－１は南南東から北北西に軸をもつものである。本遺構からは弓や木製高杯、建築部材等の木製品が中心で、他に獣骨、土器が少量出土している。落ち込みⅢ－２は東北東から西南西方向に軸をもつものである。本遺構では土器・木片が混在する状況で検出された。注目されるものとして、ほぼ直立する広口長頸壷が検出され、その内部には二匹分のネズミの骨が入っていた。落ち込みⅢ－１・Ⅲ－２ともに第Ｉ様式後半で、Ⅲ－２の方が若干新しい。

ＳＤ－201

ＳＤ－201は第１トレンチ中央のやや北寄りで検出した小溝である。溝幅0.4～0.5ｍ、深さ0.4ｍを測る溝で南南東から北北西方向に走向すると思われる。溝の南側はＳＫ－112によって切られ、北側はＳＤ－101によって切られている。本溝の遺物は少なく、壷上半部と少量の土器・木器片のみである。本溝は第Ｉ様式の後半に開口していたと思われる。

木棺墓

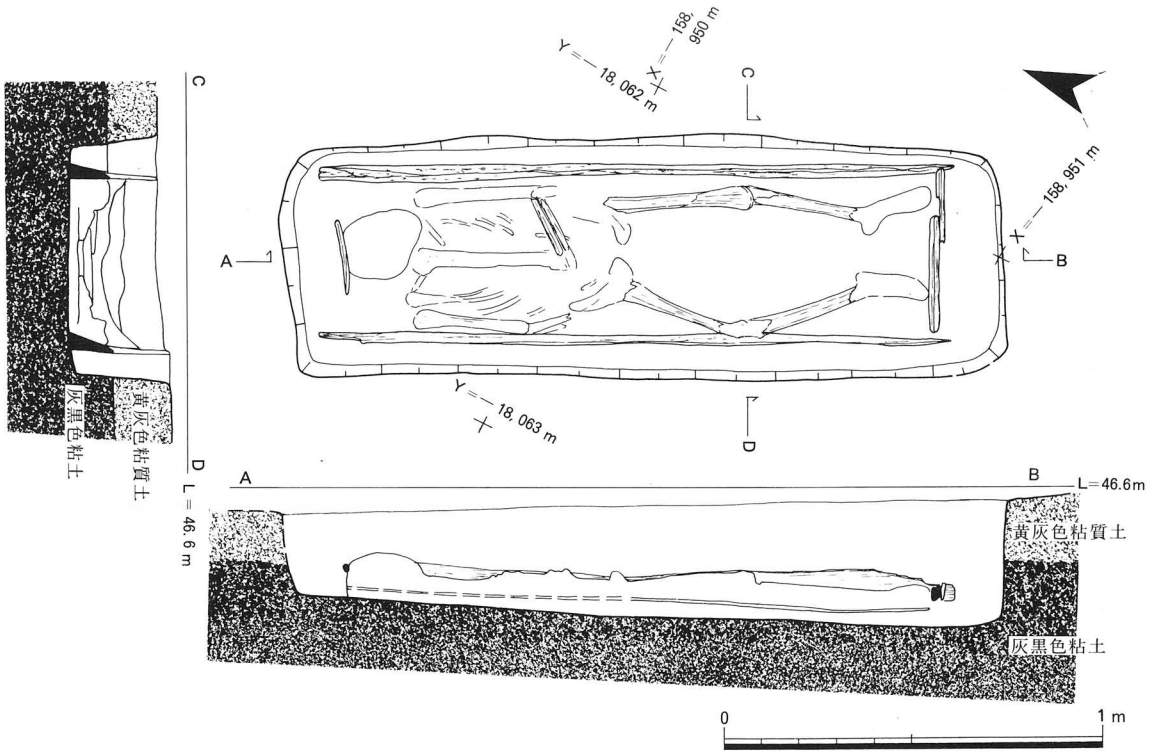
木棺墓は第１トレンチ中央で二基検出した。本遺跡では初めての検出となった。二基の木棺墓は主軸を同じくし、南南東から北北西方向に軸をもつものである。二基の木棺墓は前述ＳＤ－201の小溝と南側で検出した落ち込みⅢ－１溝状遺構の中間地点に位置する（第14図）。この二つの遺構は走向方向が同じで、木棺墓を中心とする微高地の縁辺部にあたることから、両溝は木棺墓群の墓地を区画する機能があったものと思われる。この微高地は幅７ｍ前後の狭い舌状のもので、弥生時代前期にあたっては、居住区から一つの凹地を隔てた所に位置する墓地群と理解される。検出した木棺墓は二基であったが、主軸方向にはさらに木棺墓が続く可能性が高い。二基の木棺墓のうち、南側で検出した木棺墓を第１号木棺墓、そして、出土した人骨を第１号人骨とし、北側で検出した木棺墓は第２号木棺墓、出土した人骨は第２号人骨とした。以下、各々の木棺墓について説明することにする。



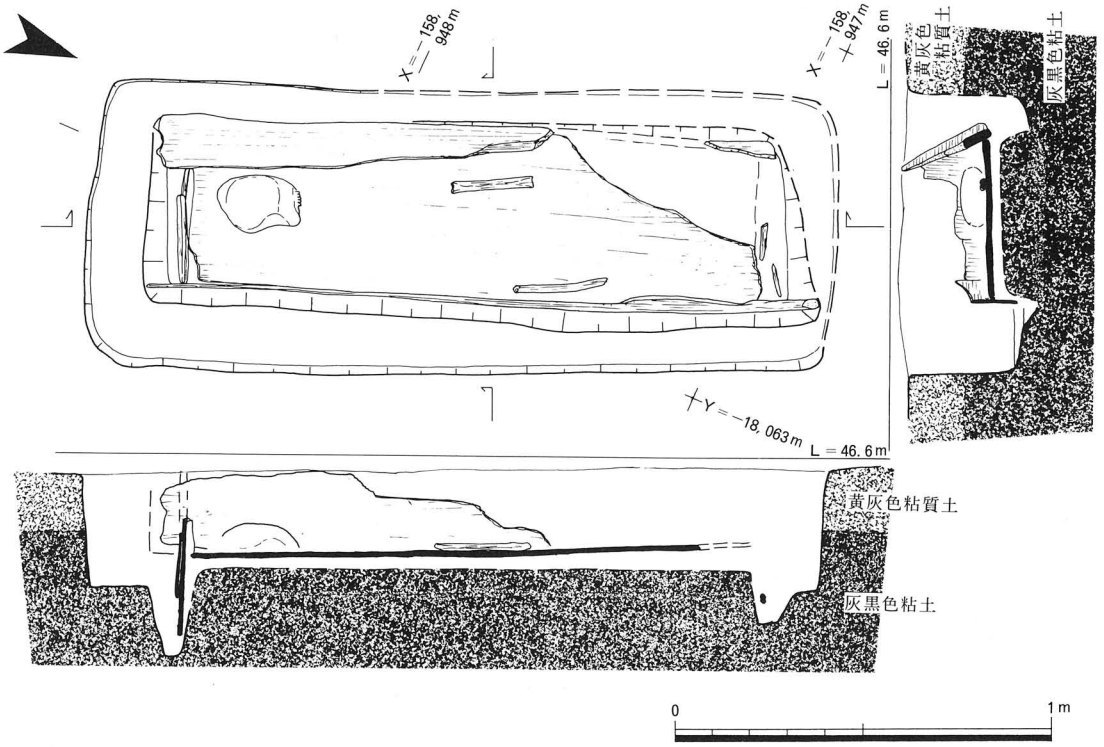
第14図　木棺墓の位置図

第１号木棺墓　第１号木棺墓の墓壙は長方形プランで、長軸187㎝、短軸65㎝、深さ30㎝を測る。墓壙上面は削平を受けているため、深さは本来50㎝であったと思われる。墓壙の底面は頭部付近の方が約８㎝高くなる。木棺板材としては側板２枚で構成されており、底板や小口板はない。木棺はまず側板を裾え、小口板のかわりに棒で二枚の側板を支える。底板のかわりに樹皮状の植物繊維を底面に敷き、遺体を埋置する方法をとる。蓋板は不明である。遺体は木棺からはみ出すぐらいで、足を開きぎみに窮屈に葬られていた。左腕は腹部、右手は下腹部あたりに置かれていた。骨は脆弱化しているが男性である。副葬品、供献土器はない。

第２号木棺墓　第２号木棺墓は第１号木棺墓の北0.6ｍで検出した。墓壙は長方形で、長軸は198㎝、短軸75㎝、深さ30㎝を測るが、上面は削平されている。木棺はまず底板を置き、頭部側に２板の小口板を裾えてから、両側板を立てる。脚部側の小口板はなく、棒で側板を支える。頭部側の小口板は深く入っている。人骨の残存は悪く、男性の頭蓋骨と大腿骨が残っていた。副葬品、供献土器はない。



第15図　第１号木棺墓検出状況図及び見とおし図（Ｓ＝1/20）



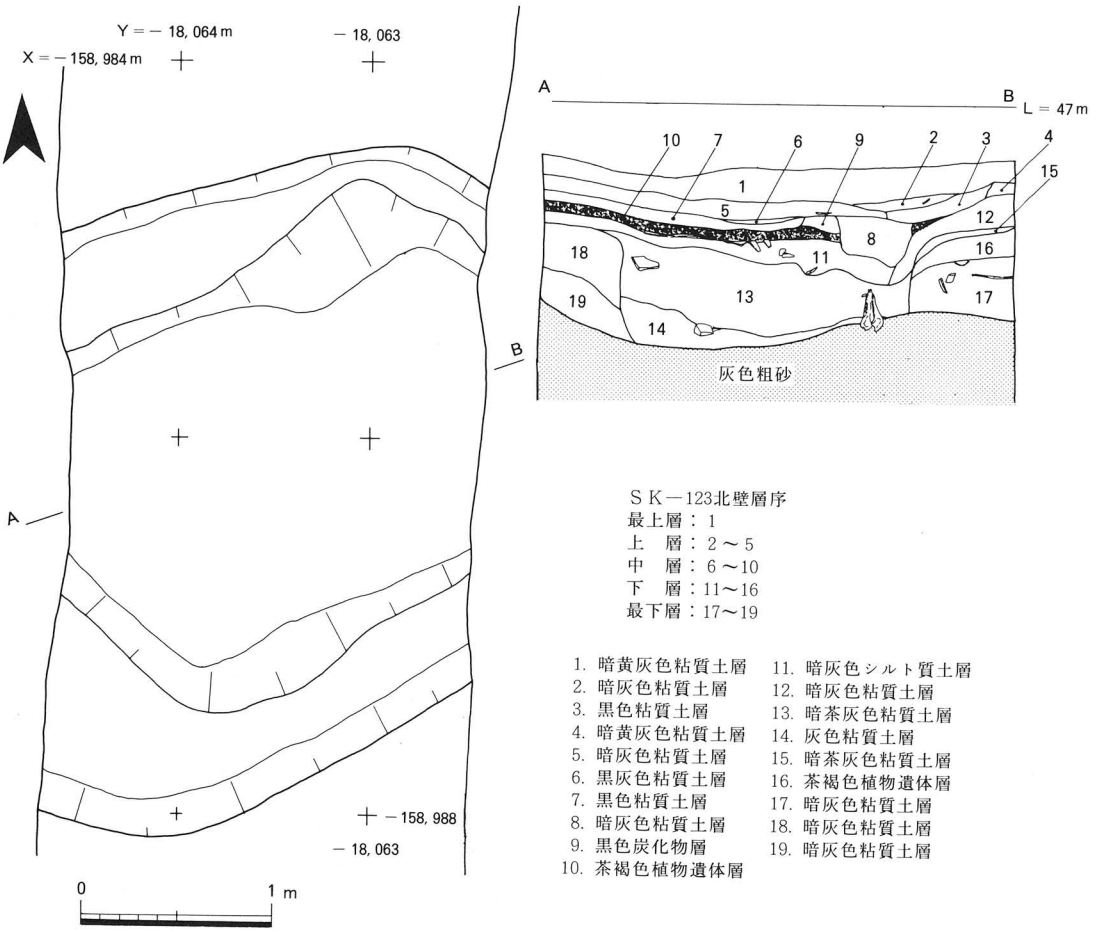
第16図　第２号木棺墓検出状況図及び見とおし図（Ｓ＝1/20）

⑶　弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構は本調査で最も多く検出したもので中心となるものである。第Ⅱ様式から第Ⅳ様式までの土坑、溝、柱穴など各遺構が存在し、居住区として北側へ拡大していった様子が窺える。時期的には第Ⅲ様式の遺構が最も多く、環濠・区画溝などの大溝も掘削されている。また、出土遺物も多岐にわたり、多量に出土している。

ＳＫ－123

ＳＫ－123は第１トレンチの南端で検出した大形土坑である。長軸推定４ｍ、短軸推定３ｍの長方形プランの土坑である。深さは１ｍを測る。四隅のうち、対角の二隅は調査外であるが、ほぼ全容のわかるものである。本土坑の埋積状況はほぼ五つに分れる（第17図）。最上層（第１層）は暗黄灰色粘質土層で弥生中期中葉頃の土器を含んでいることから、この頃まで本土坑が開口していたと思われる。上層は黒色粘質土や暗灰色粘質土層で構成されている。中層は炭化物層を中心とする粘質土層である。下層・最下層は灰色粘質土層等で構成されている層であるが、最下層



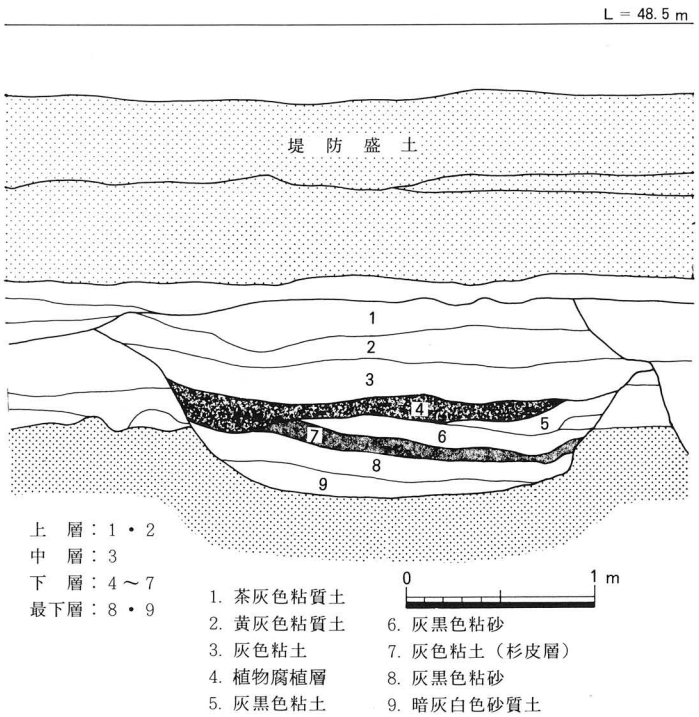
第17図　ＳＫ－123遺構平面図及び北壁土層断面図（Ｓ＝1/40）

である17層～19層は粘性がやや強いものである。中層の炭化物層が鍵層となり、土坑の埋積を二分している。遺物は中層から下層にかけて多量に出土した。時にイノシシなどの大形動物の獣骨類が多く、イノシシは各部位の骨が出土している。これら獣骨類とともに完存する広鍬、建築部材片、丹塗鉢、条痕文土器などが混在状況で検出された。また、中層の炭化物層内からは縄、布切れ片、弓筈などが獣骨とともに出土した。本土坑の中層・下層の埋土については大半を洗浄し、微細な遺物まで採集した。この粘土サンプル内に布切れ片が含まれており、炭化物層という良好な保存状況であったため残存したと思われる。

本土坑の性格は、土坑の形態・規模から木器貯蔵用の土坑と考えられるが、その埋没過程では後にイノシシ等の獣骨の廃棄土坑に機能が変化したものと思われる。しかし、本土坑出土の獣骨の数量は他の調査でも類例がないほど多く、各部位の骨が揃っていることから、当地において一時の解体と共同食用とした事が考えられ注目される。また、土器については第Ⅰ様式と第Ⅱ様式が混在するものである。特に貝殻による文様が施されている土器片を含め、条痕文土器を含んでいる点は重要である。

ＳＫ－151

本土坑は第１トレンチの南半で検出した大形土坑である。発掘当初、土坑の輪郭を確認できず、落ち込みⅢあるいは落ち込みⅢ－３として遺物を取り上げた。しかし、土坑中位において植物腐植土層を確認するに至り、土坑のプランを明らかにすることができた。土坑は推定径3.4m、深さ１ｍを測る円形プランにちかい土坑である。土坑の埋積は五つに分割できる。上層：黄灰色粘質土等、中層：灰色粘土、下層：植物腐植土・粘砂・杉皮層等、最下層：粘砂や砂質土層である。遺物は下層と最下層から多く出土している。下層では杉皮層と混在するように多くの木製品が出土した。棒状木製品や大形土器片が多い。最下層では土坑の南端で平鍬の未成品２点を検出した。本土坑の時期は第Ⅱ様式で、最下層の



第18図　ＳＫ－151東壁土層断面図（Ｓ＝1/40）

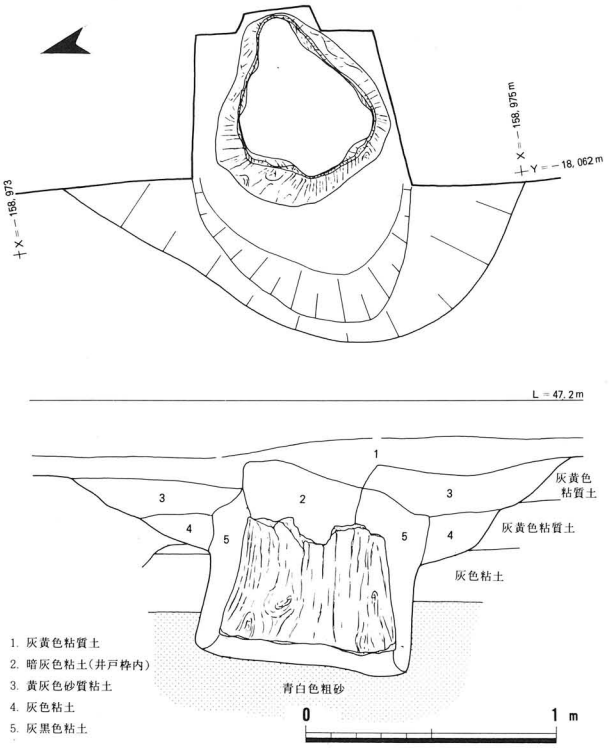
木器出土状況から木器貯蔵用の土坑である可能性が高い。

ＳＫ－131

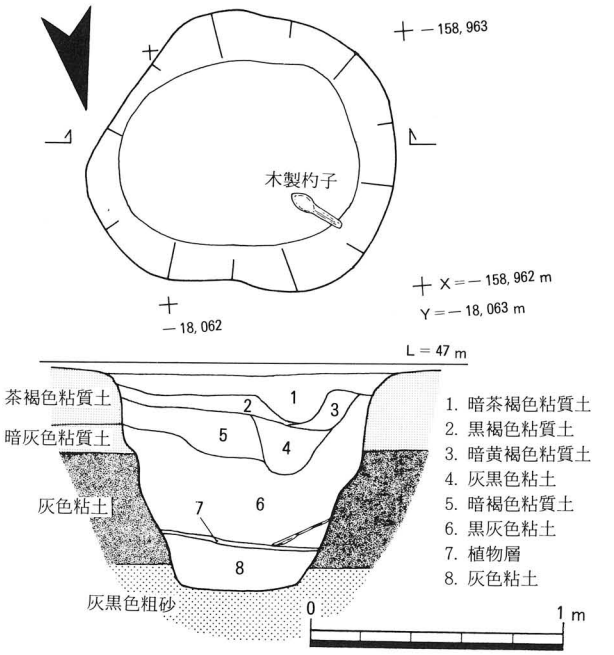
ＳＫ－131はＳＫ－151とＳＫ－152の間で検出した土坑である。当初、井戸枠の一部を検出したが、トレンチの東側に拡がっている為、その一部を拡張し、井戸枠全体を検出した。井戸の掘り方は現長1.8ｍを測る不整円形の土坑で、二段掘りにしている。深さ１ｍを測り、土坑中位より下は円筒形に掘削している。土坑の中心部には下端部の径が0.7～0.77ｍを測る内部を刳り貫いた大木が据えられており、井戸枠として使用されていたと思われる。大木の下端部には明瞭な加工痕が残っていた。大木の上部は腐っていたが、土層断面図の観察からすれば、掘り方の上部まであったと思われ、暗灰色粘土となっている。井戸枠内の堆積は下から粗砂・砂質土・粘土となり、井戸が機能を失っていく様子がわかる。井戸枠内には少量の土器片が含まれていたのみで供献土器等はなかった。井戸の時期は第Ⅲ様式前半と思われる。

ＳＫ－118

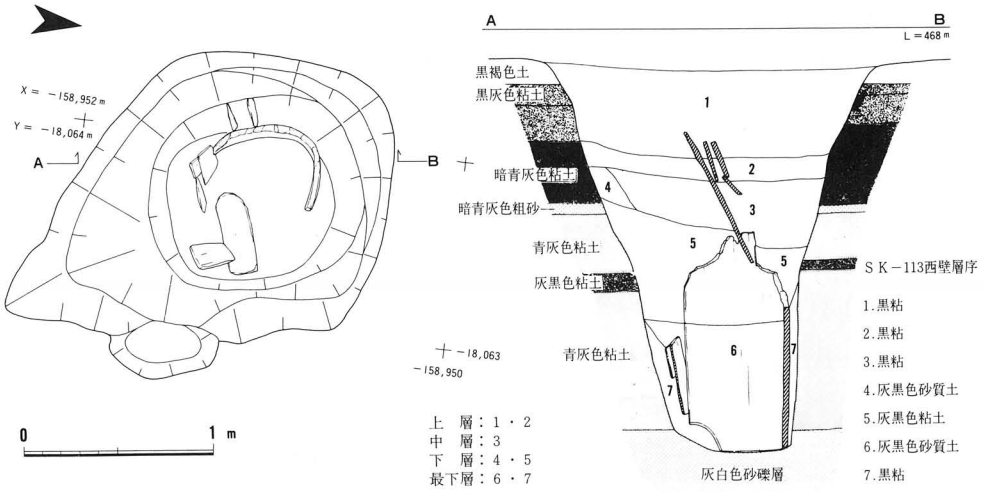
ＳＫ－118は第１トレンチ中央やや南よりで検出した土坑である。長軸1.2ｍ、短軸1.1ｍを測るほぼ円形にちかい土坑である。深さは約0.9ｍである。土坑の埋積は大きく三分され、上層は暗茶褐色粘質土等、



第19図　ＳＫ－131井戸枠検出状況及び見とおし図（Ｓ＝1/30）



第20図　ＳＫ－118遺物出土状況図及び土層断面図（Ｓ＝1/30）



第21図　ＳＫ−113遺構平面図及び西壁土層断面図（Ｓ＝1/40）

中層は黒灰色粘土、下層は灰色粘土である。中層と下層との間には２～３㎝の植物層が全体に挟まれている。遺物としては上記植物層の直上から木製の杓子が出土している。また、中層の上位からは完形の石庖丁と石庖丁片が各１点出土している。本土坑の時期は第Ⅲ様式後半で井戸と思われる。

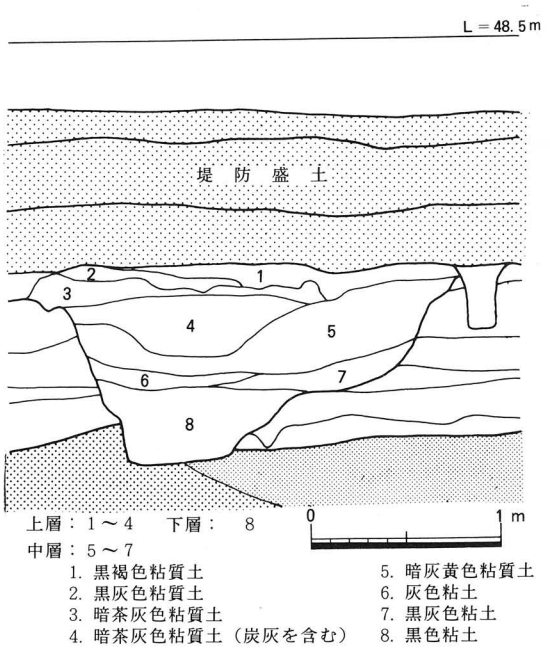
ＳＫ−113

ＳＫ−113は第１トレンチの中央部で検出した土坑で、トレンチの西側に拡がっていたため、トレンチを拡張し、全容を明らかにした。土坑は長軸2.26ｍ、短軸1.53ｍを測る不整円形の土坑プランであるが、土坑の中位からは径1.1〜1.2ｍの円形プランとなり、円筒形を呈するようになる。土坑の深さは2.1ｍを測る。本土坑内の西側半分では、半裁され内部を刳り貫かれた大木（直径約0.6ｍ）を直立させた状態で検出した。大木の長さは約1.2ｍで、下側にある端部隅には大きな抉りを入れていることから、何らかの転用材と思われる。本土坑はベース層である灰白色砂礫層まで達しており、上記のような大木が埋置されていることから井戸と考えられ、大木は井戸枠と考えられる。井戸枠の東側はなんら枠状の施設をもたないが、井戸枠の北側の端部には長さ30㎝、幅16㎝にわたって粘土ブロックがみられ、井戸枠を固定したものと思われる。また、井戸枠の南端の端部には四枚の板が立て並べられていることから、これらの板は枠としての機能をもたせたのであろう。井戸の埋積は大きく四分され、上層と中層は黒色粘土、下層は灰黒色粘土、最下層は灰黒色砂質土となる。上層と中層は遺物の出土状況から同一埋積と考えられる。遺物は各層から多量に出土した。最下層からは鐸形土製品の破片が１点出土しているが、特別な出土状況を呈さず、土器片とともに出土している。上層から中層にかけては多量の木製品が出土している。多くは板状の木製品で、何らかの未成品と思われる。板状木製品は土坑の南側から土坑に差し込むように投げ入れている。したがって、これら板材は上層から中層にまたがって出土し

ている。板材に混在して上層下位では着柄鋤未成品が、また、中層下位では広鍬未成品が出土している。上層では他にシカ肩甲骨の卜骨１点が出土しているが、他の土器類などは少ない。本土坑の時期は第Ⅲ様式の後半に位置づけられる。

ＳＤ－103

ＳＤ－103は第１トレンチ南端で検出した大溝である。溝の幅2.2ｍ、深さ約１ｍを測る。溝は南西から北東方向に軸をもつが、トレンチの東側でほぼ直角に曲がり南西から北東方向に向きを変えるようである。このためか溝のコーナー部分は傾斜が急になっている。コーナーをもつ溝のため、方形周溝墓の溝とも考えられたが、第26次調査ではこれに相応する溝はなく、区画溝としての性格が考えられる。溝の堆積は大きく三分され、上層：暗茶灰色粘質土等、中層：暗灰黄色粘質土等、下層：黒色粘土である。遺物は中層を中心として土器が多く出土した。これらの土器の中には他の遺構と接合するものが検出されている。詳細は遺物の土器の項で述べるが、土器を含めて、遺物の廃棄と埋没、居住者の生活空間を考える上で重要である。土器の他にはイノシシの肩甲骨を用いた卜骨１点が出土している。本溝は第Ⅱ様式の新しい段階に開口していたと思われる。



第22図　ＳＤ－103東壁土層断面図（Ｓ＝1/40）

ＳＤ－101

ＳＤ－101は第１トレンチ北端で検出した大溝である。溝の幅推定5.6ｍ、深さ1.1ｍを測る。溝は幅が広いが浅く、溝の肩は緩やかになっている。溝の中央は幅１ｍ、深さ0.3ｍ程深く掘り下げており、段掘りとなっている。本溝は弥生前期段階まで落ち込み状（微凹地）になっていたところに掘削されており、南東から北西方向に軸をもつものである。本溝の堆積は大きく四分され、上層：黒褐色粘質土等、中層・下層：黒灰色粘土、最下層：黒色粘土となり、大半が粘土層の堆積となる。しかし、中層と下層の間には溝の北側からの砂の流入がみられる。この砂は第２トレンチで検出した北方砂層の可能性が高い。遺物は下層～上層にかけて土器が多量に出土した。また、最下層からは木製の臼や流紋岩製の石庖丁が出土しているが、木器や石器類は少ない。本溝の時期は第Ⅲ様式である。

ＳＤ－106

ＳＤ－106は第１トレンチの中央部、ＳＫ－113の南側で検出した大溝である。溝の幅2.7ｍ、

深さ1.1ｍを測る。溝は南西から北東方向に軸をもつが、北側に弧を描くように溝がめぐっているようである。溝の堆積は複雑で、堆積状況から再掘削、溝さらえの状況が観察される。本溝もＳＤ―101と同様、落ち込み状の微凹地に掘削されている。最初の溝は灰黒色粘土層等で埋没しているが、溝の中央部は溝さらえがおこなわれ、植物腐植土層となっている。この植物腐植土層からは土器・木器などが多く出土している。

再掘削後の溝は先の溝よりやや南側に掘削されており、深さ0.7ｍと浅くなる。溝の堆積は10～20cmの薄い粘土層で埋没している。本溝の上層より、多量の土器が出土している。溝の時期は最初の溝が第Ⅲ様式の前半、再掘削後の溝が第Ⅲ様式の後半となる。

ＳＤ―1102

ＳＤ―1102は第２トレンチで検出した大溝で、東南東から西北西方向に軸をもつものである。本溝は唐古池築造時かそれ以降の掘削によって上面及び東側が破壊されている。溝幅の推定6.3ｍ、深さ1.4ｍを測る大規模なものである。溝は中位にテラスをもつ段掘りとなっている。溝の堆積は大きく三分され、上層は黄灰色粗砂等、中層は灰褐色粘土（植物・木片を多く含む）等、下層は暗灰褐色粘土等で構成されている。上層の砂層はこの溝の南側にある北方砂層より流入したものと考えられる。出土遺物は少ない。工具と思われる木製品（図版49―５）が出土している。溝は第Ⅲ様式から第Ⅳ様式まで開口していたと思われる。

落ち込みⅠ溝状遺構

落ち込みⅠは第１トレンチ北端で検出した遺構である。本遺構は南東から北西方向に軸をとるもので、微凹地状に形成された堆積土層である。他の地区の微凹地は弥生時代前期に形成されたものであるが、本遺構は弥生時代中期（第Ⅲ様式）頃に形成されたものと思われることから、大溝の可能性も残している。本遺構の幅は推定8.5ｍ、深さ1.1ｍを測る。堆積状況は10～40cmの薄い層で形成されており、上層は砂質土、中層以下最下層までは粘土層が堆積している。上層の砂質土は本遺構を覆うもので、この一部はＳＤ―101まで及んでいる。これは北方砂層からの流入砂と思われる。遺構の北側肩部では柵状の柱穴を５基検出しているが、本遺構に伴うかどうかはわからない。遺物は上層の砂質土から多く土器を検出したが、これらと混在して石棒１点が出土している。また、最下層では20余本の丸太材を遺構の主軸方向と同じ方向で検出した。丸太材は長さ４ｍを越え、直径は５～15cmを測る。樹皮のついたものが多く、端部には伐採痕が残っている。これらは柱材と思われ、整然とした状態で検出したことから、伐採後本遺構内に貯木していたと思われる。これらの丸太材の上部からは鋤状木製品やキツネの下顎骨等が出土している。本遺構の時期は第Ⅲ様式から第Ⅳ様式にかけて開口していたと思われる。

北方砂層

北方砂層は第２トレンチ南端で検出した自然河道である。これは第１次調査で検出された北方砂層の延長にあたる。河道幅８ｍ前後で深さ1.6ｍまで確認したが、河道底は確認していない。灰色細礫層等の砂が全体を埋めており、ラミナが発達していることから、かなりの流れがあった

ものと思われる。遺物は土器片をかなり含んでおり、磨滅を受けているものもあるが、全体では少ない。この砂層堆積は河道の北側や南側までオーバーフローしており、ＳＤ－1102やＳＤ－101、落ち込みＩ溝状遺構の上部を覆っている。時期は第Ⅳ様式である。

(4)　弥生時代後期の遺構

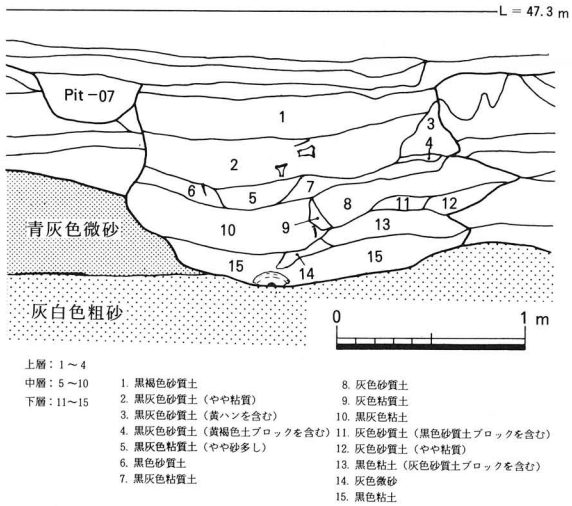
弥生時代後期の遺構は少ない。土坑１基と大溝１条のみである。第１次調査と合わせて考えると弥生時代後期の遺構は散在状況にあり、遺構密度は中期に比べ低い。

ＳＫ－103

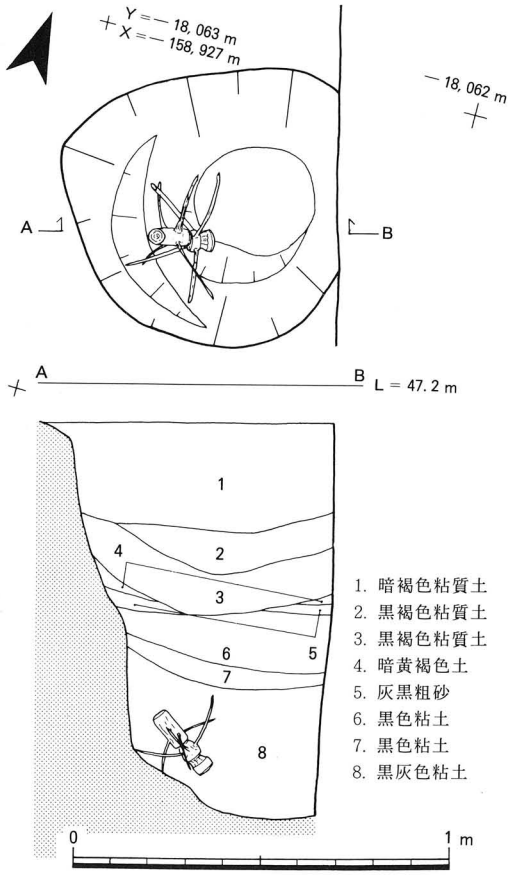
ＳＫ－103は第１トレンチ北端で検出した土坑である。土坑の西側半分を調査したのみで、規模についてはわからない。長軸1.6ｍ、深さ１ｍを測る不整円の土坑になると思われる。土坑の埋積は10～20㎝の砂質土・粘質土・粘土の互層で形成されている。土坑の中位より甕などの完形土器とともに自然木が多く出土した。これらと混在して臼玉２点も出土した。土坑の時期は第Ⅴ様式の終末、あるいは古墳時代初頭と思われる。

ＳＤ－1101

ＳＤ－1101は第２トレンチ南端で検出した大溝で、南東から北西方向に走向する。溝の幅2.4ｍ、深さ1.2ｍを測る。北方砂層内の北端に掘削されているため、溝内の堆積は粘土と砂層の互層になっているが、大半は砂層によって埋没している。溝の中位の粘土層内からは近江産の鉢、細頸壷、



第23図　ＳＫ－103東壁土層断面図（Ｓ＝1/40）



第24図　ＳＫ－102遺物出土状況図及び土層断面図（Ｓ＝1/20）

小形鉢などの完形品が出土している。時期は第Ⅴ様式の後半である。

(5)　古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は第１トレンチの北端で土坑を４基、南端で１基検出している。大半が古墳時代前期であるが、後期のものとしてはPit―07（土坑）がある。

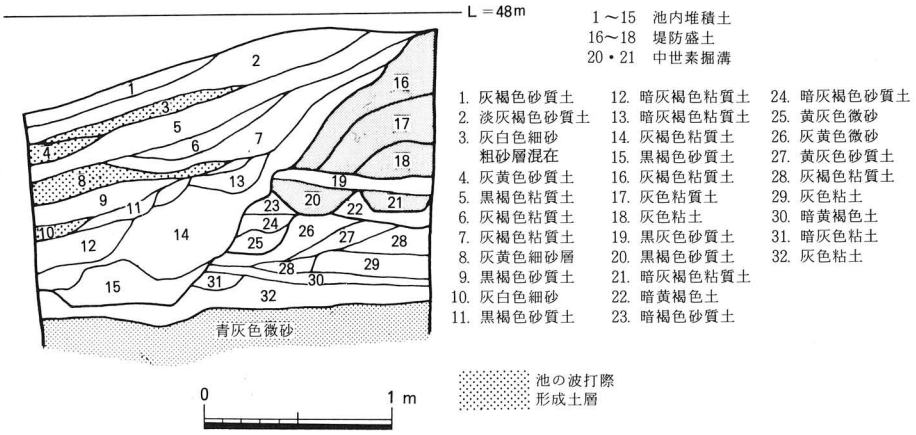
ＳＫ―102

ＳＫ―102は第１トレンチの北端で検出した土坑である。土坑は長軸推定0.8ｍ、短軸0.72ｍ、深さ1.05ｍを測る。ほぼ円形を呈するプランで、土坑の断面は円筒形を呈する。土坑の東端部分は調査区域外となっている。土坑の埋積は土坑中位の砂層を挟んで、上部は粘質土、下部は粘土層となる。遺物は少ないが、落ち込みⅠ内に掘削しているため、古い遺物も混在しているが、庄内式の土器片を含んでいるので古墳時代前期と考えられる。最下層からは四脚状木製品が二つあわせるように出土した。この木製品の一つは基部に抉りを入れている。二つが重なるように出土していることから縄か何かで縛っていたかも知れないが検出できなかった。本土坑はその形態から井戸と考えられる。

ＳＫ―124

ＳＫ―124は第１トレンチ南端で検出した土坑である。土坑の西側半分のみの調査であったため規模等は詳しくわからないが、二段掘りの土坑で上面は1.9ｍ以上の不整円形で、中位以下は径0.7ｍの円形を呈す。深さは0.95ｍを測る。土坑の埋土は三分され、上層：黒褐色土、中層：黒褐色粘質土等、下層：黒色粘土となる。上層から二重口縁壷、下層から完形甕が出土している。時期は古墳時代前期の布留式期である。本土坑は井戸と推定される。

(6)　中世・近世の遺構



第25図　第１トレンチ北壁土層断面図（Ｓ＝1/40）

中世の遺構としては幅30～40cmの素掘溝が調査地全面で検出できた。これらは唐古池の堤防盛土下で検出されている（第25図）。したがって、この素掘溝が中世末期を前後する時期と考えられることから、池の築造はそれより後のこととなり、近世初頭頃と思われる。しかし、堤防の盛土の観察からすれば、第１トレンチ中央部で大きく盛り方が変化することから、池を北側に拡張していることが判明した。

３．出土遺物

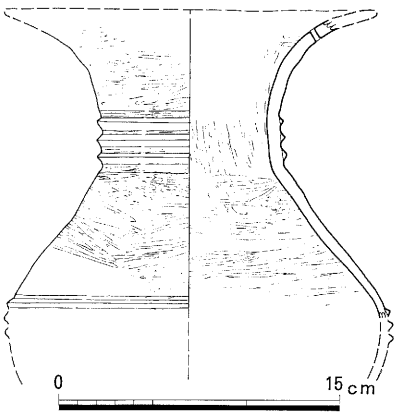
今回の調査で出土した遺物は厖大な量で、土器の他自然遺物まで多岐にわたる。これは集落の内部から周辺におよぶ地域を調査したからであろう。大半の遺物は土坑や溝などの遺構から出土している。特に小動物・植物遺存体は土坑などの堆積土から良好な状態で検出している。これについては図版60～63を参照されたい。ここでは、特に土器編年上、重要な土坑や溝の出土遺物を中心に概説をおこなう。また、木器・石器・骨角器・祭祀遺物等についても重要なものについて述べ、遺物全体及びその詳細については後日の報告に譲ることとしたい。なお、今回の調査で出土した縄・布製品については布目順郎先生、人骨については埴原和郎先生に鑑定をお願いした。

(1) 土器

土器は弥生時代前期から中世におよぶ時期のものがある。弥生時代前期から中期の土器が最も多く、特に第Ⅰ様式末から第Ⅲ様式にかけて良好なものが多い。また、この時期の土器には他地域から搬入されたものも多く含まれている。弥生時代後期から古墳時代前期の土器は遺構数に比例して少くなる。また、古墳時代後期の須恵器や土師器、平安から室町時代の土器類も同様に少い。以下、出土した遺構ごとに土器の説明をおこなうこととする。

ＳＤ－201出土土器（第26図）

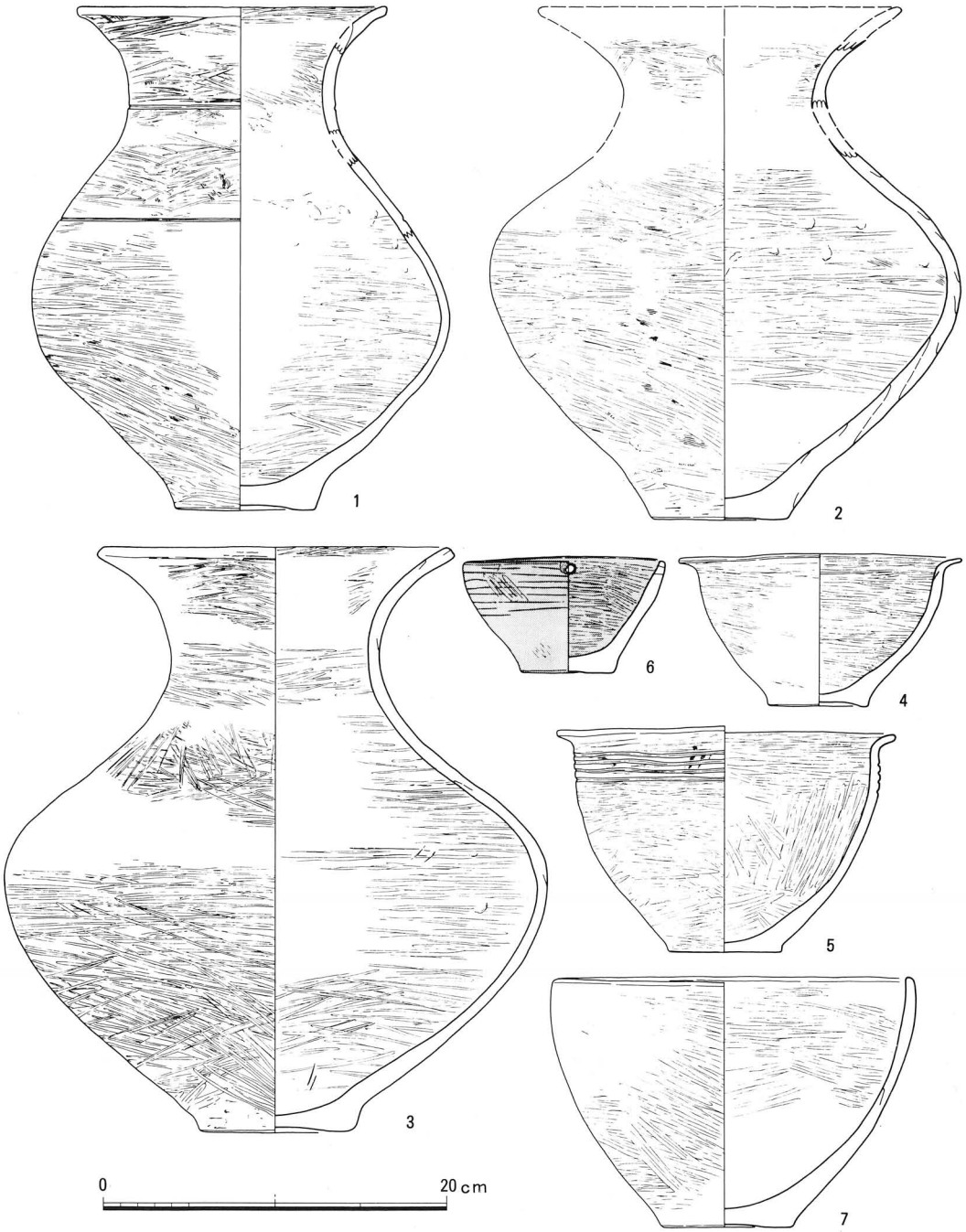
壷　第26図は中形の広口壷である。口縁部が発達し、大きく外反している。口縁部と体部の界には３条の貼り付け突帯、体部中位に１条以上の貼り付け突帯がみられる。貼り付け突帯は断面三角形で鋭い。外面は横位のミガキ、内面は口縁部と体部が横位、また、口縁部と体部の界あたりは縦位のミガキとなる。色調は黒褐色を呈す。



第26図　ＳＤ－201出土土器（Ｓ＝¼）

ＳＫ－153出土土器（第27図）

壷　１～３は中形の広口壷である。１は暗赤褐色を呈し、胎土はガサガサした感じで、表面の剥落が著しい土器である。二次焼成を受けているようである。土器は口縁部と体部の界、体部中央の上位に１条のヘラ描沈線をめぐらすが、沈線は浅く細めである。内外面



第27図　ＳＫ－153出土土器（Ｓ＝¼）

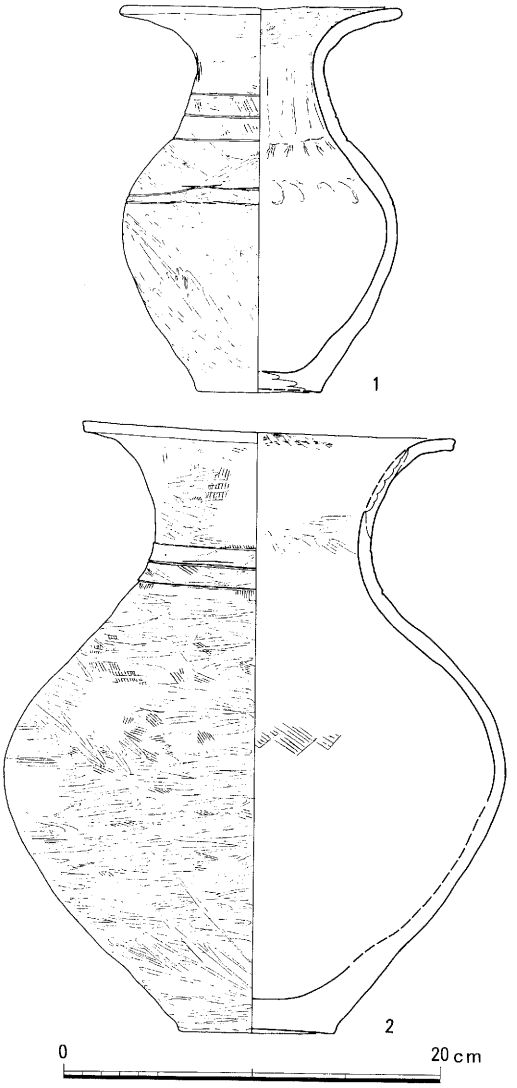
は丁寧な横位のミガキを施す。2・3は同形態の土器である。体部が大きく張り出し、口縁部が強く外反する形態である。これらの土器は全く文様をもたないもので、内外面は横位のミガキを施している。

鉢　4～7は鉢である。4・5は外反する口縁をもつ小形の鉢である。4は完形品である。4は内外面に横位のミガキを施す。無文である。5は4よりやや大きめで、口縁部下に4条のヘラ描沈線をめぐらす。内外面は横位のミガキを施すが、内面はさらに縦位のミガキをおこなう。6・7は直口の鉢である。6は小形品で、口縁部に一対の穿孔をおこない紐穴としている。やや厚手で重量感のある土器である。口縁部には7条のやや粗雑で浅い条線のヘラ描沈線をめぐらしている。この沈線の施文の後、ヘラミガキをおこない内外面に赤色塗彩をおこなう。外面の体部下半は器面が剝落し、塗彩は落ちている。生駒西麓産の土器で完形品である。7は中形品で、半球形の形態を呈している。内外面は横位のミガキを施す。また、両面及び破面の一部には煤状の炭化物が付着している。本土器も文様をもっていない。

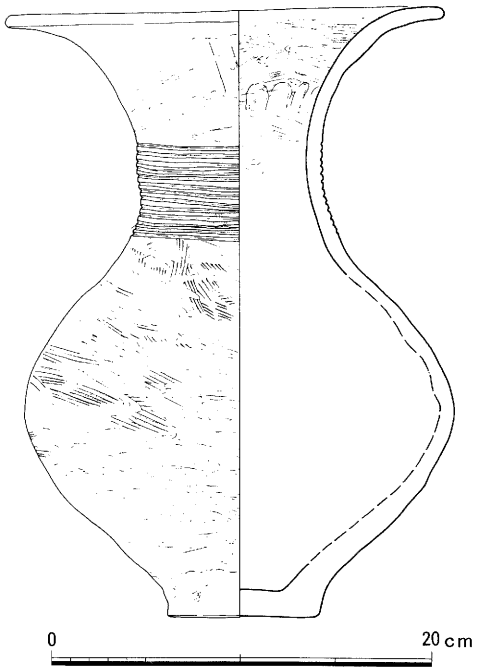
落ち込みⅢ－2溝状遺構出土土器（第28図）

壺　1は小形の広口壺である。口縁部が発達し、大きく外反している。体部は縦長の球形となる。口縁部と体部の界には3条の細くて浅いヘラ描沈線がめぐる。また、体部中央のやや上位にも同様のヘラ描沈線が2条粗雑にめぐるが、このヘラ描沈線はミガキ調整によって消えているところがあり、もう一度部分的に描いている。外面は体部中央が密で丁寧なミガキであるが、他は粗雑にミガキをおこなっている。内面は口縁部のみミガキ調整で、他はしぼり痕と指頭圧痕が残る。土器の色調は黒褐色を呈す。

2は中形の広口壺である。球形の体部にやや直立ぎみに立ち上がる口縁部がつく。口縁部と体部の界には約2.5㎝幅の削り出し突帯



第28図　落ち込みⅢ－2出土土器（S＝¼）



第29図　ＳＫ－154出土土器（Ｓ＝¼）

がつき、突帯中央に１条のヘラ描沈線がめぐらされる。ヘラ描沈線は浅く細い。削り出し突帯はハケ状工具によってつくり出されており明瞭な段となっている。外面は全体に斜位あるいは横位のミガキ調整をおこなっている。内面は口縁部にミガキがみられる他、ナデ調整を施している。ミガキは丁寧である。色調は暗灰黄色を呈し、他の前期土器とはやや色調が異なる。本土器は口縁部の一部を失うが、ほぼ完存しており、内部より二体分のネズミの骨を検出した。１と２の土器は近接して出土しており、同時期の資料と思われる。

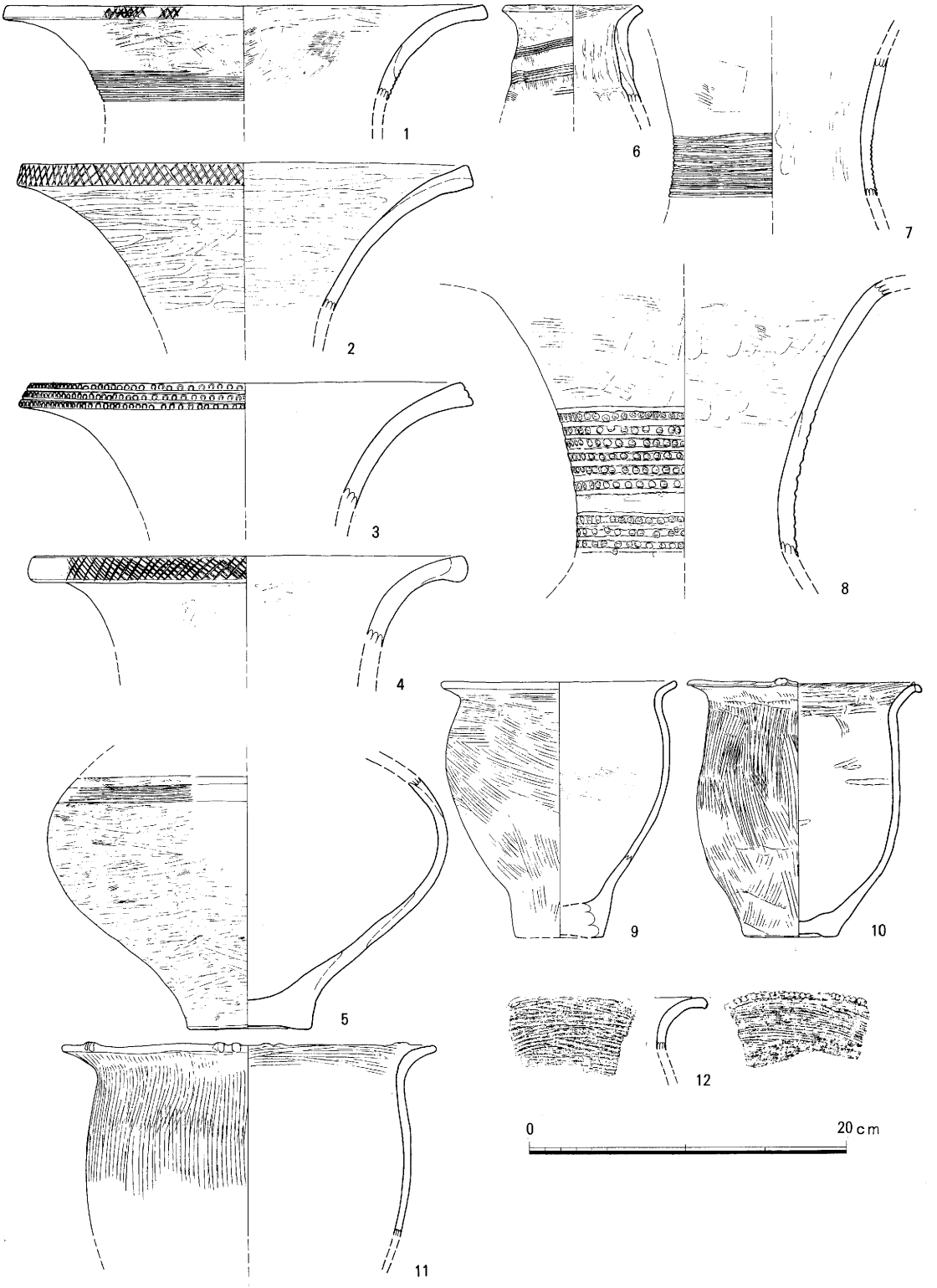
ＳＫ－154出土土器（第29図）

壷　第29図はＳＫ－154より出土した広口長頸壷である。口縁部の一部を欠くが、ほぼ完存する土器である。口縁部は大きく外上方へのび、頸部は長くなってきているが、全体に安定した均整のとれた壷である。頸部には13条のヘラ描沈線が等間隔に丁寧にめぐっている。ヘラ描沈線は幅0.2cm前後で深く刻まれている。外面の調整はハケ後丁寧な横位・斜位のミガキをおこなう。内面も口縁部から頸部にかけて同様のミガキがみられる。土器の色調は黒褐色を呈す。

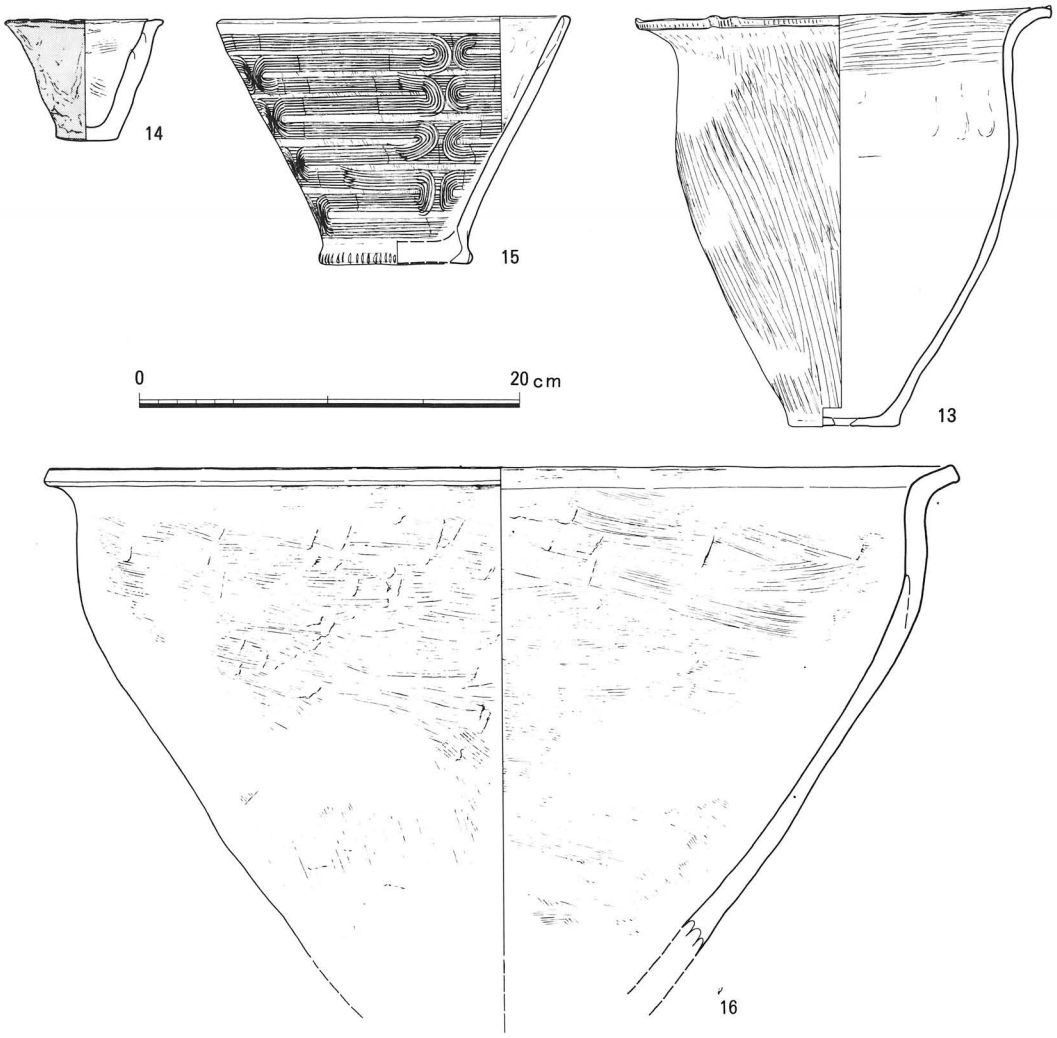
ＳＫ－123出土土器（第30～33図）

ＳＫ－123の中層と下層から半完形品を含む多量の土器が出土している。中層と下層から出土した土器は接合関係のみられるものがあり、かなり早く埋没し、中層の炭化物層で土坑全体が覆われるという状況を示している。ここに掲げる土器は短期間の廃棄資料で、ヘラ描文、櫛描文、貝殻文の三種が共存していることが明らかになった。上層から出土した土器には第30図－１、第32図－25・28、第33図－33、中層出土土器には第30図－６・11・12、第31図－15、第32図－18・21・27・30、第33図－32、下層出土土器には第30図－３・４・５・７・９・10、第31図－14、第32図－17・19・20・22・23・24・26がある。また、上層と中層で接合するものに第33図－31、上層と下層の接合では第32図－29、上層・中層・下層の三層間の接合では第31図－16、中層と下層の接合では第30図－２・８、第31図－13がある。また、遺構間で接合する土器に第32図－20があり、ＳＤ－103の上層から出土したものと接合している。ＳＤ－103の土器は保存状況が悪いことから、溝の埋土として混入したものであろう。

壷　第30図－１～５・７・８、第32図－17～28は広口長頸壷である。１～４・19・20は口縁部の破片で、１の他は口縁部が肥厚する形態をとる。口縁端部にはヘラ描の斜格子を描くもの（１・



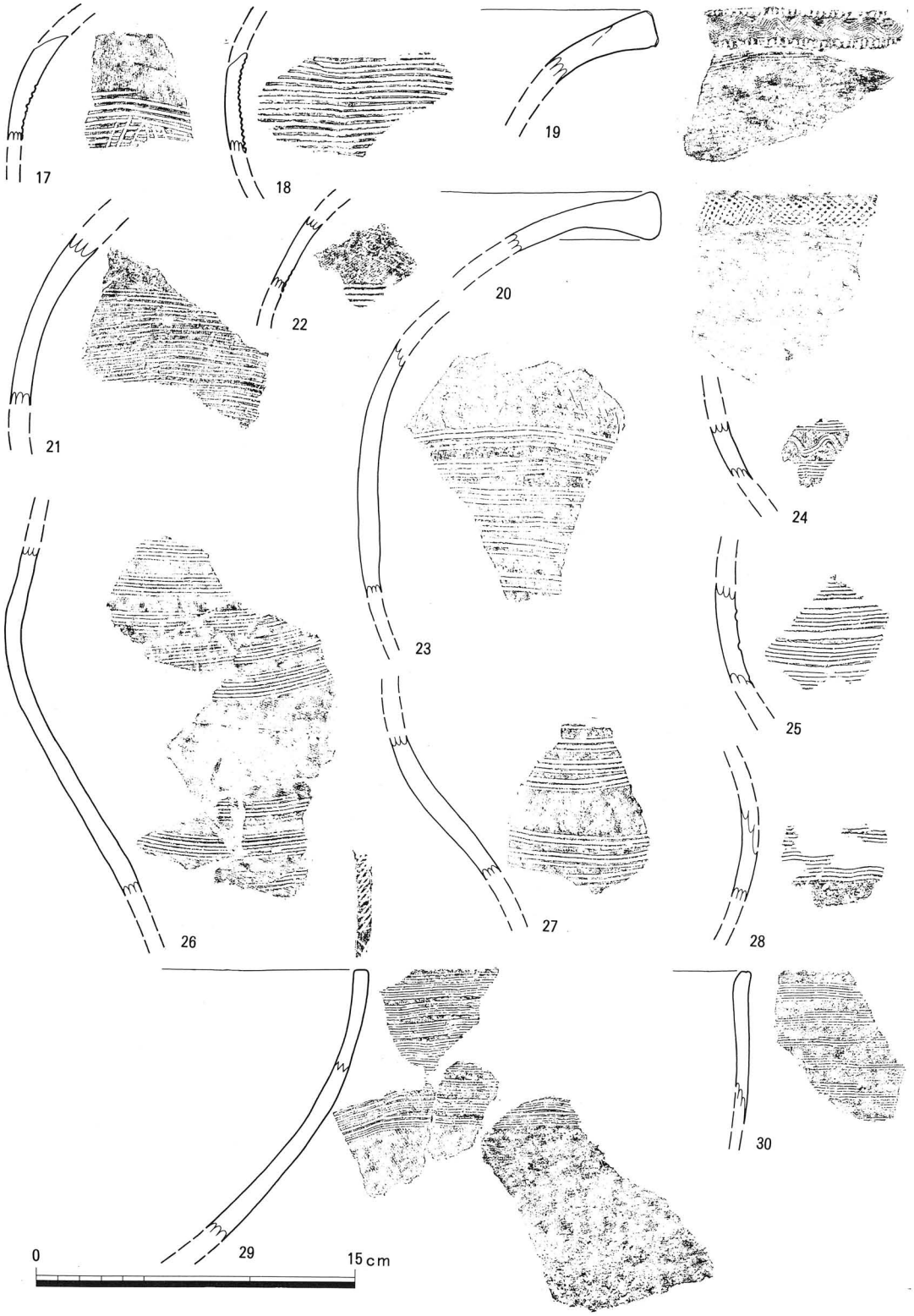
第30図　ＳＫ―123出土土器１（Ｓ＝¼）



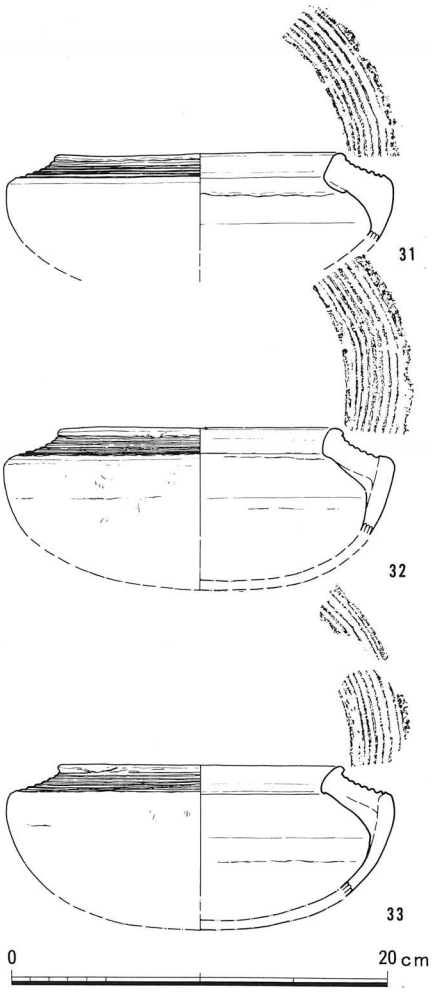
第31図　ＳＫ－123出土土器２（Ｓ＝¼）

２・４・20）の他、２条のヘラ描直線文の間に半裁竹管文を挿入するもの（３）、櫛描波状文を描くもの（19）がある。１はヘラ描直線文を施した後に斜格子文を重ねる。また、頸部上位には貝殻直線文を施している。

７・８・17・18・21～28は壷の頸部から胴部の破片である。７・17・18は多条のヘラ描直線文をめぐらしている。17には直線文上に斜線を３条描いている。８は太いヘラ描直線文をめぐらし、直線文間には丸棒による列点を挿入する。これらは原体が同じようである。21は禾本科植物を束ねて描かれた直線文で、粗雑で各直線文は重なり合っている。22・24・25・28は貝殻による直線文・波状文である。25は貝殻直線文を施した後、その間に太描のヘラ描直線文を挿入する。23・26・27は櫛描直線文をめぐらしたもので、23・27は太めの櫛原体を用いている。



第32図　ＳＫ—123出土土器拓影（Ｓ＝⅓）



第33図　ＳＫ―123出土土器３（Ｓ＝¼）

５は壷の胴部から底部にかけての破片である。胴部はやや扁球形を呈す形態で、２帯の櫛描直線文がめぐっている。外面は横位のミガキ、内面はナデ調整である。

６は小形の壷である。縦長の胴部に短く外反する口縁部がつく。外面は縦位のハケ調整の後、櫛描直線文を施す。内面にはしぼり痕がみられる。

甕　第30図―９～12、第31図―13は甕である。９・10は小形、11～13は中形の甕である。９は他の甕と異なる形態・調整を有するものである。口縁部は短く外反し、胴部に張りのもつ形態である。底部は粘土をさらに厚く貼りつけている。外面は斜位のハケ調整、内面は胴部下半に細密のハケ調整を施している。外面には厚く煤が付着している。10～13は同じ手法の甕であるが、10は底部が大きく、下脹れのする形態で、鈍重な感じを与えるものである。外面は縦位、口縁部内面は横位のハケ調整を施している。口縁端部には押圧がみられ、数カ所にあったと思われる。11・13は外面に縦位のハケ、口縁内面に横位のハケを施すものであるが、12では外面の口縁部下に横位のハケをさらに加えている。11・13は口縁端部の五カ所に２個一対の押圧をおこなっている。また、12・13の口縁部にはヘラによる刻み目をいれている。いずれの甕も内面は丁寧なナデ調整である。13の底部中央には径0.7cmの穿孔がみられる。これらの甕の外面には厚く煤が付着している。

鉢　第31図―14～16、第32図―29・30は鉢である。14は小形の粗雑なつくりの鉢でミニチュア土器とすべきものである。内外面ともナデ調整を施す。口縁部はわずかに外方で突出させている。外面全体と内面の一部に朱が付着している。15は外上方へ直線文的にひろがる形態の鉢である。底部は円板をこしらえた後、外側に粘土を貼り付け体部をつくっているが、剥離している。底部縁辺には刻目をめぐらしている。体部は精緻な疑似流水文を描いている。16は大形鉢である。口縁部は短く外方へ折れる。内外面ともにハケ後にナデ調整を施している。29・30は椀形の中形鉢である。ともに櫛描直線文をめぐらしている。30では直線文間にミガキを挿入している。29の口縁部上面にはヘラによる斜格子がみられる。これらはミガキ調整によって仕上げられている。

厚口鉢　第33図―31～33は厚口鉢である。ほぼ同形態のもので、この３点の他、接合できない

底部や口縁部の破片が30片ちかくある。31～33は焼成・手法・胎土のいずれも区別できないほど類似している。31では口縁部内側に粘土を巻きこんでいるのが特徴である。口縁部の上面には7～8条の貝殻直線文をめぐらしている。体部下半から底部はナデ調整で、底部の器壁は0.6cm前後で薄い。口縁部は体部の内側に内行するように厚く粘土を貼り付けつくっている。

ＳＫ－151出土土器（第34・35図）

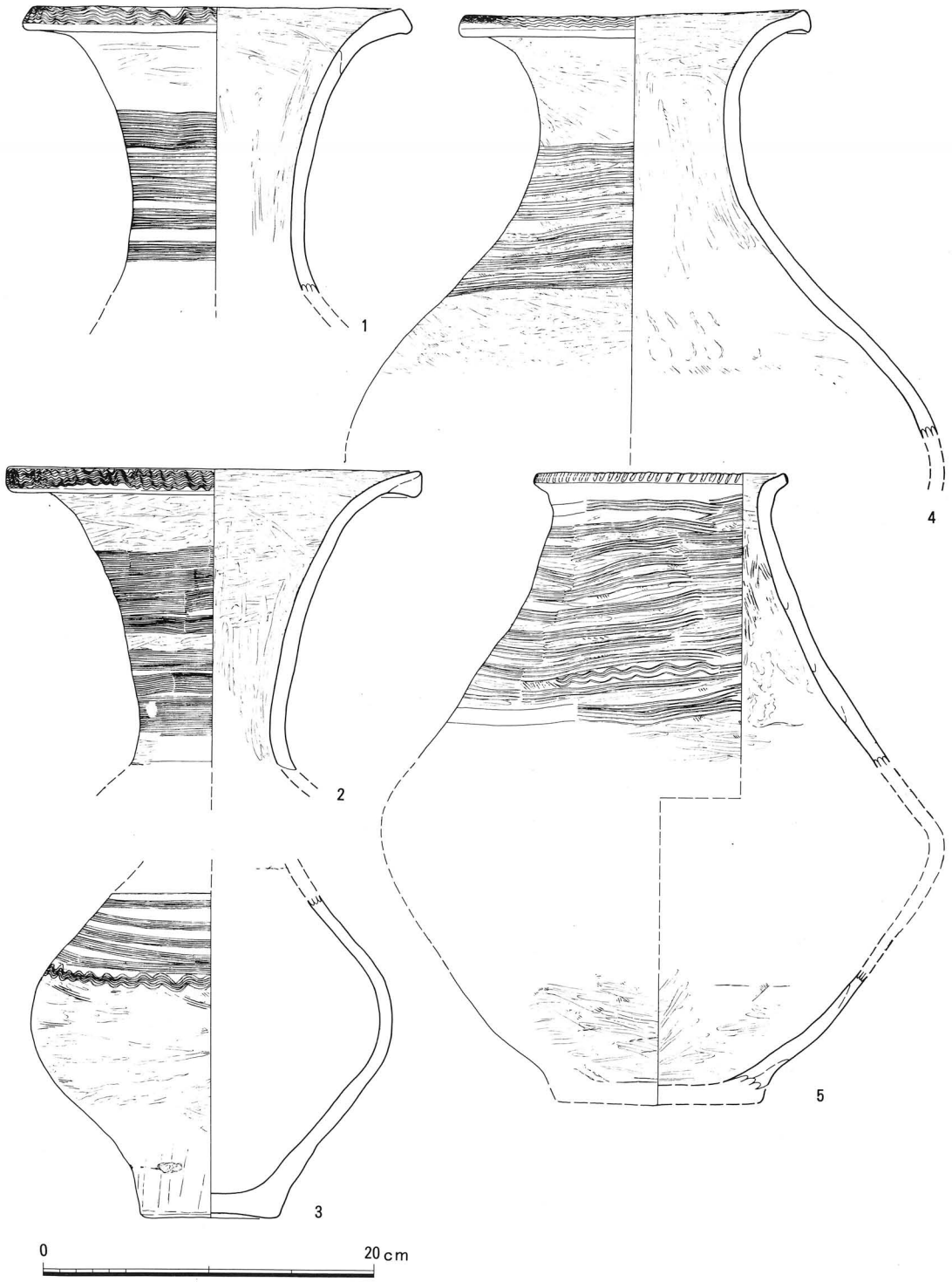
ＳＫ－151の中層・下層からは大形破片の土器が木器類とともに出土している。ここに図示した土器は下層より出土した土器でその一部には中層と接合したものがあるが、下層の植物腐植層から出土したものが大半を占める。

壷　第34図－1～3、第35図－6は広口長頸壷である。1・2は口縁部から頸部の破片である。1・2ともに口縁部が肥厚し、端面には櫛描波状文をめぐらす。1は頸部から胴部にゆるやかにひろがるが、2は頸部下位がややすぼまる形態である。これらは頸部に櫛描直線文を描くが、2は直線文を密に描き頸部中位で二段に分かつ。その空間にはミガキ手法がみられる。内外面ともに丁寧なミガキがおこなわれる。3・6は胴部から底部の破片である。3は胴部に櫛描直線文をめぐらし、最下段に稚拙な波状文を描く。6は黒褐色の塗抹物が塗布された壷で、頸部には櫛描波状文、胴部には櫛描流水文をめぐらしている。流水文は直線文を6帯描き、上下の直線文を半円形で結合させたものである。また、直線文の始点と終点の各々を結合させているため、横型流水文にはなっていない。

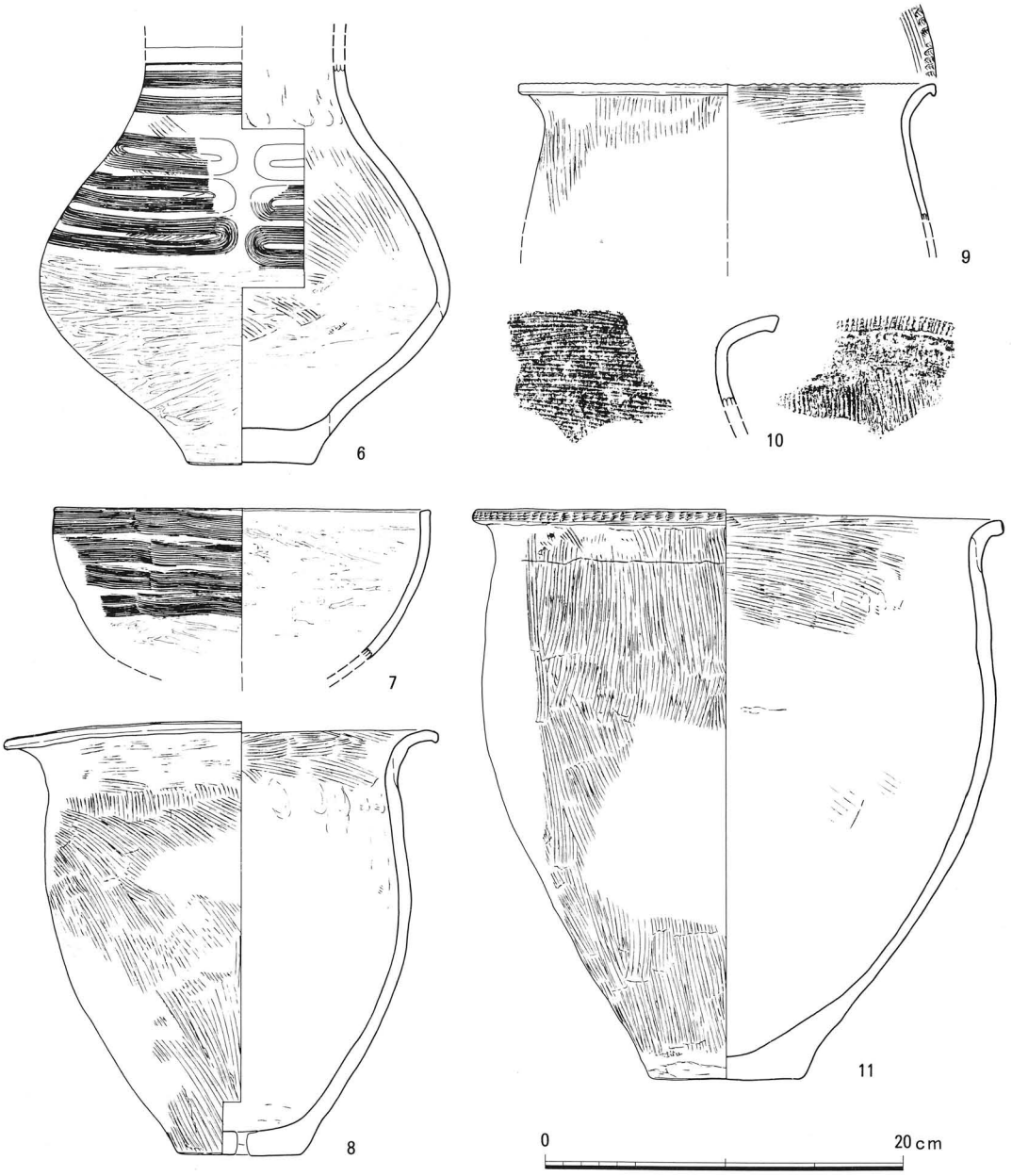
第34図－4は大形の広口壷である。胴部に張りのもつ壷で、口縁部は大きく外反する。口縁部はわずかに肥厚し、端部には粗雑な櫛描波状文をめぐらす。頸部には6帯の櫛描直線文が力強く描かれている。直線文間にはミガキが挿入されている。第34図－5は口縁部が短く外反した壷で、作風は4に似る。口縁端部はヘラによる刻目を入れ、頸部には12帯の櫛描直線文をめぐらす。直線文間の一部に波状文を挿入する。4・5ともに櫛描文は雑な描き方である。

鉢　第35図－7は椀形の鉢である。半球形の体部にやや内行する口縁部がつく。口縁端部は面をもつ。体部上半に4帯の櫛描直線文が描かれ、その文様間にはミガキが挿入される。内外面にはミガキがみられるがわずかである。

甕　第35図－8～11は甕である。8・9は中形、10・11は大形の甕である。これらの甕は体部から口縁部にかけてゆるやかに外反する形態で、外面および口縁部内面に粗いハケ調整をおこなう大和型甕である。8は器壁が厚く器高が低い鈍重な甕である。口縁部には刻目をもたない。体部は先にタテハケを施した後、全体にナナメハケを施す。口縁部下はヨコハケ後横位のナデをおこなう。内面は器面が粗れているが、丁寧なナデ調整を施す。底部中央に径0.6cmの穿孔をおこなう。9は器壁が薄く堅緻な焼成の甕である。口縁部は下方へ粘土を巻き込む。口縁部上端にはハケ原体による刻目をめぐらす。体部は粗いタテハケを施す。10は口縁部が強く折れ曲がる甕である。口縁部は端面を有し、その面にはハケ原体による刻目を施す。外面は口縁部下までタテハケがおよんでいるが、口縁部下はその上をヨコハケを施しナデでハケを消している。11は器壁の



第34図　ＳＫ―151出土土器１（Ｓ＝¼）



第35図　ＳＫ－151出土土器２（Ｓ＝¼）

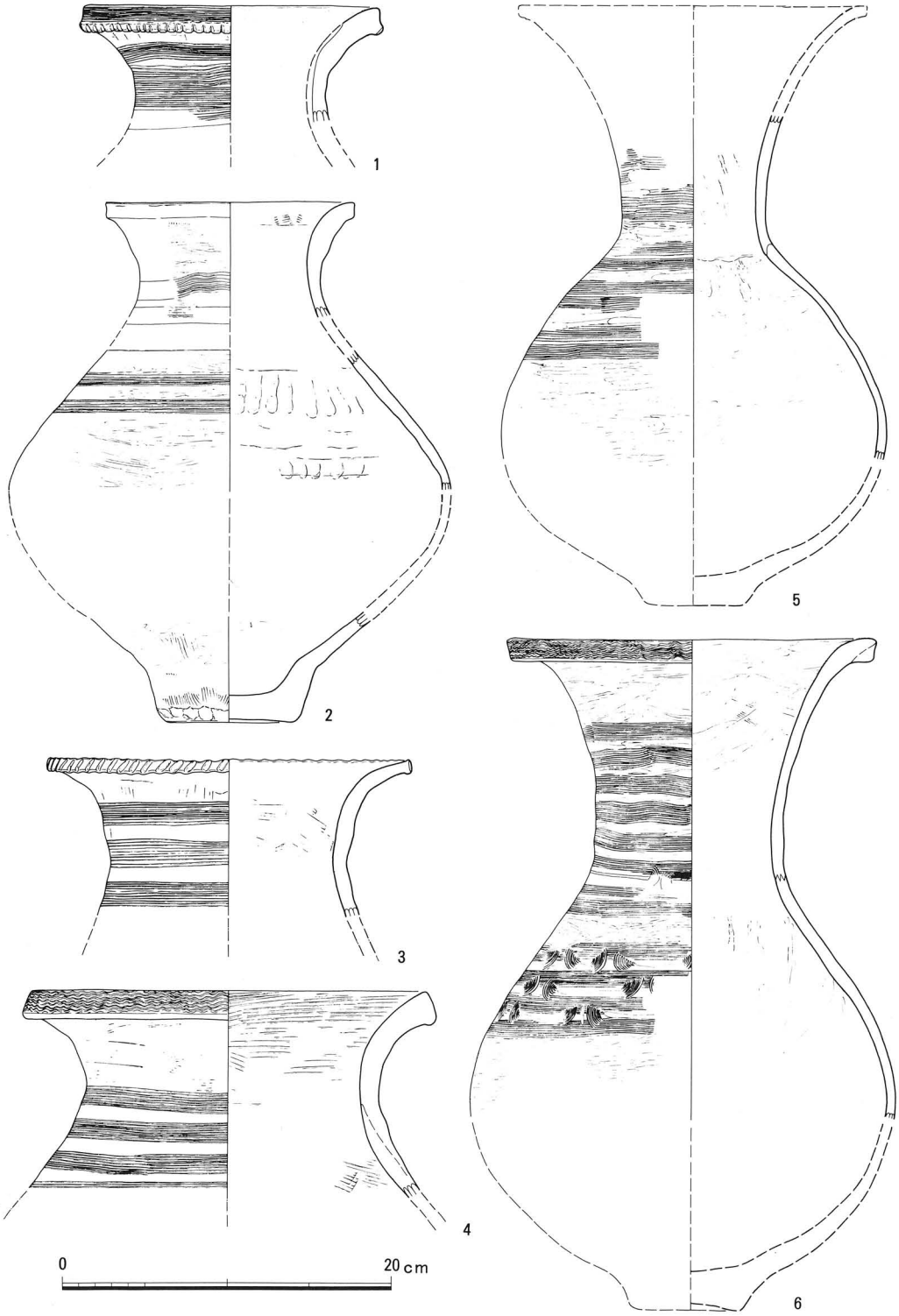
厚さ、形態、ハケ手法、焼成等が８の甕に類似しており、９の甕とは作風が異なる。11は口縁部が短く外反するもので、この部分の接合は８とともに明瞭である。口縁部にはハケ原体による刻目をめぐらす。口縁部下にはヨコハケが一部残るが、それより下位の体部にはタテハケが施される。内面は口縁部に外面と同じハケ、体部には異なるハケ調整がみられるが、ナデで消される。

ＳＤ－103出土土器（第36～39図）

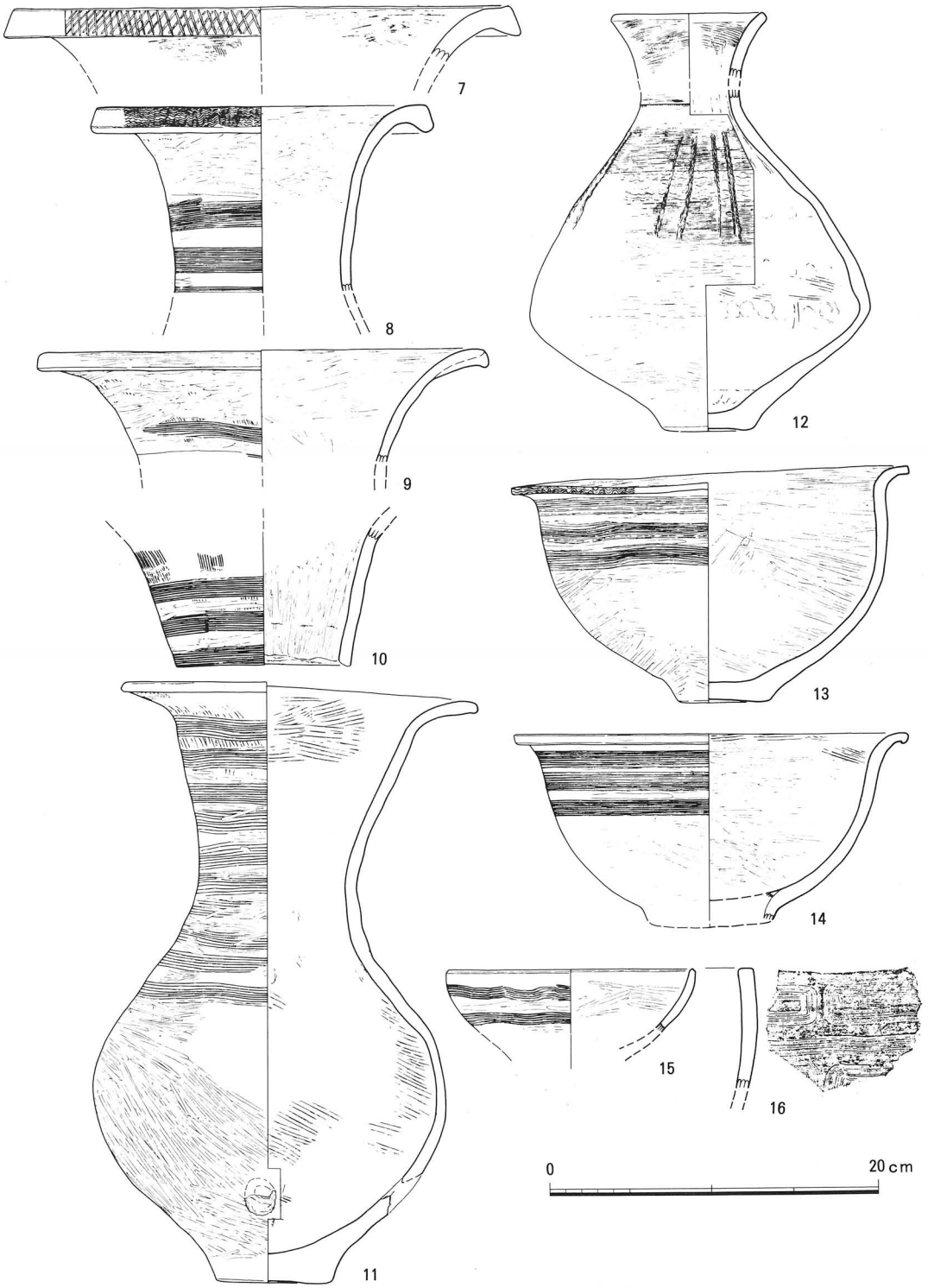
ＳＤ－103の上層・中層を中心に多くの土器が出土している。特に上層出土の土器が多く、第36図－１～４、第37図－12・15・16、第38図－17・19～21、第39図－22・23がある。また、上層と中層で接合するものに第36図－６、第37図－８～11・13・14、第39図－24・25がある。また、このような異層間の接合とは別に、遺構間で接合するものも３点確認しており、本溝の上層を中心とする土器は広い範囲に拡がっていることがわかる。この遺構間接合の土器としては前述ＳＫ－123出土の壷（第32図－20）の他に、第36図－４は第26次調査ＳＫ－2104上層から出土した土器に、第37図－11はＳＫ－131最下層出土土器に各々接合している。この他、中層出土土器に第39図－26、下層出土土器に第36図－５、第37図－７、第38図－18がある。

壷　第36図－１～４は広口壷である。これらの壷は短い頸部に外反する口縁部がつく形態である。１・４は口縁部が肥厚し、端部には１は櫛描直線文、４は櫛描波状文がめぐる。１の口縁端部下にはヘラによる刻目がつけられ、頸部には櫛描直線文が間隔をあけずに描いている。２は口頸部が厚くなる。口頸部の外反度は強くなく、頸部から胴部にかけて櫛描直線文が施される。底部はやや突出ぎみにつくられている。３は他に比べ、全体に器壁が薄い。口縁端部はヘラによる刻目が強くつけられ、頸部には櫛描直線文が描かれている。他の広口壷にはミガキ調整がみられるが、この壷にはミガキはなく、ハケ後ナデ調整をおこなう。４は大形の広口壷で器壁は全体に厚く重量感のある土器である。頸部には櫛描直線文がめぐる。口縁部内面には粗いハケを施した後、ナデで消す。

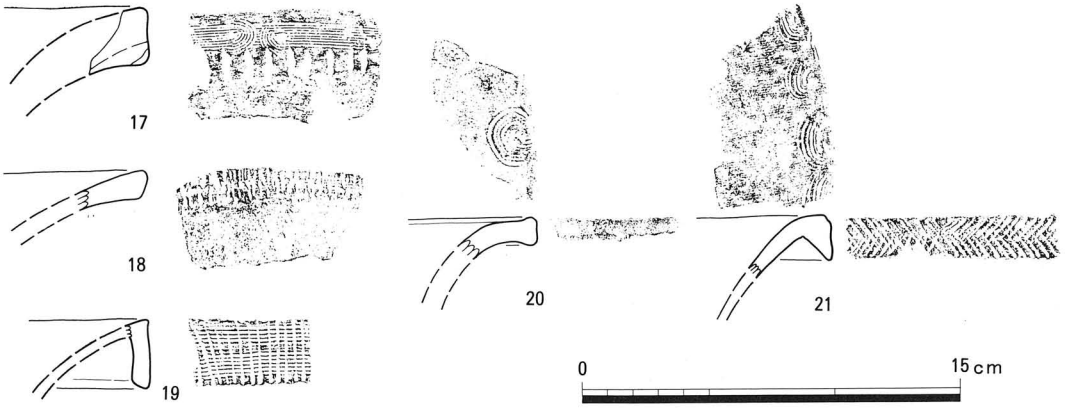
第36図－５・６、第37図－７～11、第38図－17～21は広口長頸壷である。５は直口壷の可能性もある。５は外面に黒色の塗抹物を塗布したもので、頸部から胴部にかけて２条一帯の櫛描直線文が描かれている。直線文間にはミガキが施されている。内面は胴部上半にしぼり痕が残るが、全体にミガキ調整がおこなわれている。胎土は素地がやや粗くガサガサした感じのものである。文様構成や胎土から搬入土器であろう。６は均整のとれた壷である。口縁部は下側に肥厚し、口縁端部には櫛描波状文を描く。また、頸部には７条の櫛描直線文、やや間隔をあけて胴部中央に４条の櫛描直線文を描くが、頸部最下段及び胴部の直線文間には扇形文を描き疑似流水文としている。直線文間にはミガキを挿入する。内外面ともミガキ調整をおこない、丁寧に仕上げている。７は大形の広口長頸壷で、口縁部の破片である。口縁部は下方へ垂下し、大きな端面をもつ。端面にはヘラによる斜格子を描いている。８はあまり口縁部が外側へ開かない形態である。口縁部は下方へ肥厚し、口縁端部には櫛描波状文を描く。頸部には櫛描直線文をめぐらし、直線文間にはミガキを挿入する。内外面ともに横位のミガキ調整をおこなう。９は大きく外反する口縁部を



第36図　ＳＤ－103出土土器１（Ｓ＝¼）



第37図　ＳＤ－103出土土器２（Ｓ＝¼）

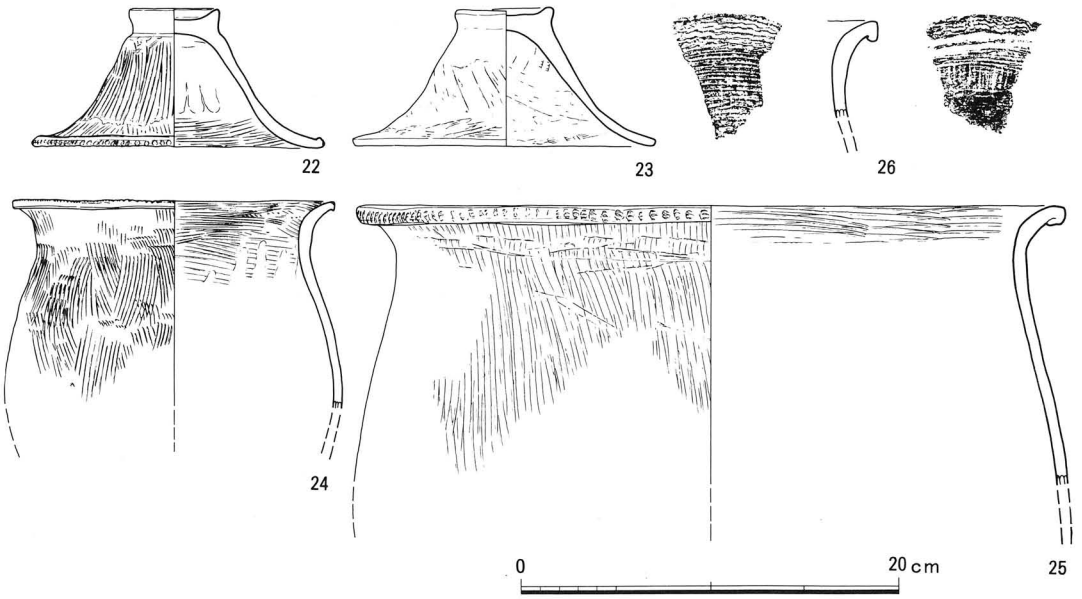


第38図　ＳＤ―103出土土器拓影（Ｓ＝⅓）

有する形態で、口縁部はわずかに肥厚する。口縁端部は無文で、頸部には櫛描直線文をめぐらす。直線文間にはミガキを挿入する。内外面とも粗いミガキ調整をおこなう。10は頸部の破片である。３条の櫛描直線文がめぐり、直線文間にはミガキを挿入する。頸部上端にはハケ調整がのこる。この土器は頸部中位で欠損したのち、下端の破面を磨き、形を整えている。また、上端も口縁部は欠損しており、円筒状の形態を呈し、器台として転用したものであろう。11は球形の胴部にゆるやかに外反する頸部と大きく広がる口縁部をもつ。口縁部は肥厚せず、口縁端部はやや丸い。頸部から胴部にかけて10帯の櫛描直線文をめぐらす。直線文間にはミガキを挿入するが、粗雑で直線文が消されている部分が多い。胴部下半には穿孔がみられる。内面はハケ後ナデ調整を施す。胎土は生駒西麓産を示す。17～21は広口長頸壷の口縁端部である。17は接合部で剝離している。口縁部下端にはヘラによる刻目をいれる。端面部分には櫛描直線文をめぐらし、直線文上に扇形文を挿入し疑似流水文としている。18は口縁部があまり肥厚しない形態である。口縁端部には櫛描直線文をめぐらした後、口縁端部上端・中央・下端の三カ所をヘラによって刻目を施す。19は大きく口縁部を垂下さす形態である。口縁端面には２条の櫛描直線文をめぐらした後、直線文上をヘラでおさえ、刻目風にする。20は口縁部が上方・下方へわずかに肥厚する形態である、口縁端部は無文で、口縁部内面に櫛描扇形文を描く。21は口縁部が大きく垂下する形態である。口縁部内面がわずかに平らになり、その部分に粗雑な櫛描扇形文が描かれる。口縁端面は櫛状工具で羽状に押捺する。

第37図―12は口頸部が短く外反した壷である。胴部はやや下膨れで扁球形を呈す。頸部と胴部の界はハケ状工具によって胴部側を削り、段を形成している。口縁部は横位のハケ調整、胴部は細条の柔軟な工具によって直線文を描き、その間に波状文を入れる。さらに、この文様上には縦方向に５ケ所４～５条の波状文を描くが、波状文は粗雑である。外面は丁寧なミガキ調整を施す。内面は頸部にハケ調整を残すが、他はナデ調整によってハケを消している。この壷は形態や文様、胎土から伊勢湾岸地域の土器であろう。

鉢　第37図―13～16は鉢である。13・14は中形の鉢である。口縁部が外反し、胴部は半球形を



第39図　ＳＤ－103出土土器３（Ｓ＝¼）

呈す。13は口縁端部に櫛描波状文、胴部に櫛描直線文をめぐらし、直線文間にはミガキを挿入する。内外面はミガキ調整をおこなう。14も同様である。15は鉢とするが、高杯かもしれない。口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。外面には２条の櫛描直線文がめぐり、その間にはミガキを挿入する。色調は乳褐色を呈し、他地域からの搬入土器と思われる。16は大形の鉢である。口縁部は直口する。外面には横型流水文が櫛状工具で描かれる。流水文の反転部は方画状に櫛状工具を反転させる。内外面ともにミガキ調整をおこなう。

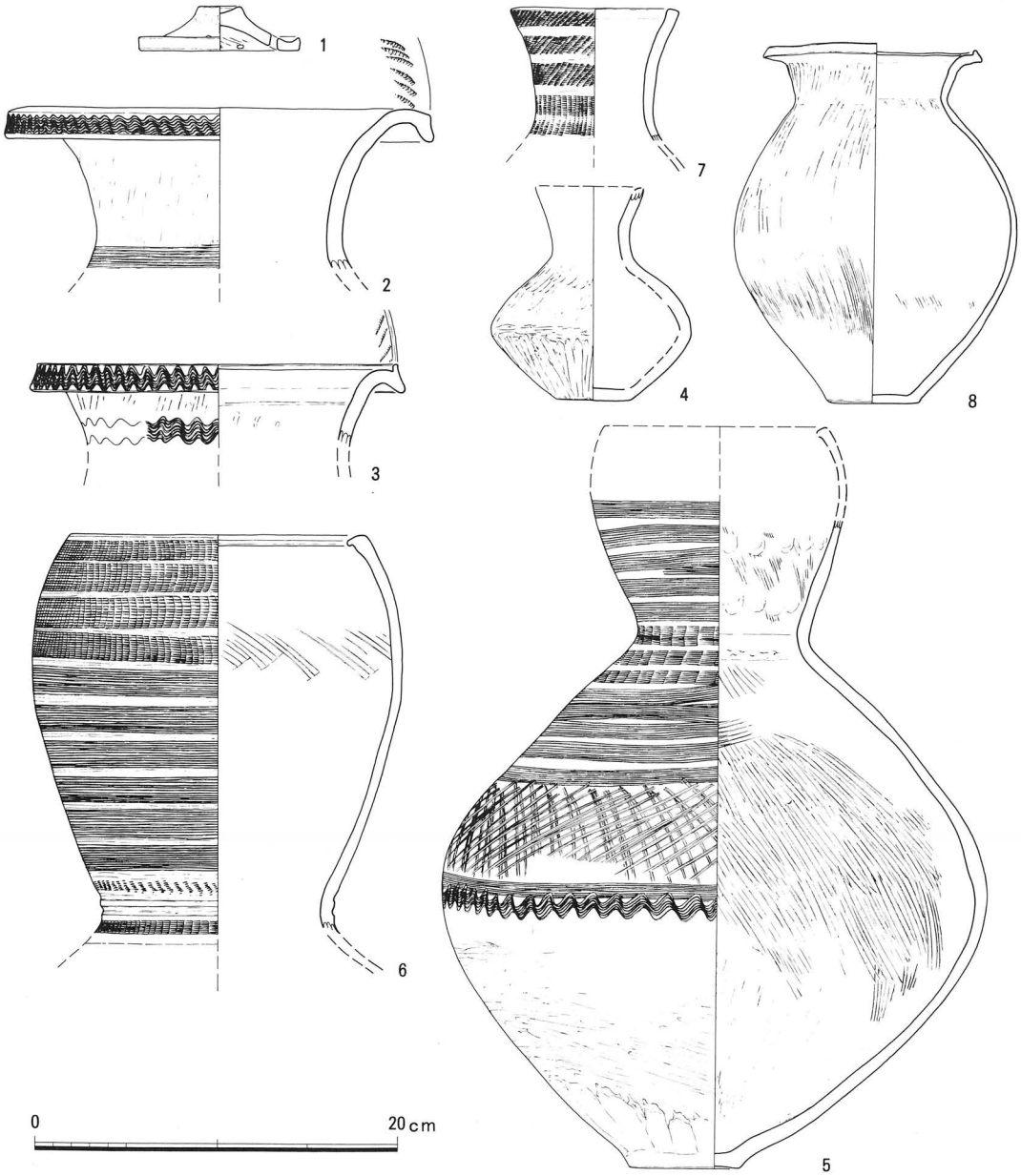
甕蓋　第39図―22・23は中形の甕の蓋である。22は大和型甕とセットになる蓋で、裾端部は甕の口縁部のような調整手法を用いている。端部は上方へ巻き込み、刻目をつける。外面は縦位の、内面は横位の粗いハケを施す。蓋のつまみ部分は指頭でつまみ出し、突出させる。内面の裾部には煤が付着する。23は内外面にわずかであるがケズリ手法がみられる。ケズリ後ナデ調整をおこなう。内面の裾部には煤が付着する。

甕　第39図―24～26は甕である。24は中形の甕である。形態的には大和型甕に類似するが、内外面のハケ調整、口縁端部の刻目、胎土が異なる。外面は胴部中位でナデ調整がみられる。内外面のハケは静止痕が明瞭に残り、刻目は鋭利に刻み込む。器壁はやや厚くつくられている。内面の胴部は丁寧にナデ調整をおこなっている。外面には厚く煤が付着している。25は大形の大和型甕である。口縁部は下方へ粘土を巻き込み、端部は丸く仕上げている。口縁端部はハケ状工具による刻目をいれる。外面は縦位の粗いハケ、口縁部内面は横位の粗いハケを施す。胴部内面はナデ調整をおこなう。外面にはわずかに煤の付着がみられる。焼成は堅緻である。26は中形の近江型甕の口縁部である。形態的に大和型甕に類似するが、口縁部は下方へ粘土を巻き込み、口縁端

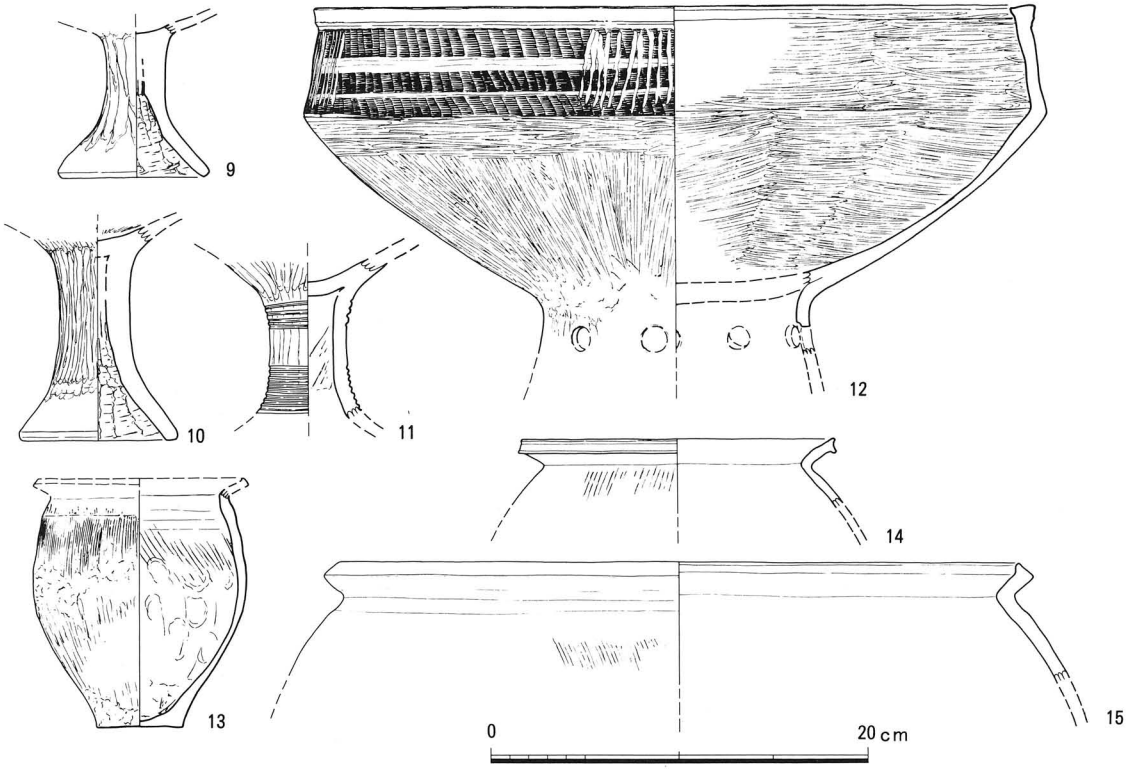
部は面をもつ。口縁端面及び口縁部内面には粗雑な波状文が描かれている。頸部外面には縦位、内面には横位の粗いハケがみられる。色調は乳褐色を呈し、文様や形態から近江産であろう。

ＳＫ－113出土土器（第40・41図）

ＳＫ－113は上層から最下層にわたって多くの土器片を木器とともに検出した。完形土器は少なく最下層で壷蓋、上層で小形壷を各１点が出土したのみである。また、下層から最下層にわた



第40図　ＳＫ－113出土土器１（Ｓ＝¼）



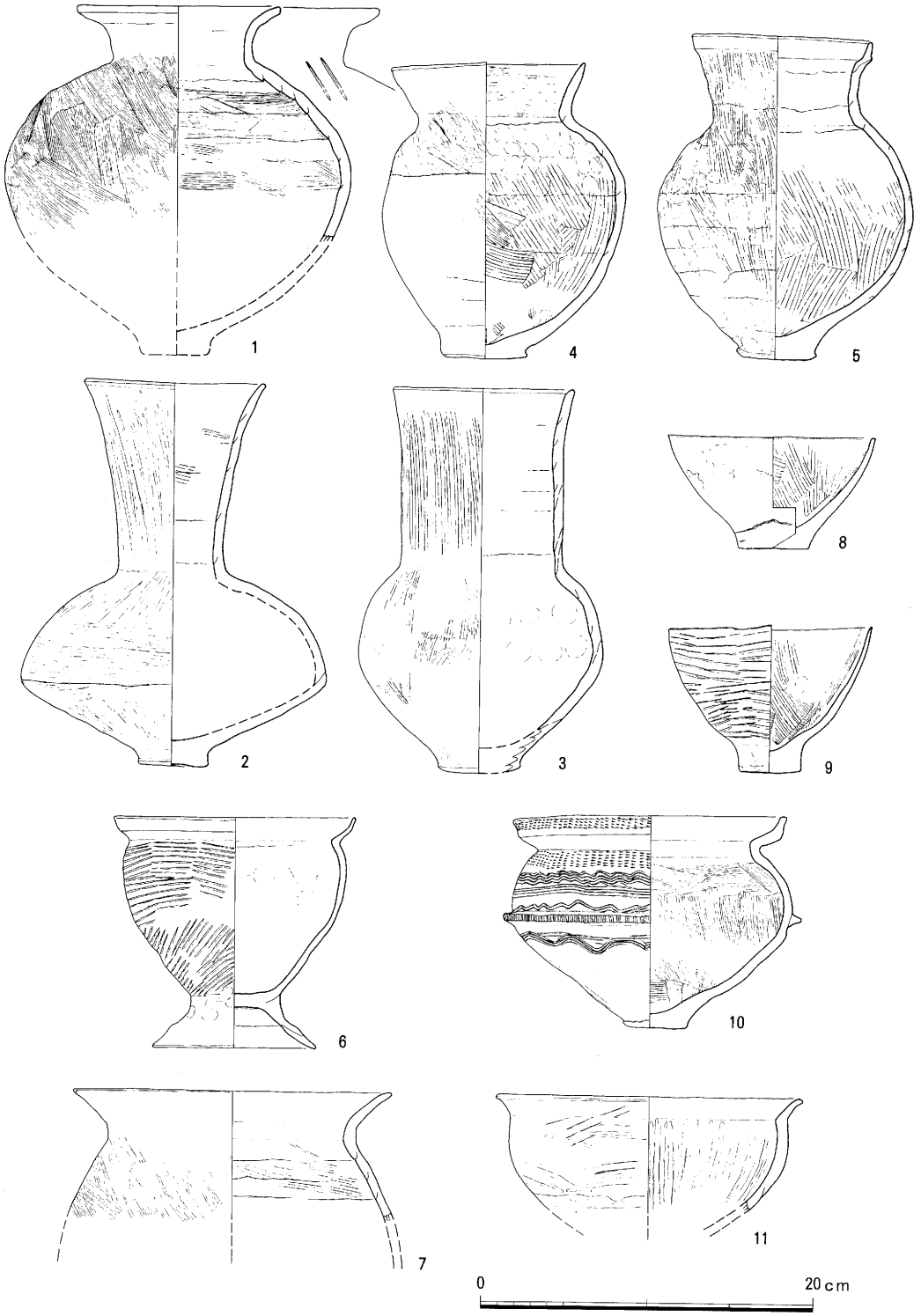
第41図　ＳＫ－113出土土器２（Ｓ＝¼）

り細片となって出土した壷（第40図－８）はほぼ完形に復元できるものとなった。上層出土土器は第40図－２・４、第41図－９～11、最下層出土土器は第40図－１・３・６・７、第41図－13～15である。また、下層から最下層にかけて接合した土器として第40図－５・８、第41図－12がある。

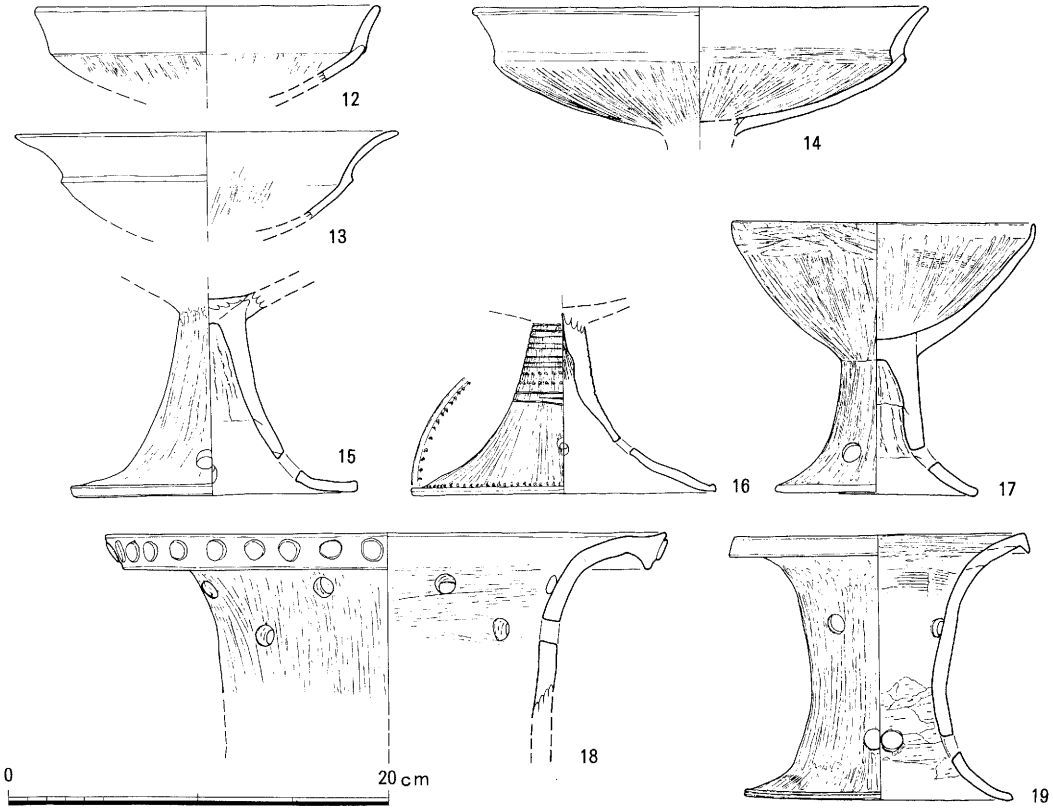
壷蓋・壷　第40図－１は壷蓋である。扁平な笠形の小形蓋である。無頸壷の蓋になると思われる。二孔一対の紐孔をもつ。外面はミガキ、内面はハケ後ナデ調整をおこなう。２・３は広口壷である。２は口縁が垂下し、３はハネ上げ口縁となる。２・３ともに口縁部に櫛描波状文、上面に櫛描列点を施す。４～６は細頸壷である。４は小形の無文の壷である。５は中形、６は大形品で、ともに口頸部は内湾する。６は頸胴部界に二条の凹線をめぐらし、文様間にはミガキを挿入する。７は水差形土器である。櫛描列点と簾状文で飾られ、文様間にはミガキが挿入される。８は無文の壷で全面に煤の付着がみられる。器壁は薄く、ハケ後丁寧なナデ調整が施されている。

高杯・台付鉢　第41図－９～11は高杯の脚部である。９・10は同形態のもので、柱状の脚部に短い裾部がつく。外面は太いミガキがみられる。内面は脚部深くまでケズリをおこなっている。11は水平縁高杯の脚部と思われる。脚部は太いミガキの後、ヘラによる直線文を二帯施す。12は大形の台付鉢である。口縁部の折り返しは太い突帯状になっている。また、鉢底部には大きな円盤充塡がみられる。口縁部は３帯の櫛描簾状文を施した後、縦位のミガキを挿入する。

甕　第41図－13～15は甕である。甕は小形（13）、中形（14）、大形（15）の 各種がある。



第42図　ＳＤ－1101出土土器１（Ｓ＝¼）



第43図　ＳＤ―1101出土土器２（Ｓ＝¼）

13の胴部下半はケズリ後、ミガキを施す。15の口縁部はハネ上げ口縁である。煤の付着はない。

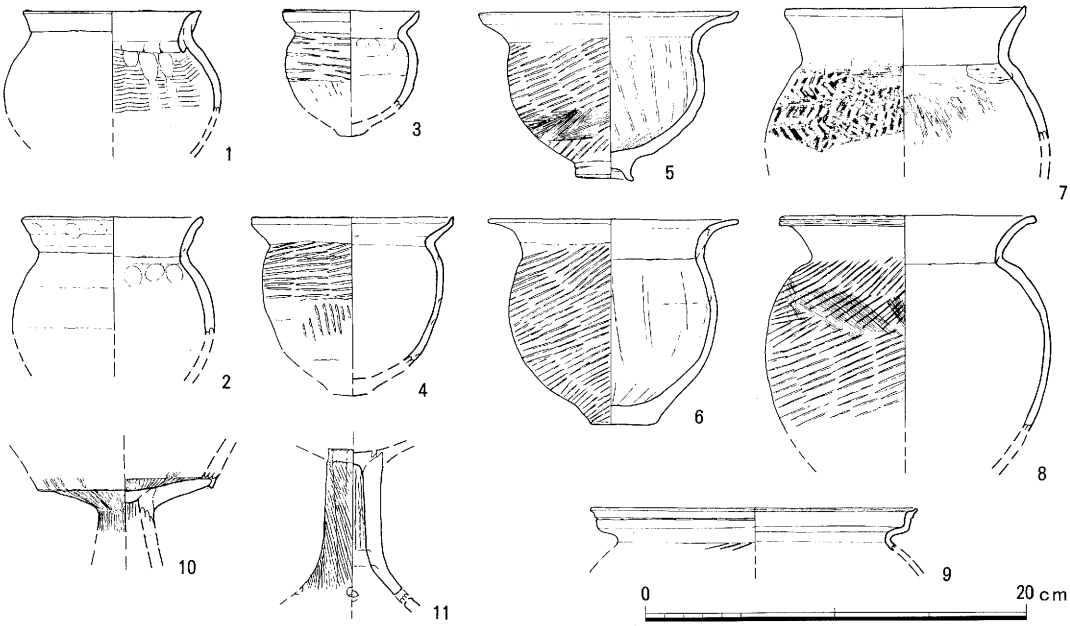
ＳＤ―1101出土土器（第42・43図）

ＳＤ―1101の中位から上位にかけて完形土器を含む多くの土器を検出した。ほぼ完存するものとしては第42図―２・４・５・８～10、第43図―17・19がある。他は破片であるが、出土状況からほぼ一括廃棄されたものと考えられる。

壷　第42図―１は広口壷である。内外面にハケ調整痕が残る土器で、内面には接合痕が明瞭に残っている。胴部上半の頸部ちかくにはヘラによる２本の縦線が描かれている。２は細頸壷で、扁球形の胴部に細い口頸部がつく。３は中形の長頸壷である。外面はハケ調整で仕上げている。４・５は短頸壷である。４は胴部下半の成形後、上半の粘土積み上げがよくわかる土器である。口縁部は鋭くなっている。５は球形の胴部にやや受口状の口縁部を有するものである。胴部下半には右上がりのタタキ成形がみられるが、ナデによって消されている。

甕　第42図―６・７は甕である。６は小形の台付甕である。甕の口縁は受口状になるもので、甕の成形後、台部を付加している。７は中形の甕である。内外面ともハケ調整を残すものである。

鉢　第42図―８～11は鉢である。８・９は椀形の小形の鉢で、粗雑なつくりのものである。８



第44図　ＳＫ－103出土土器（Ｓ＝¼）

はハケ後、ナデをおこなう。底部ちかくにはヘラによる記号ふうのものがみられるが、成形時のキズかも知れない。９はタタキ成形を残す鉢で、粗雑な調整をおこなっている。10は近江産の受口状口縁の鉢である。扁球形の胴部のやや下位に１条の貼り付け突帯をめぐらし、突帯上に刻目を施す。口縁部には櫛描列点、胴部には櫛描列点の他、波状文、直線文を描く。11は脚台部が欠失しているが、台付鉢になると思われる。口縁部は外反する。外面にはタタキ痕がわずかに残るが、内外面をミガキ調整で仕上げている。

高杯・器台　第43図―12～17は高杯である。皿状の杯部に外反する口縁部（12～14）と椀形の杯部（17）をもつ高杯がある。14と16は乳褐色の色調を呈すもので、同一個体かも知れない。16はヘラによる直線文と列点文を描き、その後、ミガキを施す。

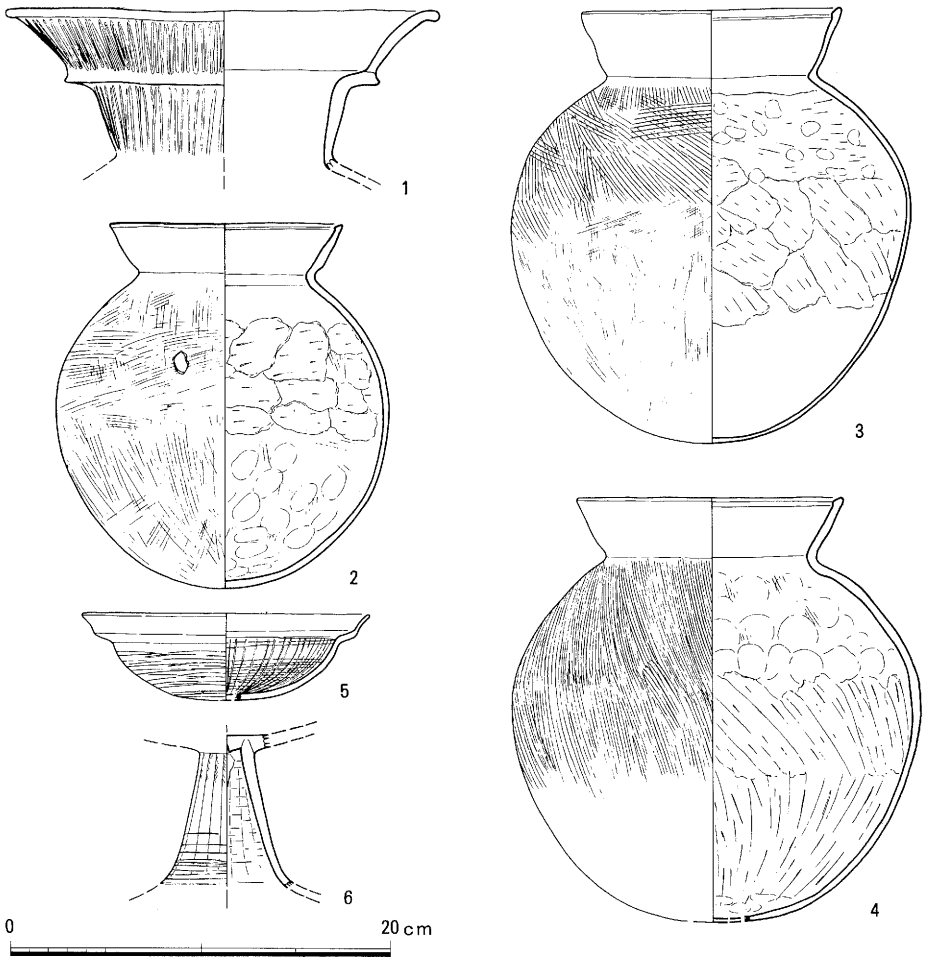
第43図―18・19は器台である。18は大形品で、口縁端面には円形浮文を貼付する。19は小形の器台である。外面はミガキ調整、内面にはケズリがみられる。

ＳＫ－103出土土器（第44図）

ＳＫ－103はわずかであるが、下層（第44図―１～３、７～11）と中層（４～６）から自然木等と混在して土器が出土している。

壷　第44図―１・２は小形の壷である。１・２とも球形の胴部に短い口縁部がつく。

甕　３～９は甕で、３～６は小形、７～９は中形品である。３～５は口縁部がハネ上げとなる。５の内面は放射状にミガキが施される。７は矢羽状のタタキで、内面はわずかにケズリがおこなわれる。９は東海地方のＳ字口縁甕である。口縁部に１条の沈線がめぐる。口縁端部は鋭い。



第45図　ＳＫ－124出土土器（Ｓ＝¼）

高杯　10・11は高杯である。10は内外面ともミガキを施す。11は面どり後、ハケ調整を施す。

ＳＫ－124出土土器（第45図）

ＳＫ－124は小規模な土坑で、土器数は少ないが、完形、半完形土器がまとまって出土している。第45図－１は上層、他は下層から出土しているが、上・下層ともほとんど時期差はない。

壷　第45図－１は二重口縁壷である。頸部は外上方へ立ち上がり、短く屈曲し、擬口縁をつくる。口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。外面はミガキ、内面はナデをおこなう。

甕　２～４は甕である。２はやや小形品で、完存品である。胴部に穿孔がみられる。２～４はほぼ同形態であるが、４は外面を斜位のハケ、内面の下半のみにケズリをおこない、他と異なる。

鉢　５は扁平な受口状口縁の鉢である。内外面は同心円状のミガキののち、内面は放射状のミガキを施す。口縁部は強いヨコナデをおこなう。

高杯　６は高杯脚部である。脚部は面取り後、裾部にミガキを施す。内面にはケズリが残る。

搬入土器（第46図）

今回の調査では多数の搬入土器を良好な状態で検出している。特に土坑や溝などの遺構から多数の土器とともに出土しているものが多い。例えば、前述したＳＫ—123出土厚口鉢（第33図）やＳＤ—103出土壷（第37図—11・12）と甕（第39図—26）、ＳＫ—113出土水差形土器（第40図—７）、ＳＤ—1101出土鉢（第42図—10）などがある。上記以外の掲載した土器のなかにも製作場所が限定できないながらも搬入土器の可能性の高いものもある。ここで取り上げた土器以外にも多数あるが、ここでは特に注目されるものを重点に報告する。時期的には弥生時代前期から後期まで、継続的に搬入され、河内地方、伊勢湾岸地域の土器が特に多くみられる。

第46図に示した土器は、本来の時期を示すものもあれば、遺構上面の包含層など二次的な資料もみられる。第46図—１はＳＫ—153・ＳＫ—154の上面、７は落ち込みⅡの上面、９は落ち込みⅢ—２溝状遺構の上面である。また、３は落ち込みⅡの廃土から、６はＳＫ—103から出土しており、これらは時期を決定する材料をもたない。２は落ち込みⅢ—１溝状遺構（第Ⅰ様式）、４はＳＤ—102（第Ⅲ様式）、５はＳＤ—106（第Ⅲ様式）、８は落ち込みⅠ溝状遺構（第Ⅲ様式）から出土しており、時期的に相応するものと考えられる。

内傾口縁土器　第46図—１～３は内傾口縁の土器である。砂粒を多く混和させた胎土で、灰褐色を呈している。１・２ともに長胴形の土器の胴部片と考えられる。１は貝殻、２は貝殻もしくは禾本科植物と思われるもので器面を調整している。２は内面に接合痕を明瞭に残している。３は口縁部が強く折れ曲がる厚口鉢タイプである。口縁部の内面には粘土の巻き込み痕が残る。口縁部の外面は貝殻で直線文風に二帯描いている。胴部の下半はナデをおこなう。

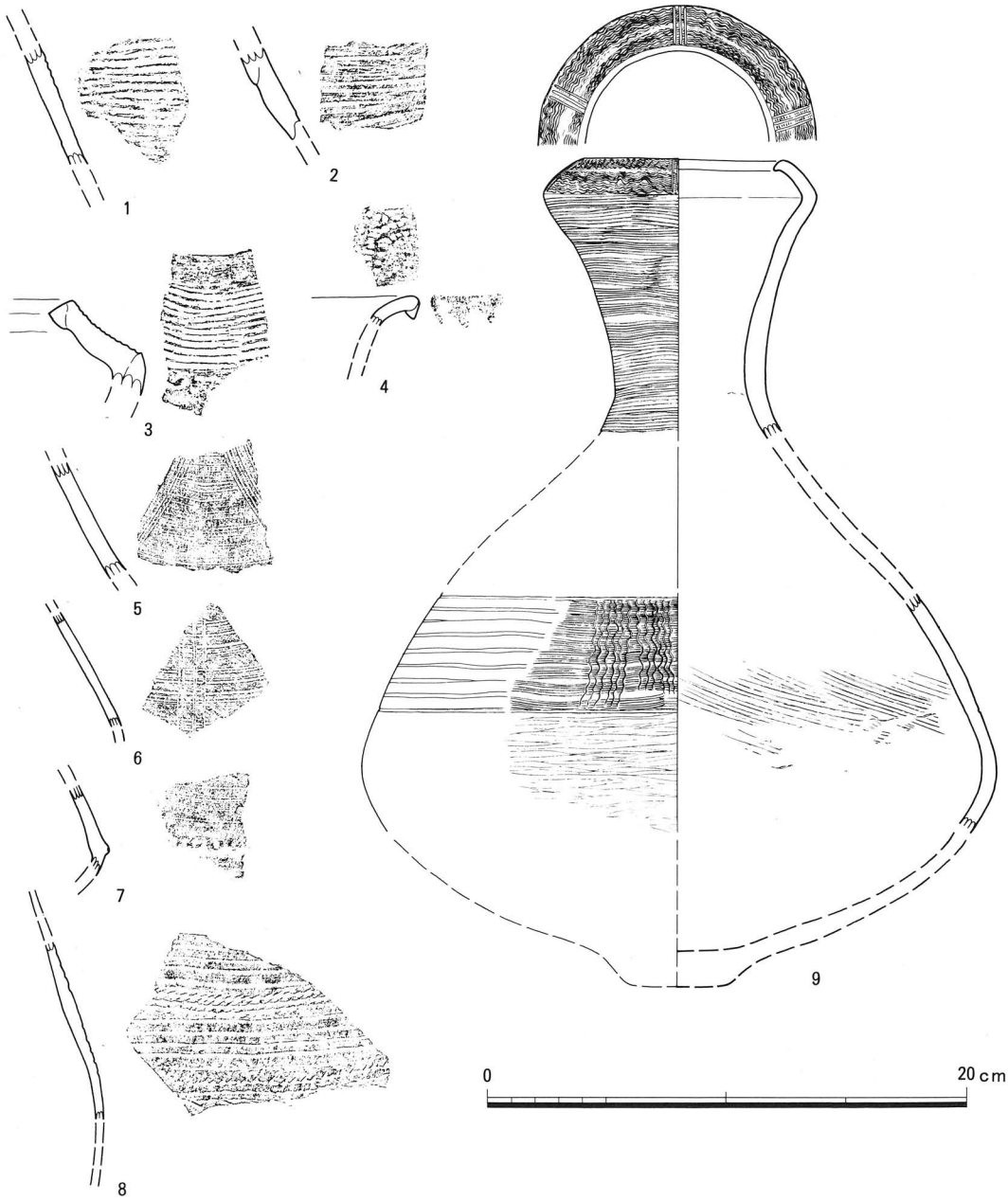
壷　４は器形判別できないが、口縁部の破片である。口縁部は下方へ粘土を巻き込み、ヘラ状工具で押圧し、波状口縁にしている。口縁部の内面は貝殻腹縁の外面を押しあて重弧をつくっている。

５は壷の胴部破片である。外面は黒色を呈す。砂粒を多く混和し、内面の器面は内傾口縁土器に似る。外面には櫛状工具による直線文が描かれ、その直線文の上に同様の工具で弧状の縦線が描かれている。

６・７も壷の胴部破片である。６は淡赤褐色を呈す土器で器壁は薄い。外面は櫛状工具で直線文を描き、その上に２本の櫛歯で縦線を引く。その後、直線文間にミガキを挿入する。内面はナデ調整をおこなう。７は灰黄色を呈す土器で、全体に磨耗している。胴部の張り出した部分は突帯状になり、突帯上には刻目をもつ。外面には櫛状工具による直線文がみられる。内面には指頭圧痕が残る。外傾接合の痕がみられる。

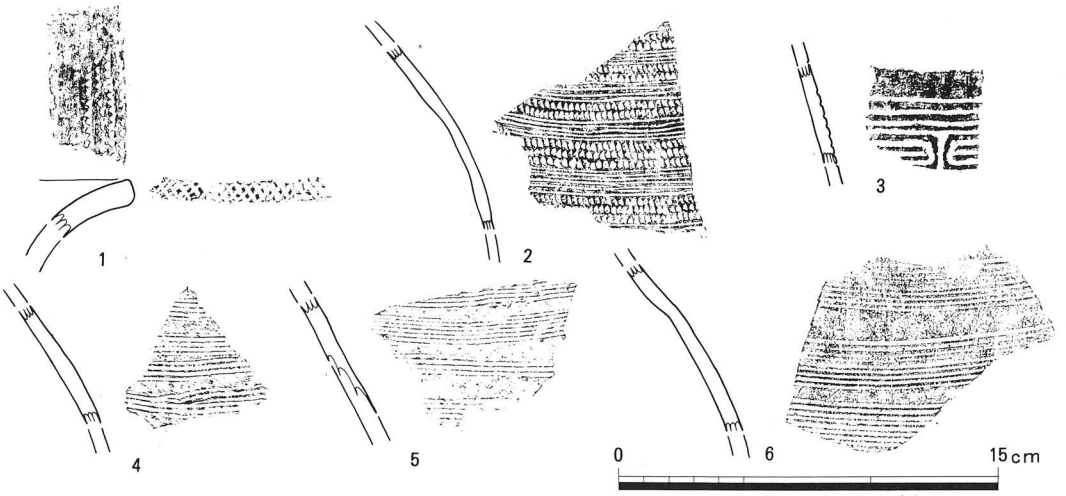
甕　８は中形の甕の上胴部破片である。外面には５本単位の幅広の櫛状工具で直線文を描いている。直線文の下側には櫛状工具で連続的に列点を描き、縄文風にみせる。外面には全体に煤が付着している。内面はナデ調整である。

壷　９はほぼ全容のわかる壷である。下脹れの胴部に細い頸部がつく。口縁部はやや外反してから、袋状口縁を呈す。胎土は細かい砂粒を混和するが、全体的には少ない。素地がややガサガ



第46図　搬入土器実測図及び拓影（S＝⅓）

サした感じのものである。外面は淡赤褐色から暗褐色を呈す。口縁部の上面には二帯の櫛描波状文が描かれ、文様間にミガキを挿入する。波状文の上には5カ所に3本一単位の縦線を引く。頸部は全面に櫛描直線文をめぐらす。胴部との界は丁寧なミガキによって一段凹む。胴部も同様な直線文がめぐり、直線文上には口縁部と同じ3本一単位の櫛状工具で縦方向の波状文を描く。直



第47図　弥生土器文様拓影（S＝⅓）

線文の上・下端はヘラ描直線で界を明瞭にしている。文様間及び胴部下半は横位のミガキをおこなう。内面はハケ後、ナデ調整を施す。

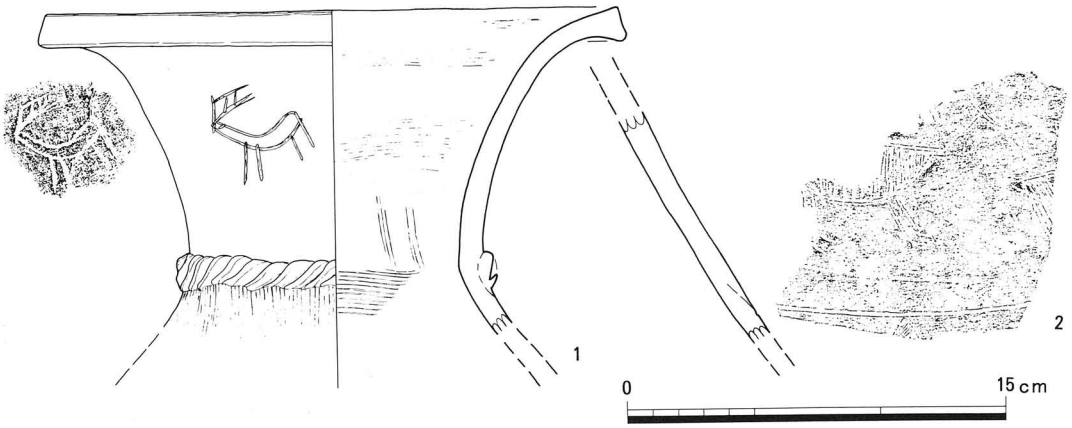
8の近江産の甕を除く、1～9の土器は愛知県を中心に分布する土器型式である。4と6についてはやや不確な面もあり、類例をまちたい。4は波状口縁や貝殻施文等条痕系の特徴をもっている。

弥生土器の文様・線刻画（第47・48図）

弥生土器の文様については多種多様で、ここでは全て取り上げることができない。ここでは、唐古・鍵遺跡の出土土器として注目される類例の少ないものをあつかうこととする。したがって、これらは搬入土器もしくはその系統の土器と思われる。第47図―1はＳＤ―101出土、2は落ち込みⅡの第2層出土、3は落ち込みⅢ―1溝状遺構出土である。4・5は落ち込みⅢ―1溝状遺構の上面より出土している。6はＳＫ―124出土であるが布留期の遺構で混在資料である。3は第Ⅰ様式、1・2・4・5は前期末から中期初頭の所産と思われる。

1は広口長頸壷の口縁部である。口縁部端面にはヘラによる斜格子が描かれ、口縁部内面には部分的な三角文の列点が4列にわたって刺突されている。色調は乳褐色を呈す。2は壷の胴部破片である。ヘラによる細描の4～7条の直線文が描かれ、櫛描文に似せている。直線文の間には三角文の列点が2～3列にわたって空間を充塡している。内面はナデ調整で器壁は薄い。3は壷と思われるが、内面にはミガキ調整と煤の付着がみられ、器形は断定できない。外面には二帯の文様帯があり、下の文様帯はヘラ描の方画文を描いているが、その構成は少片のため不明である。施文後、ミガキを施している。

4・5は壷の胴部片である、いずれも貝殻背縁の外面を押しあてて直線文を描いたものである。4は強く押圧しながら引いており、明瞭に直線文がみえる。4・5ともに直線文の両端（上端と



第48図　線刻画土器実測図及び拓影（S＝⅓）

下端）は不明瞭になっており、貝施文の特徴がみい出される。施文の前にはハケ調整がおこなわれている。6は壷の胴部片である。これも直線文が描かれており、貝殻に類似した特徴をもっているが、直線文の両端が明瞭である点などから貝殻施文に似せた櫛描文と思われる。

1・2は播磨・西摂津など瀬戸内系の土器、3～5は愛知県など東方系の土器、6は胎土から河内地域とそれぞれ推定される。

線刻画土器は2点確認している。第48図―1はＳＫ―113の下層出土、2は遺物包含層より出土している。

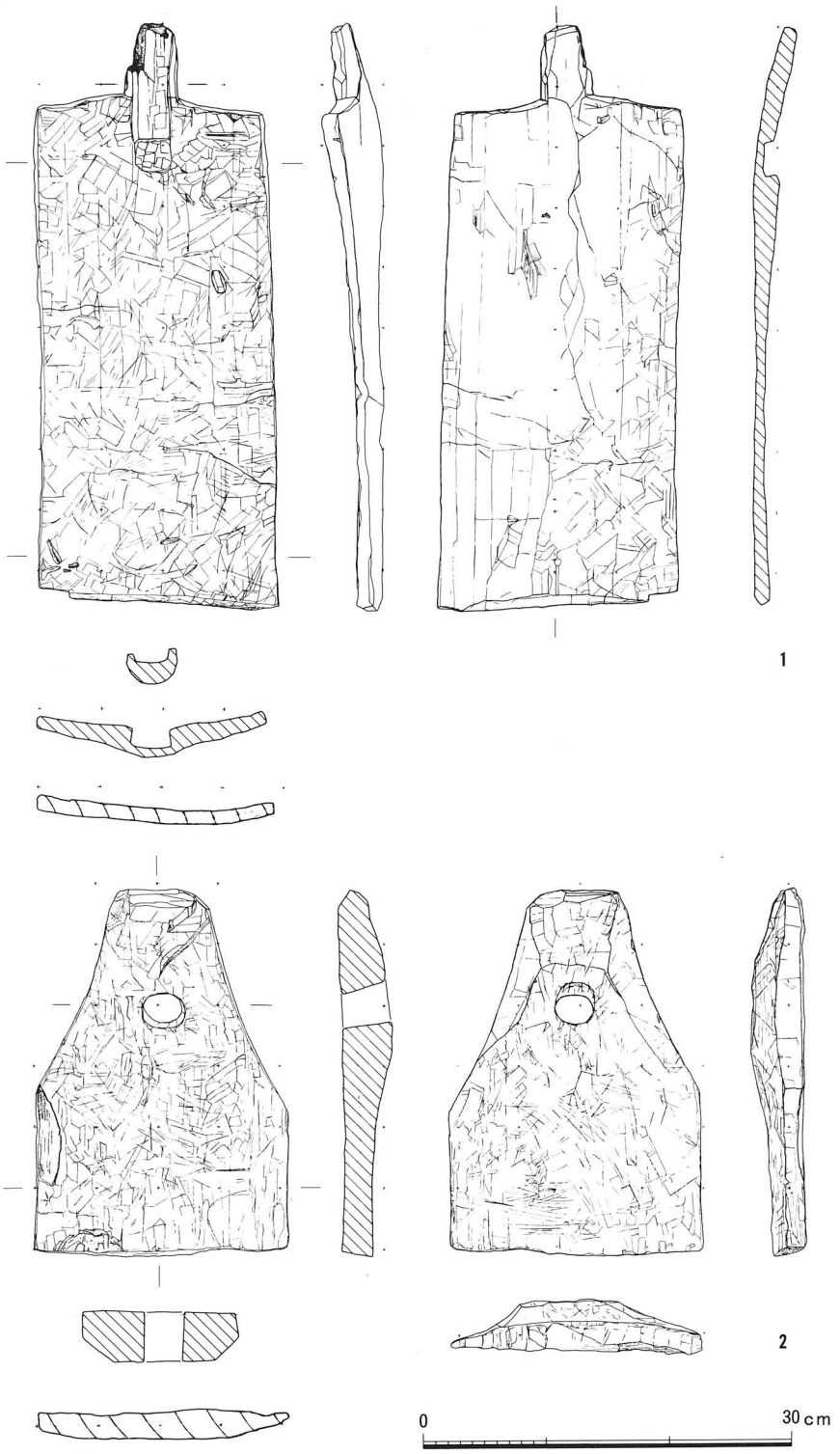
1は広口壷である。口縁部は下方へ肥厚する。部分的にハネ上げ口縁となる。頸部と胴部の界には粘土帯を貼り付け、ヘラを押圧する。口縁部はナデ、胴部はハケ調整を施す。線刻は頸部外面に焼成後に描かれている。内容は左向きの雄鹿一頭が下向き加減に描かれている。胎土は中河内産を示している。

2は器台の破片である。内外面ともナデ調整である。外面には右向きの二頭の鹿が線刻されている。半月状の胴部は斜線で充塡されている。頭、首、四脚は一線で表現している。このような表現方法や鹿の向きは本遺跡では出土していない。二頭の鹿の下には1条の区画線がめぐり、その下には鋸歯文が描かれている。

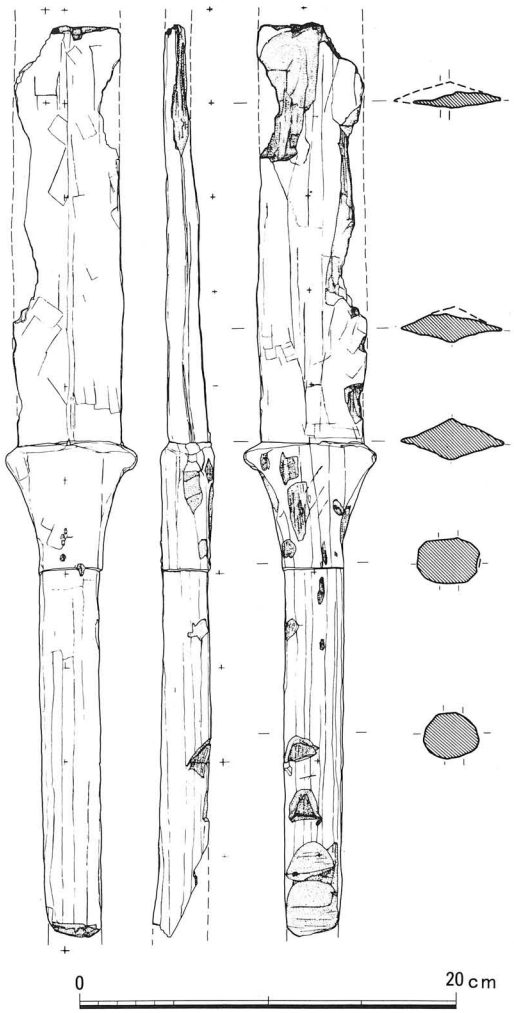
⑵　木製品

木製品は弥生時代前期から古墳時代前期までの各時期のものが出土している。特に、弥生時代前期から中期にかけてのものが多く、土坑や溝などからまとまって出土している。ＳＫ―151は農耕具の未成品、ＳＫ―113は農耕具の未成品や板材などを貯木していた遺構である。木製品の大半は破損品で廃棄されたものである。

農耕具（図版43～46、第49図）



第49図　ＳＫ－113出土木製品（Ｓ＝⅙）



第50図　ＳＫ－153出土木製品（Ｓ＝¼）

図版43－１はＳＫ－123より出土した広鍬である。ほぼ方形の身部に小さな舟型隆起が作り出されている。図版44－１、同45－１はＳＫ－151より出土した広鍬の未成品である。前者は舟型隆起を作り出しているが、身の上下端には切断痕が残っており、数個の広鍬が一度につくられ、切り離されたことがわかる。後者はさらに加工が進んだもので、身の外形や舟型隆起は整い、柄孔も一部穿っている。刃部は未だ作り出されていない。

第49図－１はＳＫ－113から出土した着柄鋤の未成品である。着柄部分はやや湾曲し、柄が密着しやすいように溝を作り出しているが、未だ、柄孔は穿たれていない。身の部分には微細な加工痕が多数残っている。刃部には切り離した段階の切断痕が残っており、刃は未だない。第49図－２はＳＫ－113から出土した広鍬の未成品である。形態的には整っており、柄孔も穿たれているが、身はかなり厚く刃部も作られていない。柄孔部分は厚くなっているが、舟型隆起はなくなっている。身の両面は着柄鋤同様、多数の加工痕が残っている。１・２ともに保存状況の良いものである。

食膳具・脱穀具（図版47）

図版47－１・２は落ち込みⅢ－１溝状遺構から出土した高杯である。１は大形の脚部である。２は水平縁の杯部である。図版47－４はＳＫ－118から出土した杓子である。ほぼ全形のわかるもので、杏仁形の身に柄がつく。身部はあまり刳り込まれておらず、未成品かも知れない。図版47－３はＳＤ－101より出土した臼である。小形の臼で、上方が広がる円筒形で浅く刳り込まれている。

狩猟具・武器形木製品（図版44・48・49、第50図）

図版48－１はＳＫ－153、図版49－１はＳＫ－123、同49－２は落ち込みⅢ－１溝状遺構からそれぞれ出土した小形の丸木弓である。いずれも簡素な弓で、その一つには弭部の加工がみられる。第50図は武器形の木製品でＳＫ－153より出土している。身部と柄部から成り、身部は断面

菱形で刃部状になっている。柄部は丸くつくっているが、身部と柄との境は一段高くつくられ、形態的に矛に似る。矛形の木製品と思われるが、穫（かい）の可能性も残している。図版44―３は形態的には剣状に似るが刃部はなく、何らかの未成品かも知れない。ＳＫ―151から出土している。

工具・建築部材（図版43・46・49）

工具としてはＳＫ―151から出土した斧柄の未成品（図版49―３）がある。これは斧台部の装着部の加工がまだみられないものである。柄の部分は欠損している。図版49―５は刺突具状の木製品であるが、尖った先端には桜の皮が巻かれている。反対側の端は一段高く作られ、把部をなすようである。先端を利用して使う道具と思われる。ＳＤ―1102から出土している。

建築部材としてはＳＫ―113から出土した一端に抉りをいれたもの（図版46―３）や落ち込みⅢ―１溝状遺構から出土した方孔を穿った板（図版49―６）がある。いずれも断片である。また、薄い板に孔を穿ったものもある（図版43―２、同49―８・９）。図版43―２はＳＫ―123から出土したもので、その一部には桜の皮で補修したところがみられる。

用途不明品（図版44・45・49・50）

木製品の中には用途の決めがたいものが多くある。図版50―１・２はＳＫ―102からいっしょに出土した木製品である。両者とも四又に分岐した枝の部分を利用して作られた製品である。枝の先端は鋭く切断されており、裁断面は設置しやすい角度となっている。枝や幹の一部には樹皮が残っている。この二つの製品の違いは前者の幹部分に抉りを入れていることである。この他、棒状の先端に抉りを入れたもの（図版45―２・同49―４）や方形板の一端中央を突出させたもの（図版44―２）がある。いずれも用途については断定できない。

⑶　石器

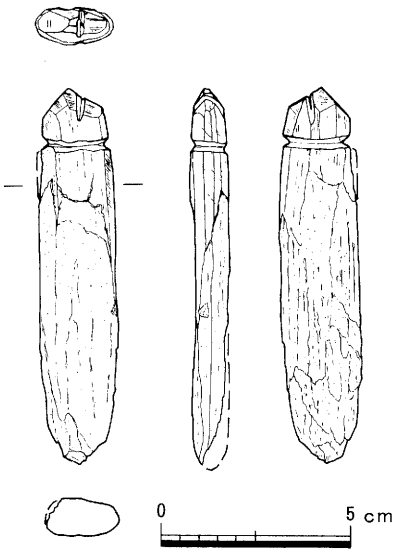
石器は弥生時代前期から中期にかけて最も多く出土している。打製石器と磨製石器・石製品の三種があり、量的には打製石器が多く大半がサヌカイト製である。遺構からみれば、大形土坑であるＳＫ―123やＳＫ―113から良好な状態で検出している。

打製石器（図版51・52）

図版51―１～11はＳＫ―123から出土した打製石器である。１・３～５・８・９が中層、２・６・７が下層、10・11が上層より出土している。１～４は小形の石鏃である。１・２は尖基式、３は有茎式、４は凹基式である。１は刃部を鋸歯状に整形した精巧品である。５は小形の石槍の先端部、６は石錐である。７～11は不定形な石器である。

図版51―12～18はＳＤ―101から出土した打製石器である。12・13は中層、14・15は上層、16・17は最下層、18は下層出土である。12は平基式の石鏃、13は小形の石槍である。14～18は不定形な石器で刃部調整をおこなう。

図版52―１・２は小形の石槍、３～６は打製石剣、７・８は磨製石剣である。３は刃部を鋸歯状に調整している。５・６はサヌカイト製であるが、形態が整ってから磨いている。５は断面が



第51図　石棒実測図（S＝½）

扁平、6は菱形になるタイプである。7・8は断面が扁平な菱形になる磨製石剣で、丁寧に磨かれている。1は落ち込みⅢ－1溝状遺構上面、2は落ち込みⅠ、3は包含層、4はＳＤ－101上面、5はＳＫ－151、6・8は中世素掘溝、7はＳＫ－124からそれぞれ出土している。6～8は混在資料である。

図版52－9・10はＳＫ－123の中層から集中して出土したサヌカイトの剥片である。微細な剥片が多く、石器製作後、一括廃棄したものであろう。

磨製石器（図版53・54）

図版53－1～4は石庖丁の未成品である。いずれも石庖丁にちかい形態まで仕上げられており、磨かれる直前の資料である。1はＳＤ－103の最上層、2はＳＤ－106、3は落ち込みⅢ－2溝状遺構、4はＳＫ－123の下層からそれぞれ出土した。

図版53－5～10は石庖丁の製品である。5は長方形にちかい形態で流紋岩製である。6～10は半月形の直刃である。6は4孔と半穿孔が1つある。5はＳＤ－101の最下層、6は落ち込みⅢ－1溝状遺構上面、7・9はＳＤ－106、8はＳＤ－103の上層、10はＳＫ－118からそれぞれ出土している。

図版54－1～3は大形石庖丁である。1・2ともに半月形にちかい石庖丁の縁辺部である。3は三角形を呈する形態で、扁平な石斧とも考えられる。1はＳＤ－106、2は落ち込みⅡ、3はＳＤ－103中層からそれぞれ出土している。

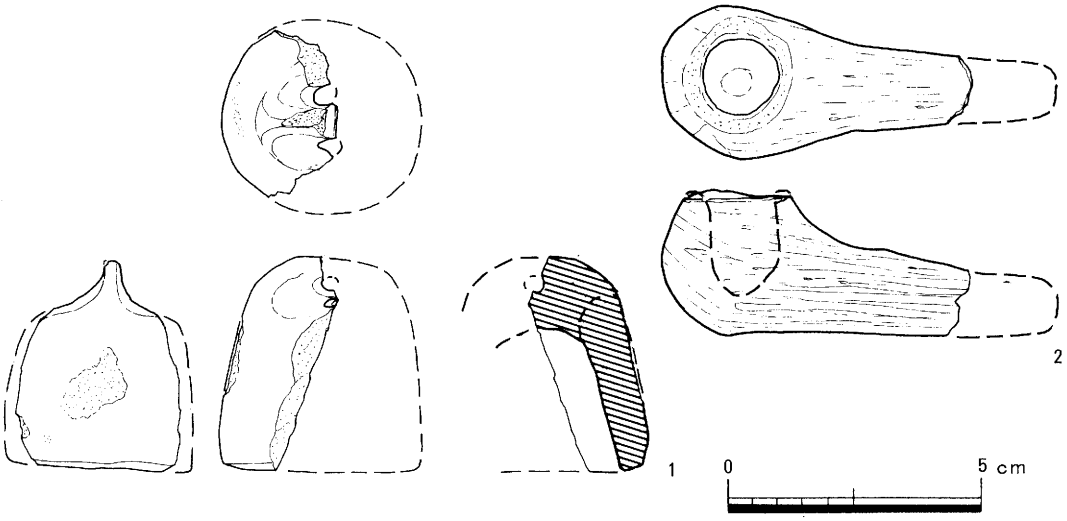
図版54－9～13は太型蛤刃石斧である、9～12は刃部を一部残すが、いずれも断片である。9は小形品である。13は完存品で、刃部は円弧状になる曲刃である。9はＳＸ－102、10はＳＫ－153上面、11はＳＫ－123、12は落ち込みⅢ－2溝状遺構上面、13はＳＤ－105からそれぞれ出土している。扁平片刃石斧や柱状片刃石斧は少ない。

石庖丁や石斧の他の磨製石器としては、図版54－4～6に示す紡錘車がある。いずれも石庖丁等からの転用品であろう。4・5は落ち込みⅢ－2溝状遺構上面、6はＳＫ－154出土である。

石製品（図版54・55、第51図）

図版55－1・2はハンマーで、サヌカイト製である。いずれも手の中におさまる大きさである。図版55－3は敲石、同55－4～6は砥石、同54－7・8は棒状石製品で用途不明である。

図版55－7（第51図）は落ち込みⅠの上面より出土した小形の扁平な石棒である。先端は尖り、片側に一線を刻む。また、先端部からやや下には一周するように一線を入れる。基部付近は一部剥離欠損しているが、ほぼ原形で良かろう。基部も尖りぎみになっている。



第52図　土製品実測図（S＝⅔）

(4)　土製品（第52図）

銅鐸形土製品　第52図―１は銅鐸形の土製品である。器高4.2cmの小形品で、上方がややすぼまる円筒状の鐸身の上部に小さくつまみ出した鈕がつく。土製品は約半分が残存している。鈕の部分には小さな孔が穿たれ、鈕孔としている。鐸身の上部である舞にあたる部分には型持たせ孔を模した小さな孔が二孔穿たれているが、鐸身部分には型持たせ孔に相当する孔は見あたらない。土製品は全く文様をもたず、ナデ調整で仕上げられている。色調は暗灰褐色を呈し、やや低温焼成と思われる。井戸であるＳＫ―113の最下層より断片で出土した。

杓子形土製品　第52図―２は杓子形の土製品である。手づくねで成形したもので、棒状の柄にやや球形を呈した身の部分をもつ。身の上面はヘラで粘土を掻き取り、杓子部分をつくっている。柄の先端部分は欠損している。土製品は全体にミガキ調整がおこなわれている。堅緻な焼成で、淡褐色を呈している。ＳＫ―116から出土した。

(5)　骨角製品（第53図・図版56）

骨角製品は十数点確認している。骨針などの微細なものと鹿角を加工したやや大形のものの二種がある。微細な骨角製品はＳＫ―123やＳＫ―113の堆積土の水洗によって確認したものである。

弓筈　図版56―５・６は鹿角製と思われる弓筈の破片である。５（第53図―３）は先端部分、６は中ほどの部分である。５はやや湾曲した円錐状を呈するもので、折損部に一孔穿たれている。孔の上には４条の刻線がみられる。６は５よりやや径が大きくなり、上下に２つの孔が穿たれ、

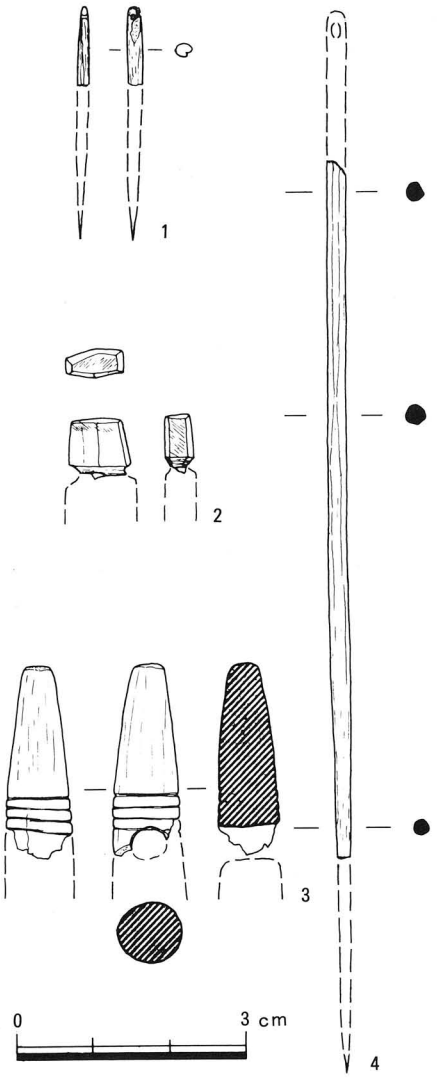
孔の間には３条の刻線が残っている。孔には孔栓はなかった。６は中空となっている。５・６は同一個体とも考えられるが判断できない。これらはＳＫ―123の中層より出土している。

骨針　図版56―８～14は骨製の針である。骨の部位についてはわからない。針は大小の二種が存在する。８（第53図―４）や13、14は大形品の断片である。刺突具にちかいが径が細く針とする方が良いと思われる。一方、小形品は９～12でいずれも断片であるが、径１㎜前後と極細となる。９（第53図―１）は基部部分で糸孔が穿たれている。12は針の先端にあたる部分である。８はＳＫ―123の下層、９～12はＳＫ―123の中層、13はＳＫ―113の上層、14はＳＫ―113の最下層からそれぞれ出土している。

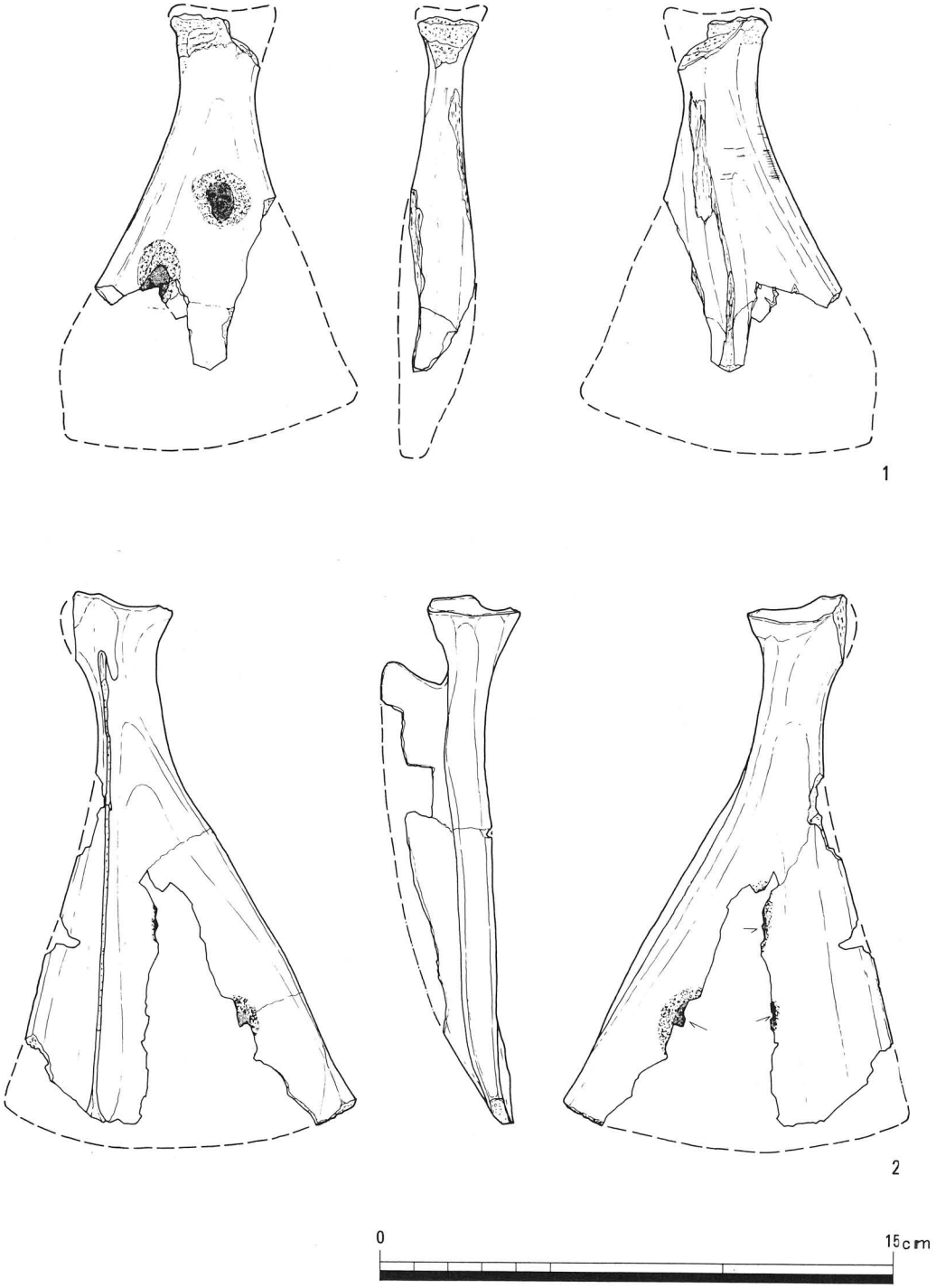
用途不明骨角製品　図版56―７（第53図―２）は一端にくびれ部をもつ骨製品である。扁平で全面は丁寧に磨かれている。基部部分と思われ、くびれ部分で折損している。ＳＫ―123の下層から出土している。用途は不明である。

図版56―１・２は鹿角製品である。14は落角を使用し、角座から幹にかけての製品である。幹の部分は三分の一を残し縦に割り刀子状のもので加工している。角座の部分には明瞭な刃痕が残っている。角幹の割られた面には海綿体部分が露出している。角幹の先端はやや尖りぎみに加工している。角幹はわずかに湾曲しているが、その外湾部分には微細な圧痕状の傷があり、使用痕と考えられる。角座の部分を握り、ハンマー的な使い方が推察される。本品は落ち込みＩから出土した。15は鹿角の先端にちかい部分と思われ、基部部分は折れている。枝角は奇形で逆側に湾曲している。幹部は先端を切り込み折って仕上げている。幹部分にはわずかに刀子痕がみられる。使用痕については不明瞭で、本品が完成品か何かの部材であるのかは判断できない。ＳＫ―116の最下層から出土した。

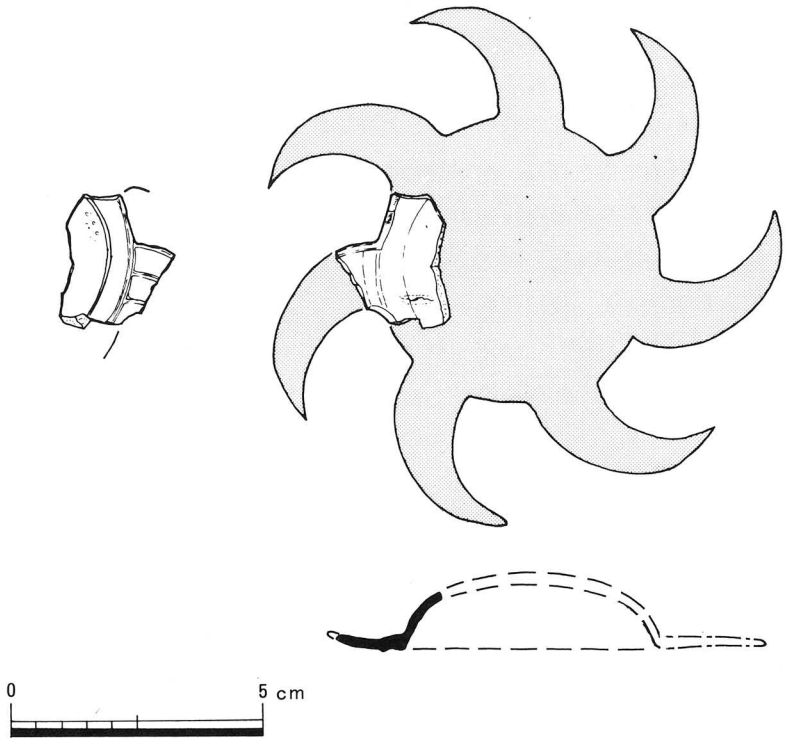
図版56―３・４は骨を縦割りにした加工品である。３は半裁され、両端も切り落されている。片面は海綿体がみえている。使用痕はわからない。ＳＫ―153の上面から出土した。４も同様の加工で、先端はヘラ状になり磨耗している。ヘラ状工具であろう。ＳＫ―113の上層出土である。



第53図　ＳＫ―123出土骨製品実測図（Ｓ＝1/1）



第54図　ト骨実測図（S＝½）



第55図　巴形銅器実測図（S＝⅔）

(6)　祭祀遺物（第54図）

祭祀遺物としては、銅鐸形土製品や石棒などがあるが、これについては既に記述したところである。また、巴形銅器については「金属器」の項で後述する。ここでは二点のト骨について説明したい。

ト骨　第54図―１はイノシシの右肩甲骨を使用したト骨である。関節上結節と前縁・後縁から背縁にかけて欠損している。ト骨としての加工はない。焼灼は肋骨面の肩甲頸やや下に１カ所と同じく肋骨面の棘下窩に１カ所残っている。焼灼は大きく１～1.5cmに及んでいる。中心部は黒色、周辺部が淡褐色を呈している。焼灼はいずれも外側面に達していないが、前者の焼灼は骨の厚い部分で、後者は比較的薄い部分となり、両者がいっしょに存在するト骨は本遺跡ではまだない。ＳＤ―103の中層から出土した。

第54図―２はシカの右肩甲骨を使用したト骨である。背縁部分と棘下窩にかけて一部欠損している。また、肩甲棘結節も一部欠損しているが、整地はない。焼灼は肋骨面と外側面にみえるが、肋骨面の方が変色が大きいことからこちらから焼灼をおこなったと思われる。棘下窩に３カ所の焼灼があり、２cm前後に変色が広がっている。焼灼は最も骨の薄い部分である。ＳＫ―113の上層から出土した。

(7) 金属器・玉類（第55図・図版56）

金属器としては巴形銅器１点、玉類としては管玉１点・臼玉２点を検出した。

巴形銅器　第55図は巴形銅器である。中世の素掘溝から出土したため、２次的なものである。巴形銅器は少片で座から脚の一部が残っているのみである。脚の折れ面は曲がっており、強い力が加わり、折損したものと思われる。推定復元すれば、半円球座で、脚は左捩りの７脚となる。鈕については不明である。全長の径は約10.2cmの大形品に復元できる。内面の座の内外縁と脚の外縁及び中央部分には突線が鋳出されている。全体に鋳上がりは良いが、外面の座の一部には鋳型面のヒビ割れが看取できる。淡褐色を呈している。

玉類　図版56―15・16は直径0.5cmの臼玉である。ＳＫ―103の上層より出土している。図版56―17は一端を欠損した直径0.85cmの管玉である。石材は未鑑定である。唐古池内の東側より採集した。

(8) 自然遺物

獣骨（図版57～61）

獣骨は弥生時代前期から中期を中心とする大半の遺構から出土している。特に注目されるものとしてはＳＫ―123から出土した大形動物の骨がある。小動物骨は粘土サンプルの水洗によってかなり採集している。図版58～60―上段はＳＫ―123出土の大形動物骨である。大半はイノシシで、わずかにシカを含む。シカは図版58―下段左下で上顎部分である。これを除く他はイノシシで、頭骨（図版58）、下顎骨（図版59上段）、頸椎骨・腰椎骨・胸骨・寛骨（図版59下段）、大腿骨・上腕骨・尺骨・橈骨・肩甲骨（図版60上段）などの各部位がある。ＳＫ―123から出土した小動物骨としては齧歯目（ムササビ？やネズミ）や魚類、カエル類（図版60下段）がある。また、図版61上段も同様の小動物骨で、これはＳＫ―113から出土したものである。ネズミ類で注目される出土状況をしたものに落ち込みⅢ―２溝状遺構から出土したものがある。これは第28図―２に示した広口壷内から出土した２体のネズミ（図版61下段）である。一部の骨はないがほぼ同じ大きさのネズミである。

種子類（図版62・63）

図版62上段はＳＫ―123下層、下段はＳＫ―113の中層・最下層より出土した種子類である。未鑑定であるが、ヒョウタンやクルミ、モモなどがある。また、ＳＤ―106から出土したものの中にはクルミ・モモの他、カシの実も含まれている（図版63上段）。炭化米としてはＳＫ―123中層（図版63下段右列）やＳＫ―113の上層（図版63下段左列）から出土したものがある。このように種子・実は大半の遺構から出土しており、今後、正式に報告することにする。

4．唐古・鍵遺跡出土の繊維製品について

京都工芸繊維大学名誉教授　布　目　順　郎

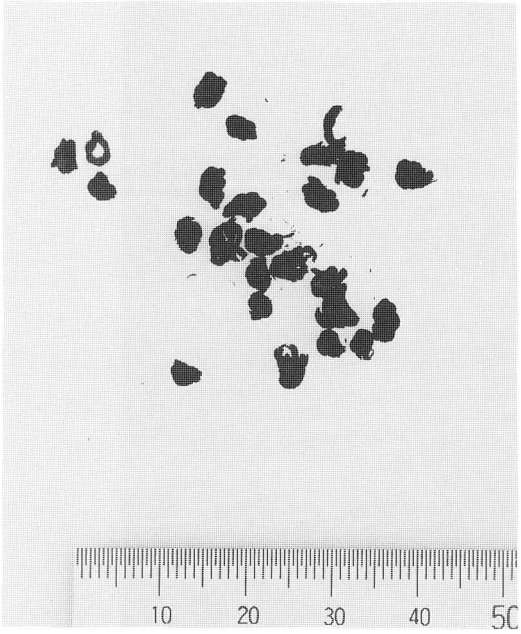
唐古・鍵遺跡の昭和60年度調査において、第22次調査の際に、弥生中期後半の井戸（ＳＫ－105）の中の粘土サンプル中から、細縄の結び目ともみられる小さな球状の糸塊が20数個あらわれ、さらに、第23次調査の際には土坑の中位のところの炭化物層（弥生中期初頭）から、２本の縄と20個の織物片があらわれた。しかし、これらの繊維製品については、これまでに調査がなされていない[1)]。

筆者は田原本町教育委員会の委嘱を受け、これらの品について調査したので、その結果を以下に報告する。

⑴　結び目様糸塊（弥生中期後半）

出土の小球状繊維製品（第56図－Ａ、Ｂ）はいずれも径2.5～３㎜ぐらいの大きさのもので、その１つを実体顕微鏡でみると、径0.7～1.0㎜の撚糸（右撚り）を２本合わせて左撚りにした諸撚（もろよ）り糸（その径は1.5～1.8㎜）から成る。それが球状に丸められたような形になっていて、あたかも諸撚り糸自体で結び玉を作ったその玉の部分だけを切り離したかのようにみえる。出土した20数個の糸塊は、すべて同様のものであった。

そのうちの１つにつき材質調査を行なったが、それには糸塊を構成する繊維の断面形と側面形とによった。断面及び側面の観察は、糸塊を形成している撚糸の１本をパラフィン切片法により横断もしくは縦断して作成した切片について、光学顕微鏡写真によって行なった。



第56図－Ａ　結び目様糸塊：出土の結び目様糸塊の全部

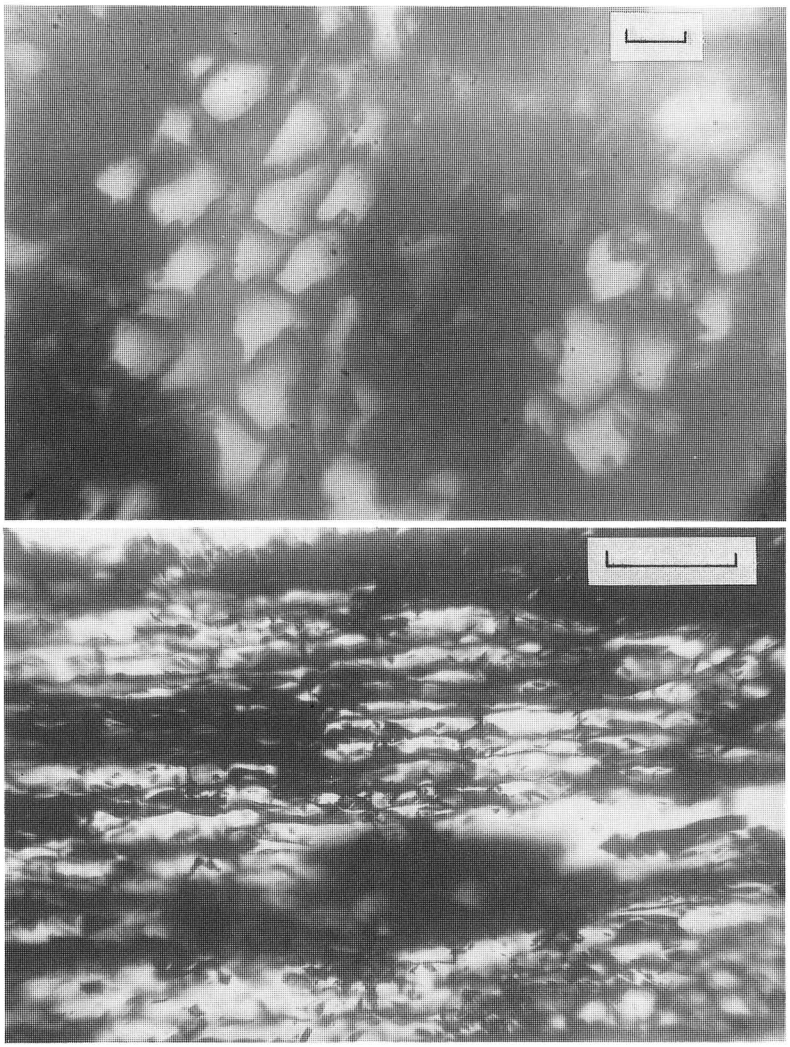
結果は、繊維の断面形（第57図－Ａ）はイグサ（藺草）に似ているが、断面の大きさ（＝繊維の太さ）は現代のイグサのそれよりも小さい。繊維の側面（第57図－Ｂ）でみると、多くの節（ふし）が存する点において現代のイグサに等しいが、節と節の間隔が現代のイグサのそれよりも長い。

以上から、出土の糸塊の材質はイグサに似た種類の草本とみられるが、種名を断定するまでには至らなかった。また、これらの糸塊がどのような目的から作られたものであるかについては、いまのところわからない。

第56図—B　結び目様糸塊：その中の３個（拡大）

A

B



第57図　結び目様糸塊の繊維　A—繊維断面 scale：10 μ
B—繊維側面 scale：50 μ

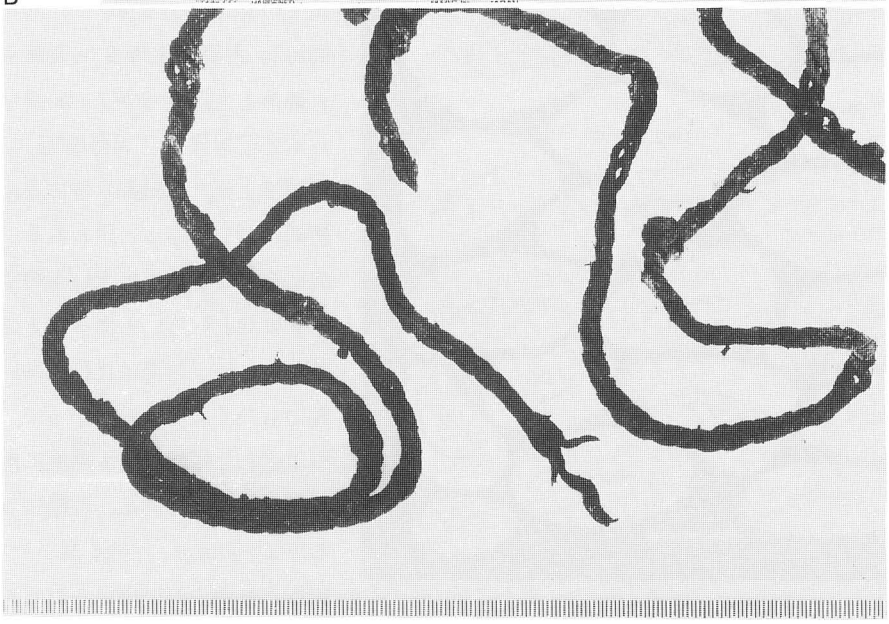
⑵　縄（弥生中期初頭）

出土の縄は２本であり、その径（＝太さ）は両者とも2.5～３㎜、長さは、一方が約32.4㎝、他方が約30.7㎝である。短かい方の一端に、縄自体の結び目が存する。両者とも３本撚りで、上撚りは右、下撚りは左である。両者の太さ、構造、撚りが同じで、しかも同じ場所からの出土品であるところから、もとは一連のものであったと考えられる（第58図―Ａ、Ｂ）。

材質調査は、繊維の断面形と twist test とによった。断面作成にはパラフィン切片法を適用

A

B

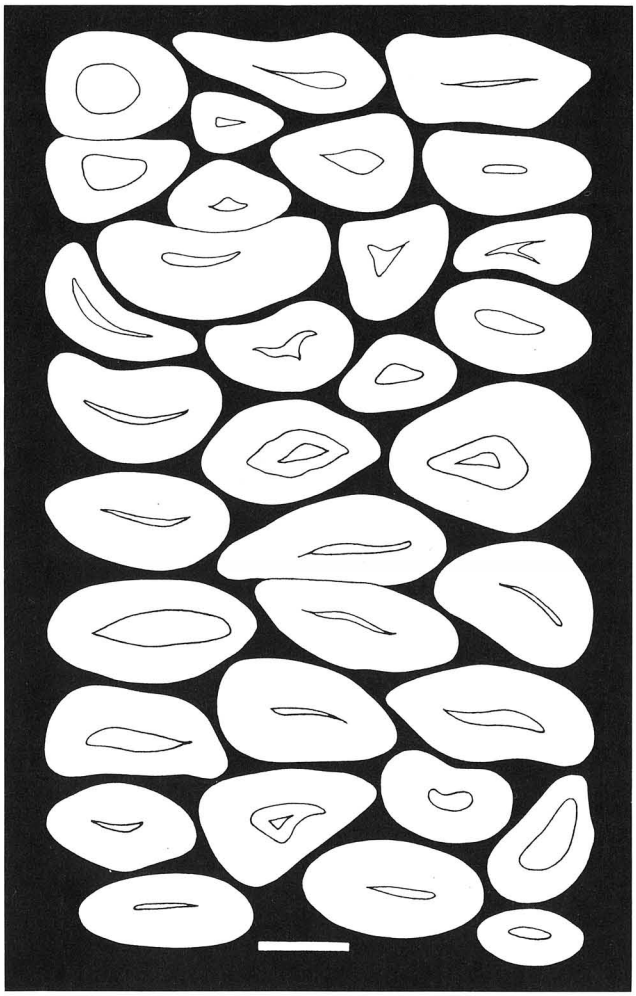


第58図―Ａ　縄Ａ―２本の縄
Ｂ　Ａの一部（拡大）

した。繊維断面形は第58図―Cに示す通りで、これは大麻のものに似ている。光学顕微鏡下にみる断面像は炭化が著しく、皮層部は真っ黒になってしまっていて、本来は存在するはずの亀裂はみられない。中央部の髄腔が白く抜けているものと、髄腔のみられないものとが入り混じっている。大麻の髄腔は本来、その中に充塡物が存在する場合とそうでない場合とがあるので、本資料において髄腔のみられないものは、腔内に充塡物が存在するためと思われる。第58図―Cに示した断面形は髄腔のみられるもののみを Abbe 式転写器で転写したものである。

Twist test の結果は約25°の反時計方向の旋回（＝左旋）を示した。この結果は、材質が大麻であることを裏付けるものである。

出土の縄と、すべての点でよく似た縄（材質は大麻と判明）は、1980―81年に発掘された東大阪市鬼虎川遺跡からも出ている。[2、3] 唐古・鍵遺跡は鬼虎川遺跡の東南約20kmの近距離にあるところから、両遺跡から出た縄は、あるいは同一人によって作られたものかもしれない。



第58図―C　縄の繊維断面転写図（個々の断面転写図を任意に配置したもの）scale：10μ

筆者は、鬼虎川遺跡出土の縄についての調査報告[3]の中で「出土の縄から、古典にみえる栲縄（たくなわ）のことが連想される」とのべておいたが、唐古・鍵遺跡出土の縄についても全く同様のことがいえる。つまり、出土の縄は、万葉集217、同704、同902、古事記上の5（天照らす大御神と大国主の神）〔国譲り〕、日本書紀神代下（天孫降臨）、出雲国風土記（楯縫部）等にみえる栲縄の類であろうと思われる。古典にみえる栲縄には太いものや細いものなどいろいろあったと思われるが、出土の縄は比較的細い部類のものである。したがって、その用途としては、延（は）え縄（なわ）漁に用いる枝縄、普通の釣糸、衣類につける紐などのほか、小物を縛ったり、束ねたりするのに用いられたものと想像される。

縄の一端にみられる結び玉は、撚りの解れを止めるためのものであることはいうまでもない。

(3) 織物（弥生中期初頭）

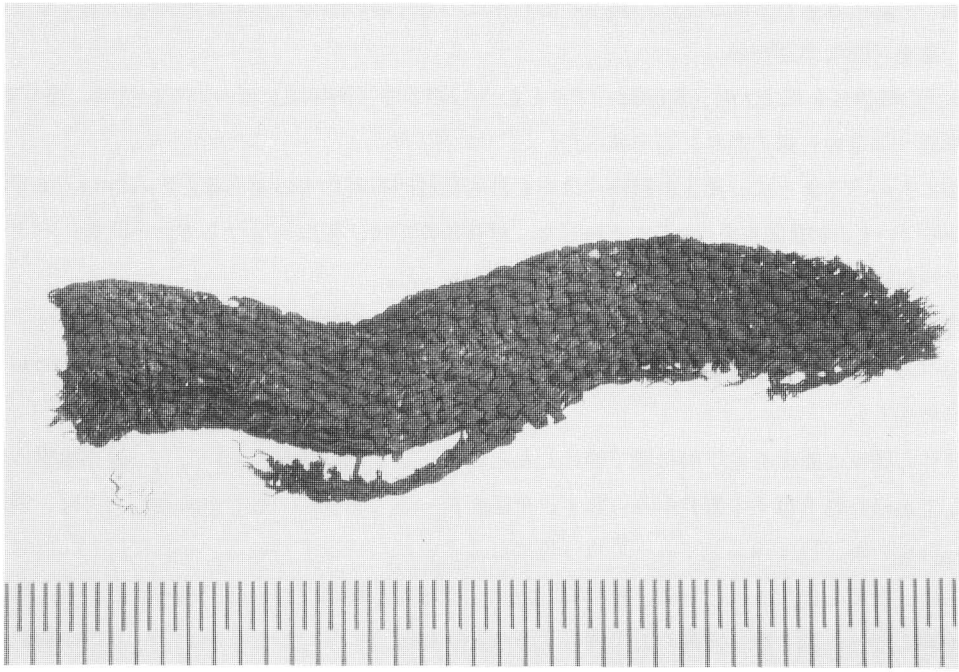
出土の織物は全部で20片（第59図）で、そのうちの５片（第60図）について、材質、織り密度、糸構成（併糸の有無と撚り）等を調べた。

後にものべるように、出土の織物片はいずれも比較的細密なものであるところから、まず絹か麻かについての材質調査を行なうことにした。材質の判定は、従来行なってきたと同様、パラフィン切片法による繊維断面調査と twist test とによった。

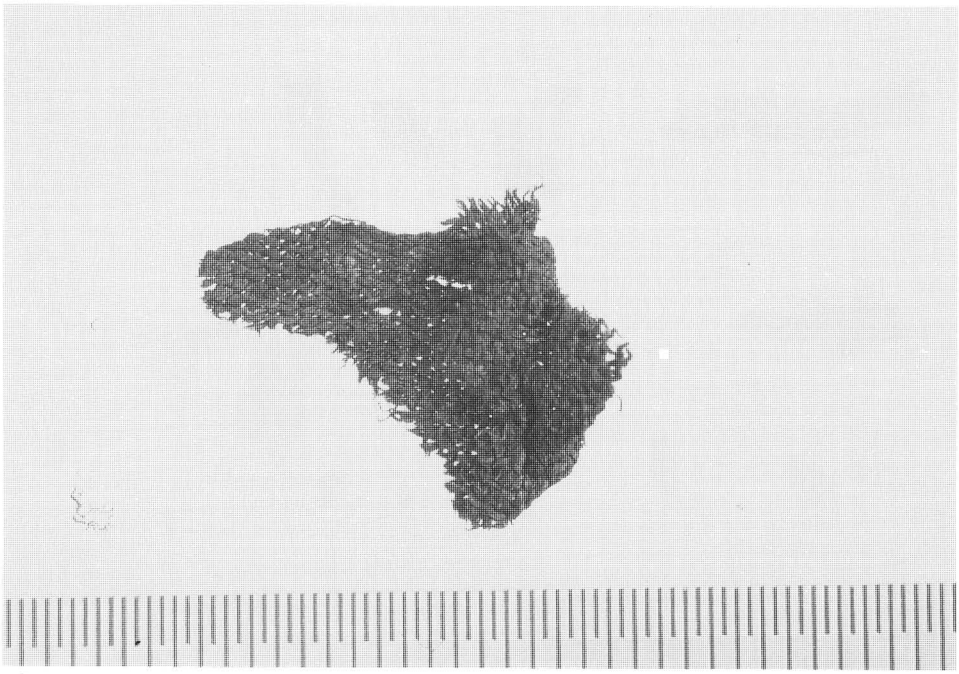
繊維断面調査はＢ片についてのみ実施した（残りの織物片について行なわなかったのは、後にものべるように、20片の織物はすべて、もとは一連のものであった可能性が濃いことがわかったからである）。

Ｂ片の繊維の断面を光学顕微鏡で観察したところ、いずれの断面においても、植物繊維の特徴としてあらわれるはずの髄腔がみられず、全面が真っ黒であった。もし絹繊維であれば、髄腔はみられないが、色は焦茶色であって真っ黒になることはないはずである。それに反し、麻などの場合は、髄腔を伴なうとともに、色は真っ黒に炭化してしまうのが普通である。しかも、断面の外輪郭の形は、絹と麻（大麻）との間に大きな違いはみられない。したがって、Ｂ片の材質は、

第59図　出土の織物片の全部

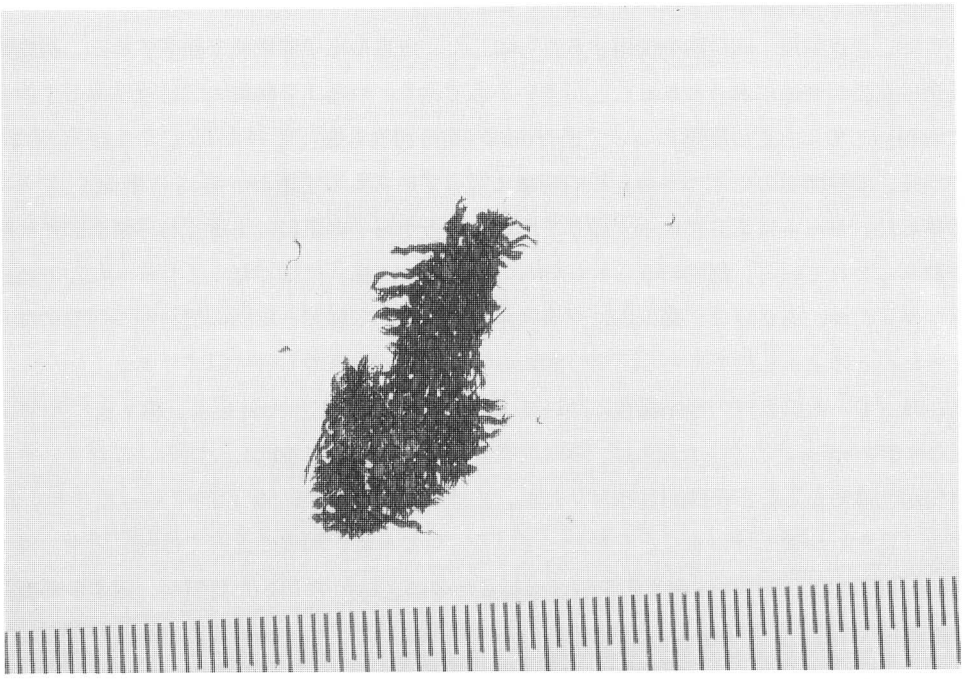


A



B

第60図　一部の織物片（拡大）
A－A片、B－B片、C－C片、D（右）－D片、E（左）－E片



C

D（右）、E（左）

その繊維断面を光学顕微鏡で観察する限り、絹・麻の区別がつかないといえる。

そこで、走査型電子顕微鏡を使用することにした。走査型電子顕微鏡で観察すると、植物繊維の場合は髄腔が明瞭にあらわれることが多いからである。京都工芸繊維大学繊維学部の小西孝教授にお願いして、B片の繊維について走査電顕写真を何枚も撮っていただくことができた。その中から、繊維断面のいくつかが比較的明瞭に写っているものを選び、それら断面をさらに転写線描した。それらは第61図に示す通りである。走査型電子顕微鏡によるこれら断面図には髄腔が多数あらわれている。髄腔のみられないものは、髄腔が線状に細くなってしまったために良く写らなかったか、あるいは、髄腔内に充塡物が詰まっていて髄腔と皮層の境目が不明瞭になってしまったことによるものであろう。第61図にみる断面形は大麻のものに似ている。

A、B、D、Eの各片の経糸繊維について twist test を行なった結果は、第4表に示すように、D片が旋回を示さなかった以外は、みな反時計回り（左旋）に旋回したから、これで、それらの材質が大麻であることが確認された。ただ、旋回角度がせいぜい50°以内であったのは、繊維の劣化（脆化）が進んでいることを物語っている。ちなみに、現代の大麻では360°以上、時には何回転も旋回する。D片のみが反応を示さなかったのは、test に用いた資料が、何本かの繊維が互いに固着した形のものであったためと思われる。緯糸については、繊維同志の固着が著しくて、test に必要な比較的長い少数の繊維が採れなかったために、test を断念せざるをえなかった。

次に、織り密度について調べてみると、1㎝当たりの織糸数は、A、B、C、D、E片でいくらかのバラツキがみられる。また、1つの織物片でも部分によりかなりの差がある（例えば、A片の経糸では22～32、B片では24～40など）。この点から考えると、5つの織物片は必ずしも別個のものではなく、もとは一連のものであった可能性が考えられる。殊に、古代の布には余りみられることのない併糸（2本の糸を合わせて諸撚りにしてある）が、5つの織片に共通してみられることから、その可能性は一層強くなる。おそらく、残りの15片もまた同じ織物の一部であったと思われる。

A、B、C、D、Eの5片での織り密度の平均値（25.8×16.2）を弥生時代各期における他の

第4表　唐古・鍵遺跡出土の布についての調査成績

布記号	織物の種別	織り密度（対1㎝織糸数）（経）（緯）	経緯糸本数の比	経糸の twist test 旋回方向	経糸の twist test 旋回角度	経糸における併糸の有無	材質
A	平織	27×15	1.80	反時計（左）	5～10°	有	大麻
B	〃	30×16	1.88	〃	約10°	〃	
C	〃	24×14	1.71	—	—	〃	
D	〃	24×16	1.50	旋回せず	0°	〃	
E	〃	24×20	1.20	反時計（左）	約50°	〃	
平均		25.8×16.2	1.62				

注、　併糸はすべて諸撚り（右撚り）

第5表　弥生時代各期における布の織り密度

時　　期	織り密度（対1㎝織糸数）	資料数
弥生前期　（平均）	21.7×13.7	3
弥生中期　（平均）	16.1×　9.0	48
弥生後期　（平均）	17.7×　9.1	85
弥生時代の全平均	17.2×　9.2	計136
唐古・鍵遺跡（弥生中期初頭）　（平均）	25.8×16.2	5

注(1)　本表には土器圧痕によるものを含む。
(2)　唐古・鍵遺跡の数値はA　B，C，D，Eの5片での平均。

布での値と一緒に示したものが第5表である。本表をみると、弥生時代を通じて最も細密な布が作られたのは弥生前期においてである。それが、中期になると急に密度が粗くなる。にもかかわらず、同じ中期に属する唐古・鍵遺跡の布にあっては、いたって細密なのである。もっとも、弥生時代を通じて、個別にみるときは、本遺跡の布と同程度か、それ以上に細密な布を出した遺跡はいくつかある（例えば、福岡県小郡市横隈北田遺跡出土の布では25×10、静岡市高松登呂遺跡の布では28×16、28×14、熊本県菊池郡大津町西弥護免遺跡の布では25×20、山口県下関市綾羅木遺跡の布では20×18）。

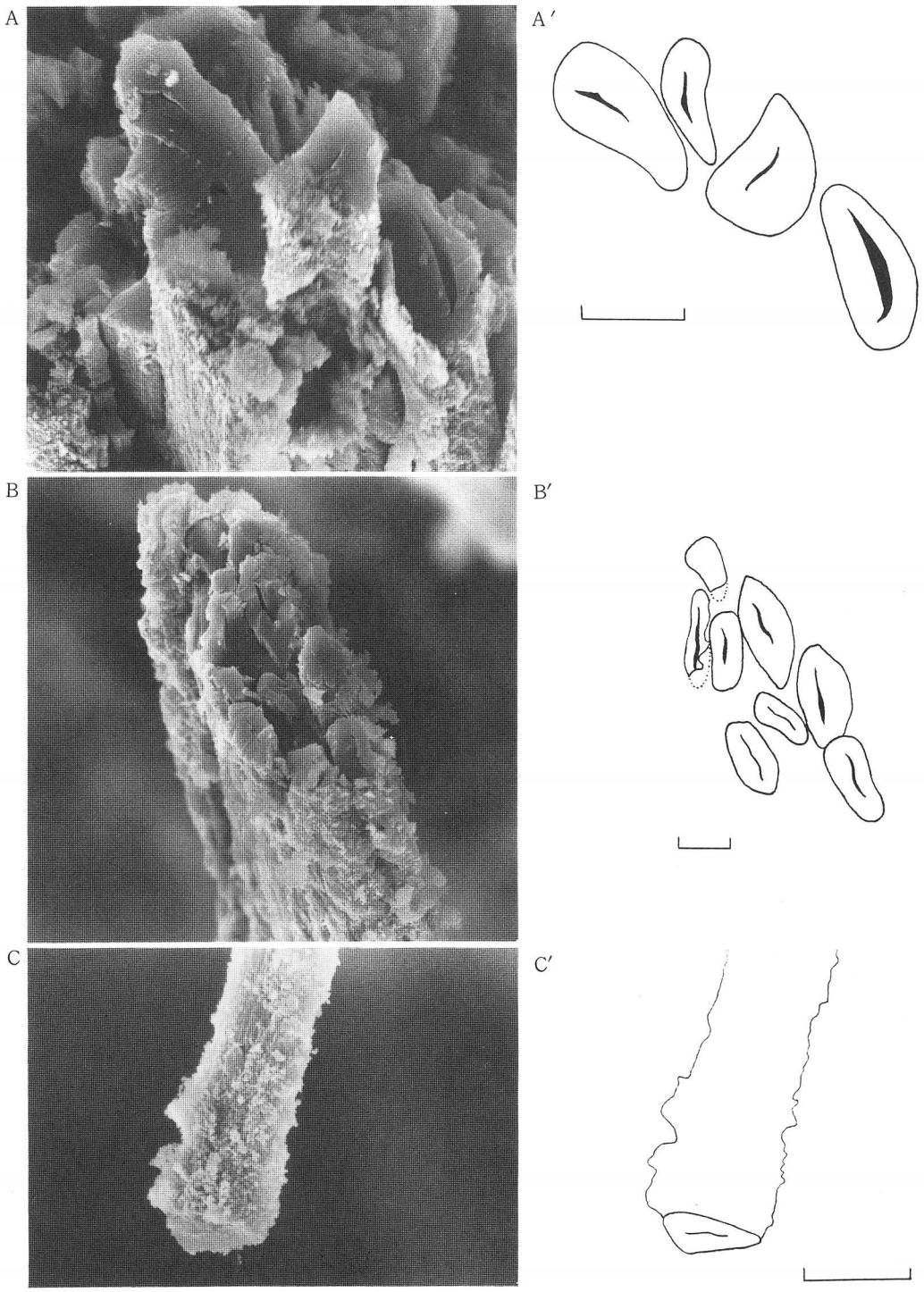
なお、参考までに、弥生時代各期の平絹の織り密度を示せば、第6表のようであり、第5表の数値に比べ、一層の細密さがうかがえる。布だけについていえば、弥生時代は歴代を通じて最も細密なものが作られた時代である。その弥生時代の布の中でも比較的高い織り密度を示した唐古・鍵遺跡の布は、歴代の布の中でも高い密度の部類に入ることになろう。古来、織り密度の高い布は高級品として扱われたから、出土の布も高級品に相違ない。

次に織糸についてみると、A～Eの5つの布は、写真からもある程度判別できるように、経糸がみな併糸されている。それは諸撚り(右撚り)にされた併糸で、下撚りは左撚りである。絹の場合の併糸は撚らないで、糸を2本並列させただけのものが多いが、布の場合は撚らなければならない。

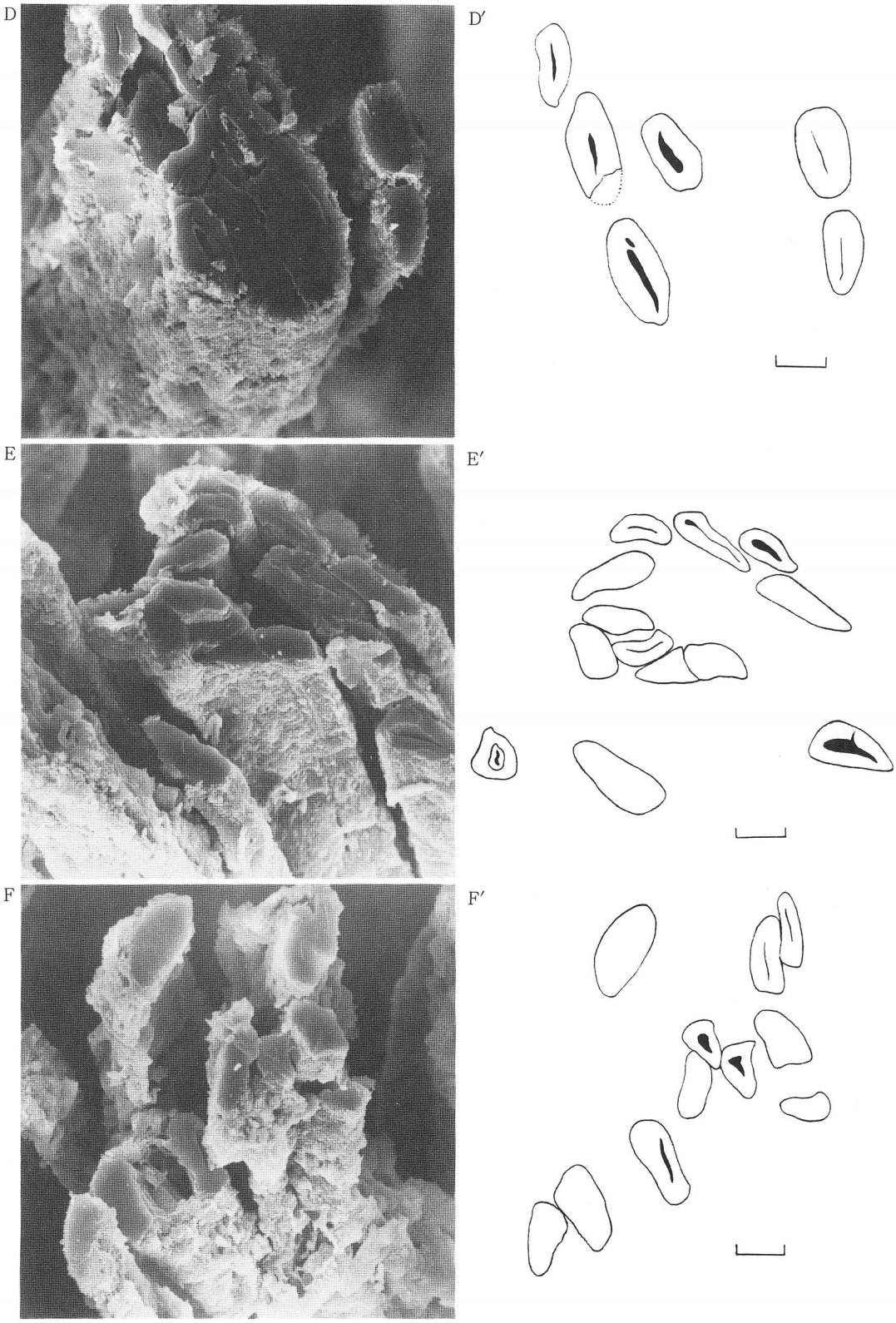
絹にあっては繊維面にセリシンという膠状物があって繊維を相互に付着させているので、繊維

第6表　弥生時代各期における平絹の織り密度

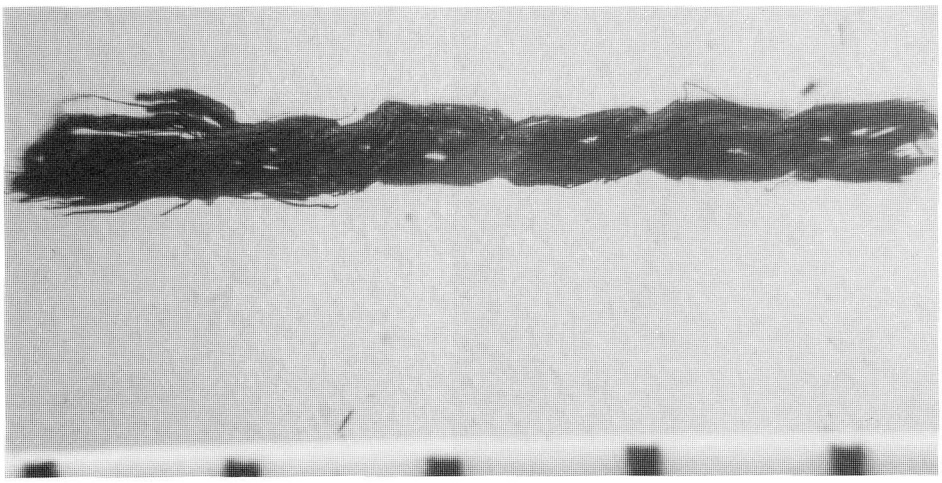
時　　期	織り密度（対1㎝織糸数）	資料数
弥生前期	40×20	1
弥生中期（平均）	29.0×18.4	16
弥生後期（平均）	20.5×14.8	4
弥生時代の全平均	27.9×17.8	計　21



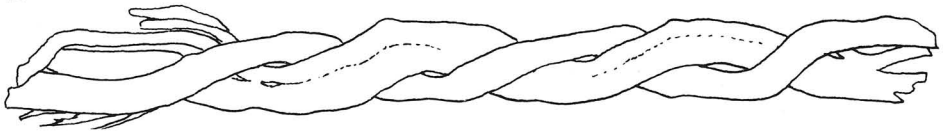
第61図　織物のＢ片を構成する糸の繊維断面の走査型電子顕微鏡写真（Ａ～Ｆ）と、それらの線描図（Ａ′～Ｆ′）scale：いずれも10μ


D
D′
E
E′
F
F′

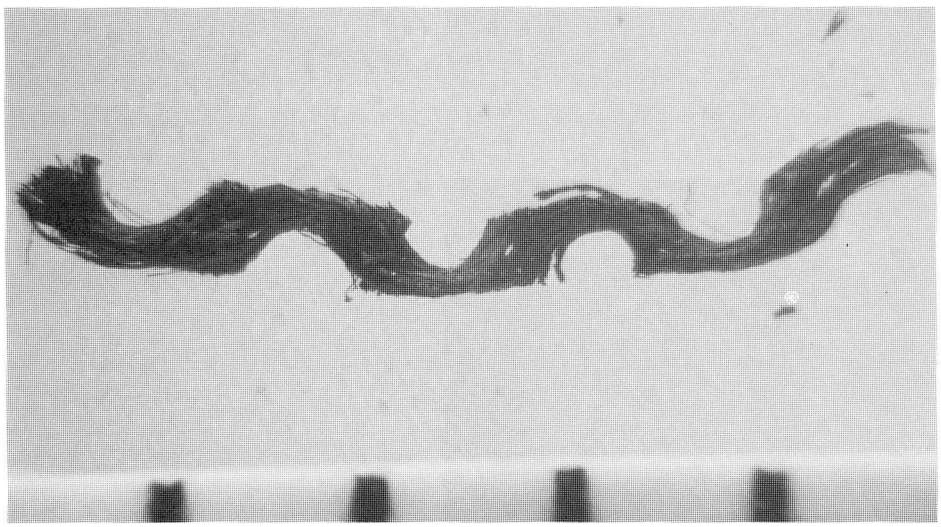
A



A′



B



第62図　織物のＢ片を構成する経糸の１本

Ａ　―織物面と同じ面を撮影したもの（２本を併糸して諸撚りにしている）

Ａ′―Ａ図の線描図

Ｂ　―Ａの糸を側方から撮影したもの　　scale：いずれも１㎜

がバラバラにならずにまとまっているのに対し、布の場合はそうした膠状物がないので、撚ることによって複数の繊維をバラバラにならぬようにまとめておかなければならないのである（第62図）。

Ｂ片には経糸のみでなく、緯糸の一部にも併糸がみられた。

織糸に併糸をみるのは、縑といわれる平絹においてであって、布には見られないのが普通である。縑では併糸されると同時に、緻密に織られる。それ故に、普通の平絹や紬、絁などとは異なり、高級品として扱われる。

唐古・鍵遺跡の布は一般の布とは異なり、縑と同じ糸構造と絹に近い細密さを具えている。まさしく、第一級品の布といえよう。

筆者はこれまでに、古代の日本、中国を通じて、このような品に遭遇したことがないが、文献的には中国殷代布にその例がある。すなわち、河北省豪城（こうじょう）台西村遺址（前1520±160年、殷代中期）出土の炭化布（材質は大麻）においては、経糸が２本の紡糸を右の諸撚りにしてあり、その織り密度は１㎝あたり（14～16）×（９～10）、（18～20）×（６～８）などで、糸幅は経が0.8～１㎜、緯が0.41㎜であった。[4、5、6)]

唐古・鍵遺跡の布が国産品か輸入品かの判別は、現段階では成し難いが、その技術については、中国から伝えられた可能性も考えられる。

終りに、本調査を行なう機会を与えられた田原本町教育委員会及び電子顕微鏡写真を撮って頂いた京都工繊大小西教授に感謝する。

文　献

１）田原本町教育委員会「昭和60年度唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報」田原本町埋蔵文化財調査概要４　1986
２）布目順郎「鬼虎川遺跡出土の縄について」東大阪市文化財協会『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.3、No.3　1988．2
３）東大阪市立郷土博物館（芋本隆裕執筆）「鬼虎川遺跡出土遺物にみる　弥生人のくらし」1983
４）河北省博物館　河北省文管所　台西発掘小組「河北藁城県台西村商代遺址1973年的重要発見」（『文物』1974年８期）
５）王若愚「従台西村出土的商代織物和紡織工具談当時的紡織」（『文物』1979年６期）
６）布目順郎「絹と布の考古学」（204頁）1988年　雄山閣

5．唐古・鍵遺跡の人骨

東京大学理学部人類学教室教授　埴　原　和　郎*

(1)　序

唐古・鍵遺跡から発掘された人骨は、木棺に納められた遺体２体のほか、断片的に発見された散乱人骨が２組ある（第７表）。これらはすべて東京大学理学部人類学教室に運ばれ、そこで研究がおこなわれた。

以上の人骨は、いずれも保存状態が極めて悪く、精密な人類学的研究に耐えるものではない。しかし、各個体から得られたわずかな情報を手がかりとしてできる限り生前の状態を推定した。

以下、個体別に記載する。

第７表　唐古・鍵遺跡出土の人骨一覧表

人　　骨	調査次数	出土遺構	層　位	時　期	備　　考
第１号人骨	第23次	第１号木棺墓	—	第Ⅰ様式	
第２号人骨	第23次	第２号木棺墓	—	第Ⅰ様式	
散乱骨	第13次	ＳＤ－０６Ｅ	最下層	第Ⅲ様式	ＳＤ－０６は環濠
散乱骨	第13次	ＳＫ－０７	上層	第Ⅳ様式	土壙墓と井戸が切り合っていたと思われる

(2)　第１号人骨

木棺に納められ、ほぼ全身の骨が揃っている個体を仮に第１号と呼ぶことにする。

この骨は、極めて粒子の細かい黒色の粘土に被われている一方で、骨質は甚だしく脆弱化し、また破損しているために、粘土から骨を分離することが困難である。したがって計測はもちろん、形態の観察も不可能に近い。以下に述べる事項は、このような骨から得られた断片的データに基づくものである。

埋葬状態

仰臥伸展葬で、全体として上を向いているが、頭蓋のみはほぼ直角に左側を向いている。このような姿勢は、遺体がまだ軟部を残している場合を考えると不自然である。したがって、木棺内に安置するときに無理に首を左側に捻ったか、または軟部が腐敗した後で自然にこの様な角度になったかのいずれかと考えられる。

一方、頭蓋の頂部が木棺の側板に接していること、および左右の膝関節がわずかに外側に屈曲している状態から察すると、元々木棺の長さが短く、この遺体を入れるにはやや小さかったように思える。したがって、木棺に安置するとき、かなり無理に遺体を押し込んだという可能性がある。頭蓋の不自然な捻れも、このような理由によるのかも知れない。

＊現職　東京大学名誉教授・国際日本文化研究センター教授

写真2　第1号人骨全容

上肢は自然に伸ばしているが、左前腕のみは軽く内側に屈曲し、左手が下腹部の位置にある。

身長

伸展葬であることから、頭頂と足の間の長さを計ると、約1,600㎜であった。また大腿骨の自然位全長は約430㎜であるから、ピアソンの身長推定式によって計算すると、約1,620㎜となる。すでに述べたように、この遺体はかなり無理に棺に押し込まれたと思われるので、直接計測による身長の推定値はやや小さいという可能性がある。したがってこの個体の実際の身長は、おそらく1,600㎜を越えていたと考えてよいであろう。

性別

身長が1,600㎜以上であったとすれば、この個体は、当時としてはかなり高身長であったといえる。そのほか、四肢骨が太く頑丈であること、筋粗面の発達が良好であること、恥骨の坐骨枝が太いことなどから、この個体は男性であると考えて差し支えない。

年齢

この個体については、骨から年齢を推定することは不可能である。しかし歯が残っているので、その咬耗度からおよその年齢を推定することができる。検査した歯のうち、切歯、犬歯、小臼歯、および第1大臼歯の咬耗度はブロカの2度に相当し、第2および第3大臼歯は1度に相当する。つまり、全体として歯の咬耗は余り進んでおらず、この所見は、この個体がまだかなり若いことを示している。おそらく、20歳台後半から30歳台前半に死亡したものと思われる。

歯

多くの歯は粘土中に埋もれ、取り出すことが出来なかった。したがって、観察可能な歯について、特に注目される点のみを記載する。

1）切歯におけるシャベル形態は比較的強く、moderate shovel に分類される。これはモンゴロイドの特徴をよく示している。

2）下顎第１大臼歯はＹ５型（Dryopithecus pattern）を示す。

3）右下顎第２大臼歯の中心部にむし歯が認められる。

4）下顎大臼歯の大きさの順位はＭ１＞Ｍ２＞Ｍ３である。

5）右下顎第３大臼歯にエナメル滴（enamel pearl）が存在する。

歯に見られる以上の特徴は、いずれも現代日本人に普通に存在するもので、とくに変わった所見はない。

エナメル滴はかなり珍しい特徴と言えるが、日本人では稀有というほどではない。とくにアイヌやエスキモーに比較的多くみられること、歯の退化と関係していると考えられることから、この形質もまたモンゴロイドにかなり広く分布していると見てよいかも知れない。児玉作左衛門によると、エナメル滴は現代日本人の5.0％、アイヌの20.0―40.0％に出現するという。したがって、この形質も日本人として特殊のものとは言い難い。

要するに、この個体の歯は、ごく一般的な日本人の特徴を備えているといってよいであろう。

脛骨

この個体の脛骨は極めて扁平である。右脛骨の栄養孔の部位で計測すると、矢状径（前後径）36㎜、横位21㎜であるから、脛骨示数は58.3となる。人類学では、脛骨示数が62.9以下の場合を扁平脛骨というので、この個体の脛骨はかなり強い扁平性を示すといえる。扁平脛骨は縄文人で約17％、古墳人で約８％にみられるから、脛骨の扁平性に関する限りは、この個体は縄文的特徴を濃厚に残していると判断される。

(3)　第２号人骨

木棺に納められ、頭蓋以外の骨が殆ど残っていない個体を第２号人骨と呼ぶことにする。この個体では、頭蓋冠と、左大腿骨の一部の破片のみが残存し、他の骨は残っていない。おそらく、他の骨は発掘の際、粘性の強い粘土とともにえぐりとられたのであろう。したがって、骨の観察は第１号人骨よりさらに限られる。

写真３　第２号人骨頭蓋

埋葬状態

仰臥伸展葬と思われる。頭蓋冠の位置

からみて、顔面は正面（立位では下方）を向いているが、これは軟部が腐敗してから頸椎が不自然に屈曲したためであろう。

頭蓋冠

頭蓋では頭蓋冠のみが残り、顔面頭蓋は残存していない。脳頭蓋は厚く、前頭骨で最大10㎜に達する。頭蓋縫合はまだ完全に開離し、この個体が若いことを示している。

大腿骨

左大腿骨の一部が残存している。いずれも小破片であるため、その形態はよく分からないが、骨緻密質はかなり厚い。しかし全体として余り大きいとはいえず、いずれかといえばやや華奢な印象を与える。

性別

前頭骨や大腿骨破片の緻密質の厚さからみて、男性と推定される。しかし男性としては、大腿骨がやや華奢であり、第１号人骨ほど頑丈ではなかったように思われる。

年齢

頭蓋縫合がほぼ完全に開離していることから、20歳前後、または20歳台前半と推定される。

身長

身長を推定しうる長骨が残っていないため、不明である。

⑷　散乱骨

唐古・鍵遺跡第13次発掘の際得られたもので、ＳＤ―06ＥおよびＳＫ―07という番号がつけられている散乱骨があるので、これらについて記載する。

ＳＤ―06Ｅ中期溝散乱骨（写真４）

右第６肋骨の骨幹部のみが残されている。保存状態は良好で、骨は硬い。骨表面が滑らかであることから、比較的若い個体のものと思われる。

性別は確定できないが、骨の大きさがやや小さい方に属し、多少華奢な感じを与えることから、女性という可能性がある。

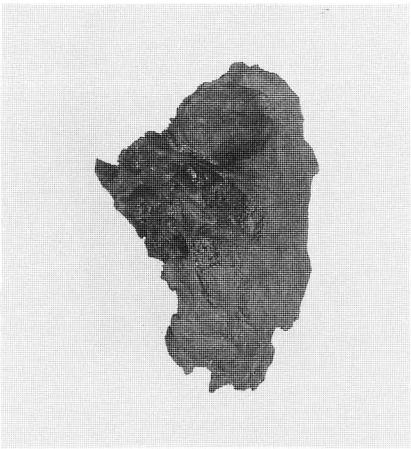


写真４　ＳＤ―06Ｅ中期溝散乱骨

ＳＫ―07出土散乱骨（写真５・６）

右鎖骨の外側約⅓、右上腕骨近位部約½、右尺骨のほぼ全体、および右橈骨近位部約½が保存されている。ただし、これらの骨では、いずれも骨端部（関節の部分）が欠損している。

骨表面はやや風化しており、ＳＤ―06Ｅとは異なる。またＳＤ―06Ｅに比較して骨表面の粗化がわずかに進んでいるので、年齢はやや高いと考えられる。

写真５　ＳＫ―07人骨出土状況

しかしほぼ40歳以上の個体にみられる、いわゆる老化現象は認められない。

骨は比較的細く、頑丈とは言えないが、尺骨の長さからみて、男性である可能性が高い。また男性とすれば、筋の発達は比較的弱かったと思われる。

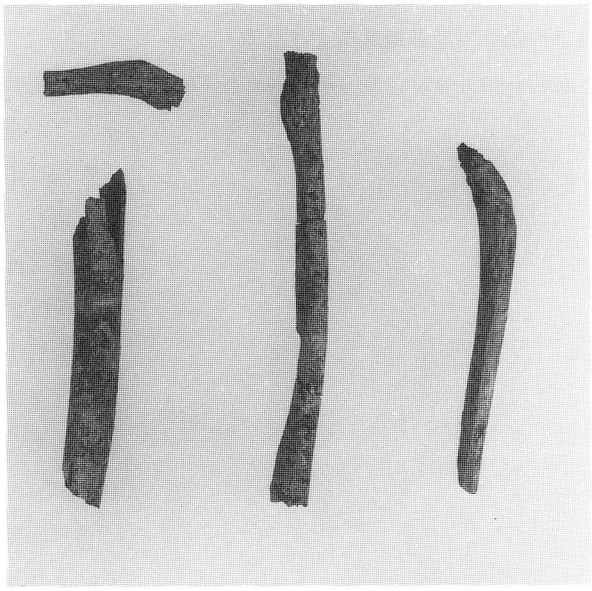


写真６　ＳＫ―07出土散乱骨

⑸　考察

以上に記載した４個体の人骨を全体としてみると、縄文人骨の頑丈さはほとんどみられず、わずかに第１号人骨が男性らしい頑丈さを示し、生前はよい体格の持ち主であったことが推測される。

また、第１号人骨は身長が高い一方で、脛骨の強い扁平性を示している。顔面頭蓋の特徴が分からないので筆者も自信をもって言うことは出来ないが、弥生前期の終末期という時代を考える

と、この個体は渡来系弥生人と、在来の縄文系弥生人との中間形態を示すと言えるように思える。少なくとも、典型的な渡来系弥生人とはいえず、また典型的な縄文的弥生人ともいえない。したがって、両者の混血という可能性がもっとも高い。

しかし同時に、第１号人骨については、縄文人の直系の子孫がやや進化したものという可能性を捨てることは出来ない。

第１号および第２号人骨の血縁関係について

この２体の人骨は、埋葬状態からみて、血縁者かもしれないという可能性があるとのことである。しかし人類学的には、保存状態がかなり悪いため、それを積極的に証明することが出来ない。ただし、もし互いに血縁者であると仮定すれば、年齢の点からみて、この２体は親子とは考えがたく、おそらく兄弟または従兄弟など、少なくとも２親等以上離れたものであったと思われる。

また以下のことは、必ずしも血縁性を示すものではないが、骨の所見から客観的に推定しうる点である。

１）骨の頑丈さ、あるいは骨緻密質の厚さからみると、２体は両者とも相当によい体格を持っていたと思われ、この点は比較的よく似ている。

２）骨から死因を推定することは不可能であるが、２人がほぼ同時に死亡したとすれば、おそらく流行性感染症または食中毒のような、急性の疾病によるという可能性が高い。このことは、両者が共同して、または接近して生活していたことを示唆している。

他の人骨は、ＳＤ―06Ｅを除いて男性であると推測されるが、男性にしては骨がやや華奢である。これは、やはり弥生時代の生活形態の影響を受けたためと考えられる。第２号人骨、ＳＫ―07ともに若いとはいえ、筋の発達がやや弱く、この点は縄文人と比べて大きく異なる特徴である。

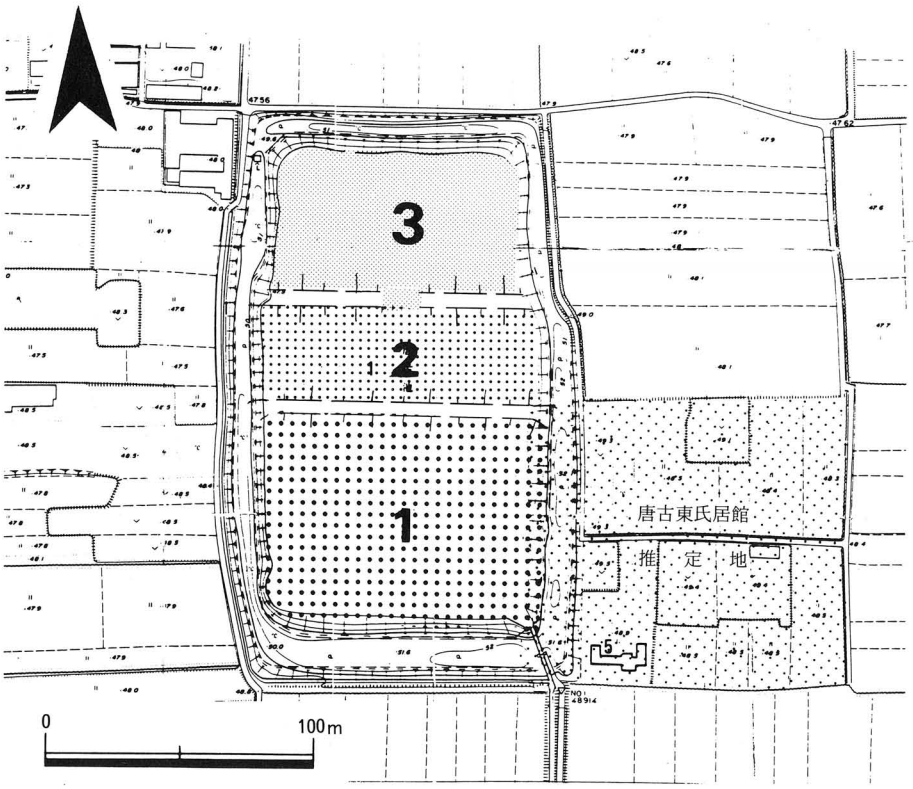
すでに述べたように、唐古・鍵遺跡の人骨は保存状態が悪いため、人類学的計測が不可能であった。したがって、他の集団と統計学的に比較することが出来ず、また、観察可能な部位も極めて限られたものでしかなかったため、客観的分析に必要なデータが得られなかった。しかし、断片的に観察し得た結果から推測して、これらの人骨は縄文人とは異なり、弥生人の特徴を示しているといえる。また渡来系弥生人と在来系弥生人との混血かもしれないという可能性を考慮に入れて、唐古・鍵遺跡の文化遺物を研究することは重要と思われる。

6．まとめ

第23次調査は昭和60年から61年にかけて厳寒の中でおこなわれた調査であった。池内部の調査で、発掘前は「中央砂層」にあたる部分でもあることから、遺構は少ないように思われた。しかし、調査が進展し、その内容が明らかにされるにつれ、予想外の成果を多くあげることができた。これについての事実報告は前に記した通りであるが遺構・遺物が多く、全てについて触れられなかった。これについては正式報告に譲ることとし、現時点まで判明した点をここで明らかにし、まとめておきたい。

唐古池の築造　唐古池は『大和志』によれば『日本書紀』に登場する「韓人池（からひとのいけ）」として比定されており、また、この弥生時代の大遺跡の上にいつ池が作られたのかというのは重要な問題であった。今回の調査とそれ以前の１次・17次調査や文献、伝承等を総合し、池築造に関することをこの機会にまとめておきたい。

唐古池は文献的には上記の『日本書紀』の他、「興福寺雑役免坪付帳」（1070年）には田中庄の鋪設免田として「十四条一里廿坪丁　廿一坪五反　廿二〻八反　廿五〻丁　廿六坪九反　廿七坪三反」[1]とあり、唐古池地内（廿二〻八反）とその周辺が田地として存在したことがわかる。そ



第63図　唐古池の築造順序図

の後の記録としては「元文二年巳二月吉日両村池之絵図」[2)](写真７・８)がある。この絵図についてはその他の池の築造年代、絵図等から唐古池の築造に関して考察した「唐古池の築造年代を追って」[3)]がある。これによれば　八尾村用水絵図（唐古池は記載されていない）の作製年代の推定、唐古池周辺の池の築造時期が元禄、享保年間に集中していること、江戸初期の作と思われる「舞庄絵図」に池の記載がないことなどから、「元禄十六癸未年二月日普請仕候」とあるのが築造であると考察されている。これは文献等から江戸時代の元禄16年（1703）に池が築造されたとするもので、文献面での成果である。このような成果と考古学的な成果はいかに照合されようか。

考古学的成果を通して唐古池周辺の土地利用について考えてみると次のようになる。

1．弥生時代前期から古墳時代後期まではムラの盛衰はあるとしても継続的にムラが営まれている。

2．古墳時代後期に小古墳が築造された可能性が出土した遺物等からいえる。

3．飛鳥・奈良時代の遺構・遺物はなく、内容は不明。居住地ではなかったと思われる。

4．平安から室町時代にかけて、唐古池の東南側に屋敷地が形成される。

5．屋敷が解体後、耕作が原因と思われる中世素掘溝がつくられる。

6．素掘溝の上に池の堤が築かれる。これが現在に至る。

大きく６つの変遷がある。この中で重要なのは４～６である。４の屋敷地では板組の井戸や曲物枠の井戸などりっぱな作りのものがみつかっている。また、枡が出土していることも重要である。このような状況から『大乗院寺社雑事記』にみられる「唐古東」[4)]氏か、その前身の可能性が高い。

６の堤防の調査では、中世素掘溝がトレンチ全面でみられ、その上に盛土がおこなわれている。盛土は池の中央部分で南と北で大きく土質が変化していることから、元は池が南側にあって北側へ拡張したことが看取された。これによって元の池は一町四方の池で、その後北へ拡張されたことがわかるが、北への拡張は２回にわたっている。１回目は池の南から３分２の地点で堤防のラインがやや小さめになるところである。２回目は現状の池をさしている（第63図)。このようなことから、中世以降の変遷としては考古学的には次のようになる。居敷地→耕作地→池の築造→池の拡張（１次）→池の拡張（２次）となる。

では、池の築造と拡張の年代は文献と合致するであろうか。先に記した論文をもとにすれば、池の築造は元禄16年で、１次の拡張にあたる記載はないことになる。ここでは、元禄16年の普請は１次の池の拡張をさしていると考える。これにあたっては唐古村の文書中に池の普請に関した記載があり、宝永８年（1711）に「長六拾七間　横五拾弐間」の池浚えをおこなっている。[5)]これは南北約120ｍにおよぶもので、宝永８年には既に１次の池拡張が完成されており、池浚えの必要が生じていたことを示している。とすれば、元禄16年（1703）の普請は一町四方の池より、既に南北が内のり120ｍの池にするための普請であったと思われる。問題になるものとしては「八尾村用水絵図」であるが、これは八尾村までの用水を中心に描いたもので、引水方向である八尾

村の東南方向が重要なものである。これがために、八尾村の北東部分にあたる唐古池や鍵池は描かれなかったと推察できる。では、一町四方の池はいつ築造されたのであろうか。これに関しては全く年代を得ることができないが、考古学的には江戸時代に入ると思われ、状況的には17世紀後半頃かと思われる。また、２次の拡張は宮本誠氏によれば、文政４年（1821）の絵図に拡張があることから、元文元年（1736）から文政４年の間に拡張されたと推定している[6]。これは考古学的にも拡張された堤防盛土内より近世陶磁片が出土していることからほぼ一致する。

以上のことから、唐古池は17世紀代に一町四方の池として築造され、18世紀に入る頃に北へ１次の拡張、さらに18世紀後半から19世紀の一時点で２次の拡張がおこなわれたことが明らかになっ

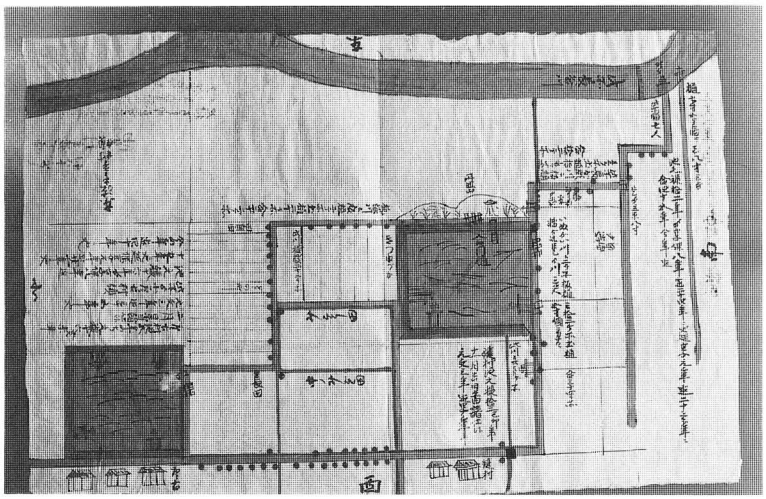


写真７　元文二年巳二月吉日両村池之絵図（左が北）

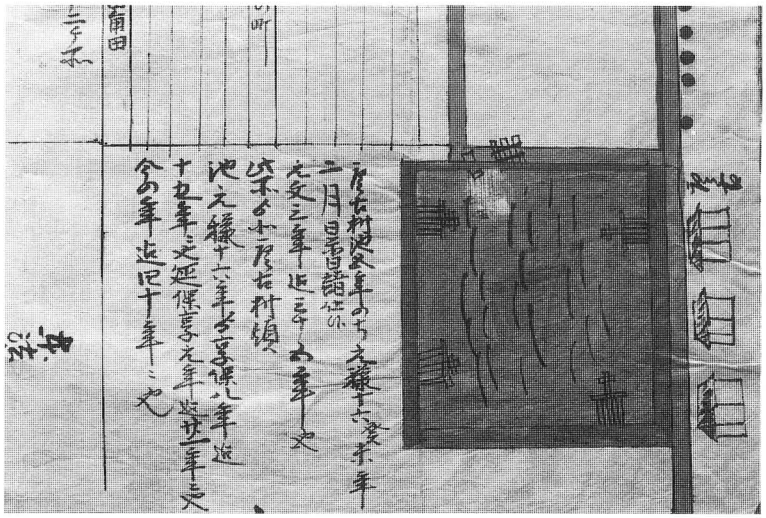


写真８　唐古池普請部分拡大図（下が北）

た。したがって、唐古池は近世につくられた大和特有の皿池の一つといえる。

木棺墓の発見　木棺墓は唐古・鍵遺跡において初めて検出したものであった。2基の木棺墓は弥生時代前期末のもので、この時期においては、ムラはまだ小集落単位であって唐古池北部を中心とする「北地区」の墓地であったと考えられる。墓域は小さく小溝等で区画されており、方形周溝墓のような大規模なものにはならない。また、木棺墓の上部には第Ⅱ様式の遺構がつくられていることから、前期末の短期間の墓域であったと推察される。

木棺は側板のみ整えているが、1・2号木棺ともに小口板の一部がなく、また、1号では底板もない簡易な構造の木棺であった。1号木棺では、底板のかわりに樹皮状の植物を敷くということもしている。この木棺が、どのように位置づけられるのか、他の木棺例や方形周溝墓を検出した段階に検討をおこないたい。

布製品の出土　唐古・鍵遺跡から出土する土器に布の圧痕があったことは既に知られていたし、他の遺跡でも出土例は多い。しかし、布製品の出土は限られてしまう。本遺跡では初めての出土で、西日本の数少ない一例となった。時期は第Ⅱ様式で、若干の第Ⅰ様式土器を含んでいる。土坑の堆積層が炭化物層という保存状態の良さと、堆積土を全てサンプリングし、水洗した結果であった。低湿地調査の方法を考えていく必要があろう。さて、布は縑と同じ糸構造をもつ緻密な布であることが判明した。国産あるいは舶載を別にしても、この唐古・鍵遺跡に中期初頭頃に高級な布が存在したことは、文化水準の高さとともに朝鮮製品の国内の流入が活発な時期にあって中国的要素を取り入れていた点で重要であろう。

巴形銅器等の出土　この調査ではいくつかの重要な遺物が出土している。巴形銅器、銅鐸形土製品、卜骨、石棒、条痕文土器などの搬入土器がある。

巴形銅器は西日本では数少ない一例で、長野県武石例や滋賀県五村例につづく東端地域の一画を占めることになった。残念ながら中世遺構からの出土で、本来の時期や遺構については不明である。しかし、形態的には大きさも大きくなり、七脚に復元できるものであるが、古い要素を多々残している点は注目される。これに類似するものはまだ発見されておらず、その系統は判然としないが、畿内での製作とすると最初の段階で、あるいはさらに西方に求める必要もあろう。

銅鐸形土製品や卜骨、石棒、条痕文土器は本遺跡においても数点から数十点出土しているものである。銅鐸形土製品は第Ⅲ様式から第Ⅴ様式まで時期ごと存在する遺物となった。卜骨はＳＤ―103から出土したものが第Ⅱ様式の資料で、肩甲骨を使用するものとしては最も古い一例となる。これまで、本遺跡では前期は大腿骨などの骨断片を使用していたが、いつ頃に肩甲骨に変わるのかが判明していなかった。また、焼灼の方法も定型化している点はこの時期に卜骨祭祀が一定方法を用いることで確立していったといえる。

搬入土器として注目されるものとして、内傾口縁土器や厚口鉢などがある。これらはこれまでの調査でも数多く出土していた遺物であったが、これに伴う条痕文の壷が未検出であった。この調査では厚口鉢とともに貝殻で直線文を入れる広口長頸壷が出土した。また、この他、貝殻施文

による直線文等の土器も数点確認できた。この二種をセットとして考えていいのか、今後さらに資料の増加を必要とするが、伊勢湾岸地域の土器の搬入経路とともに搬入元をかなり限定できるようになってきたと思う。また、その後の中期全体を通じて恒常的にこの地域の土器が搬入されていることは、この地域間の結合がかなり強固なものであったことが窺えよう。

注

1）興福寺文書『平安遺文』九の四六三九号
2）鍵　竹村利美家文書
3）町史編さん室「唐古池の築造年代を追って」『田原本の歴史』第3号　田原本町　1984
4）『大乗院寺社雑寺記』（文明七年十一月廿五日条）
5）天理図書館　保井文庫蔵
6）宮本　誠「田原本の溜池」『田原本の歴史』第3号　田原本町　1984

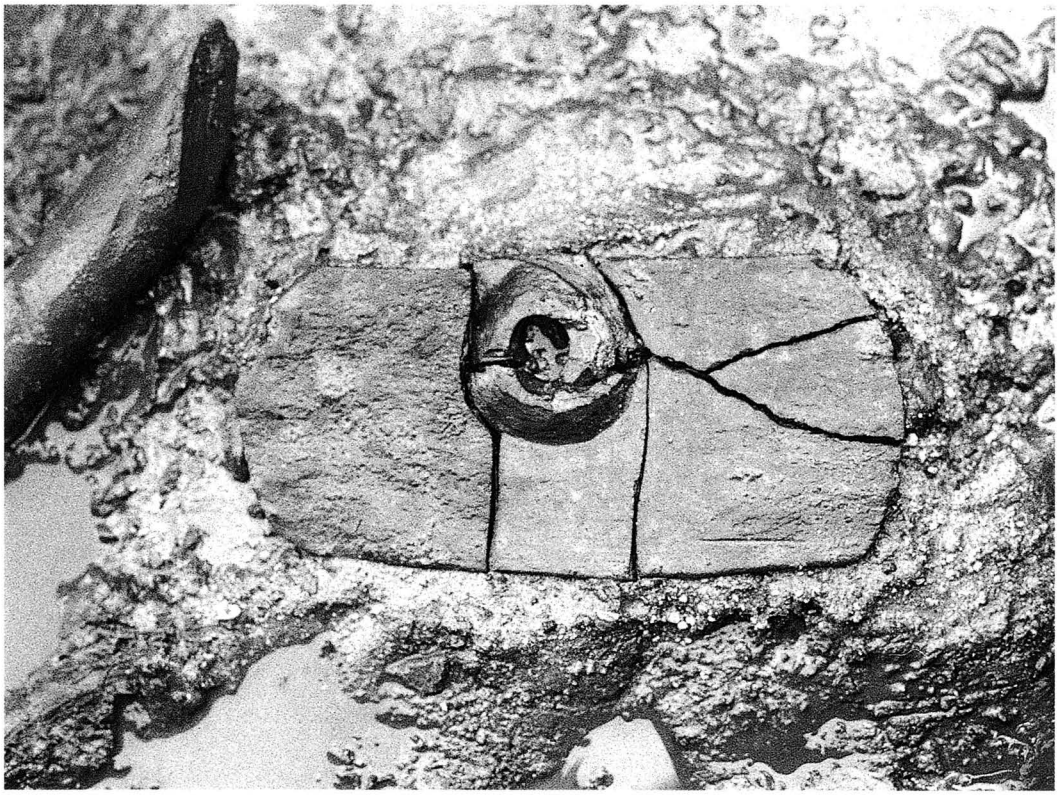
図　　版

第21次調査……図版 1 ～ 3
第23次調査……図版 4 ～63

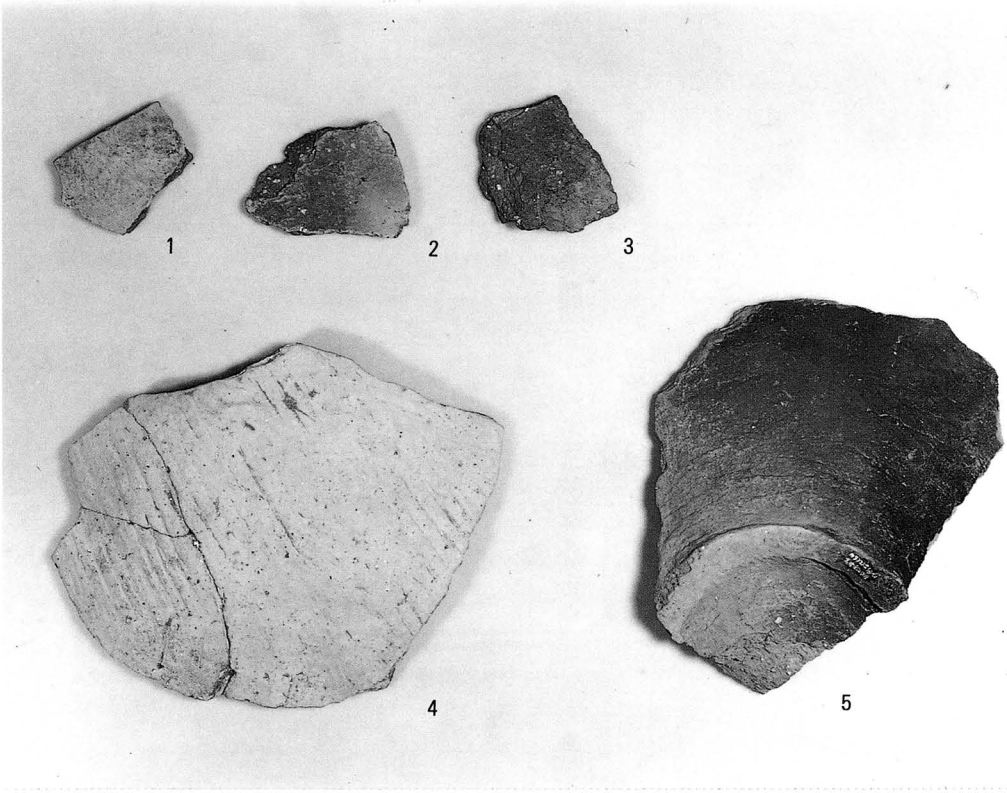
a。調査前の状況

b．ＳＤ―01完掘状況

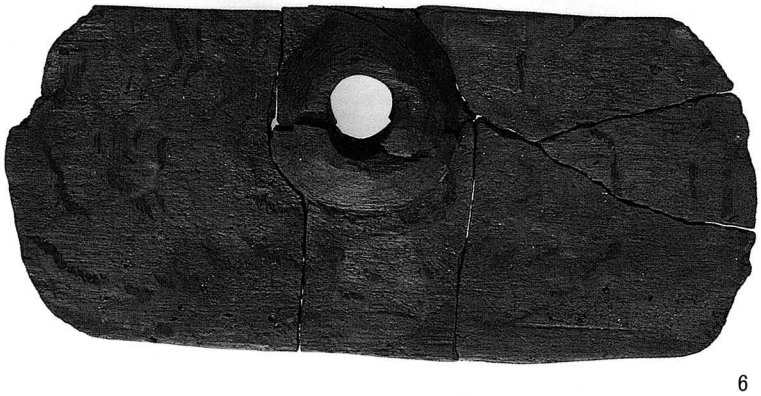
a．ＳＤ―02完掘状況



b．ＳＤ―02横鍬出土状況



1～4－ＳＤ－02出土土器、5－ＳＤ－01出土土器



6－ＳＤ－02出土横鍬